ムードとモダリティ　第2版（1章～4章）

富所明秀
神田外語大学

江波戸文康
千葉大学大学院修士課程修了

浜之上幸
神田外語大学

I　序章

近年モダリティは，類型論研究のテーマとして妥当で汎言語的な文法範疇として認知されるようになった．テンスやアスペクト，モダリティは節の範疇であり，また必ずしもというわけではないが，一般的に動詞の複合体の中でマークされるという点において，これらは密接に関連する文法範疇である．

概念上これら 3 つの範疇は出来事｛event｝，すなわち発話によって報告された状況に関連するものである（簡略的な説明ではあるが，本書全般における‘出来事｛event｝’という術語は，出来事，活動，状況，位置づけなどを網羅している）．[1]比較的明らかなことに，テンスは出来事の時間に関連するものであり，一方アスペクトは出来事の状態，詳しくは出来事の‘内的時間構成｛internal temporal constituency｝’という術語になるが，これに関連するものである(Comrie 1976:3)．モダリティは出来事を叙述する命題の位置づけに関連するものである．

1.1　基本概念

1.1.1　現実と非現実｛Realis and Irrelis｝

モダリティは出来事のあらゆる特徴を直接言及するものではなく，命題の位置づけを言及するものであるという点でテンスやアスペクトとは異なる．モダリティの分析に接近するためにありうる方法としては，‘非モーダル｛non-modal｝’と‘モーダル｛modal｝’の違い，あるいは‘叙述｛declatative｝’と‘非叙述｛non-declarative｝’の違いというように，二元体を区別し，その違いを‘事実｛factual｝’対‘非事実｛non-factual｝’，あるいは‘現実｛real｝’対‘非現実｛unreal｝’という概念上のコントラストをなすものとして関連付け

ることがある.

しかしこれらの術語は十分なものではない（1.1.2 を参照）. 区別をする上では‘現実｛realis｝’と‘非現実｛irrealis｝’という術語が近年用いられつつある. これらは明らかに専門的であるというメリットを持っているので, 他の聞きなれた術語に比べて周辺的な意味を避けることができる.‘現実｛realis｝’と‘非現実｛irrealis｝’の区別について Mithun(1999:173)は,「‘現実｛realis｝’は, 直接の認識を通して知りうることが現実化したり, 実際に起った, あるいは起っているものとして状況を描写するものである.‘非現実｛irrealis｝’はイメージを通してのみ知りうることを単に思考の領域の中のこととして状況を描写するものである」とした.

類型論における‘現実｛realis｝’と‘非現実｛irrealis｝’の違いに関する妥当性については疑問もあった(7.3 を参照). またモダリティに組み込まれるすべての分析にとって, それが必ずしも必要ではないということは認められなければならない. しかし**現実**｛Realis｝, **非現実**｛Irrealis｝[2)]という類型論の範疇として文法化された‘現実｛realis｝’,‘非現実｛irrealis｝’という概念的特徴を表す見解は有用なものであり, 本書ではこれを用いている（その術語は初めのうちは命題の文法的な位置づけを決定する概念的な特徴として用いられているが, 進むにつれ, 類型論の範疇である‘**現実**｛Realis｝’,‘**非現実**｛Irrealis｝’を言及するために頭文字を大文字で用いられている. - 1.7 を参照せよ. これらはまた, いくつかの言語では関与する言語の特定の文法範疇に用いられる）.

すべての類型論研究において, 言語と文法範疇の関連の仕方には数多のヴァリエーションがあり, 恐らく他の文法範疇よりもモダリティに関するものが多いだろう. 確かに極めて基本的なレヴェルで, 異なる言語間で**現実**｛Realis｝, **非現実**｛Irrealis｝として扱われる範疇においてヴァリエーションがある. ある言語では命令｛commands｝を**非現実**｛Irrealis｝としてマークする場合もあるが, 他の言語ではそれらを**現実**｛Realis｝としてマークする場合もある. 一方, また別の言語ではそれらをモダリティの体系の部分として扱わない場合もある. 未来や疑問, 否定, 報告などの扱いにも類似したヴァリエーションがある.

以下のいくつかの用例にはあらゆる種類の特徴が含まれ, また言語によってはそれらの方法が非常に異なることを表している. まず初めに英語では命題に関する判断｛judgement｝と断言的な陳述｛categorical statement｝とを区別するためにモーダル動詞を用いる. モーダル動詞のない最初の例とモーダル動詞を伴った他の二つの例を比較せよ.

Mary is at home	メアリーは家にいる.
Mary may be at home	メアリーは家にいるかもしれない.
Mary must be at home	メアリーは家にいるに違いない.

第二に，Klein(1975:356,353)にあるように，スペイン語では真であると信じられていることと，疑われていることとを直説法と接続法を使うことによって区別する．

Creo　que aprende
I believe that learn+3SG+PRES+IND
'I believe that he is learning'

私は彼が学んでいることを信じている．

Dudo　que aprenda
I doubt that learn+3SG+PRES+SUBJ
'I doubt that he's learning'

私は彼が学んでいることを疑っている．

第三に，パプアニューギニアの言語である Amele 語(Roberts 1990:371-5)では，'現実｛realis｝'と'非現実｛irrealis｝'という文法的なラベルを実際に与えられた形式が，'遠過去｛remote pas｝'，'今日の過去｛today's past｝'，'習慣的な過去｛habitual past｝'，'現在｛present｝'と，'未来｛future｝'，'命令｛imperative｝'，'勧告｛hortative｝'，'反現実｛counterfactual｝'，'否定｛negative｝'とを区別するのに用いられる．現実である'遠過去'と，非現実である'未来'の用例は，現実を表すマーカーの *-en* と，非現実を表すマーカーの *-eb* がそれぞれ従属節の中の動詞と結合している．

ho　bu-busal-en　　age qo-in
pig SIM-run out-3SG+DS+REAL 3PL hit-3PL+REM.PAST
'They killed the pig as it ran out'
彼らは豚が走り出したときそれを殺した．

ho　bu-busal-eb　　age qo-qag-an
pig SIM-run out-3SG+DS+IRR 3PL hit-3PL-FUT
'They will kill the pig as it runs out'
彼らは豚が走り出したら殺すだろう．

1.1.2　主張の概念｛The notion of assertion｝

'事実｛factual｝'と'非事実｛non-factual｝'の対立，または'現実｛real｝'と'非現実｛unreal｝'の対立は**現実**｛Realis｝と**非現実**｛Irrealis｝の違いを明確に，かつ十分に説明しているものではない．'真｛true｝'と'偽｛untrue｝'

という観点からの説明さえも満足のいくものではない．いかなる場合においても論理的なコノテーションは避けた方が賢明かもしれない(Bybee, Perkins, Pagliuca 1994:239 を参照).

しかし非常に役立つ一連の文献がある．ヨーロッパ諸語では**現実**｛Realis｝と**非現実**｛Irrealis｝を区別するために伝統的な術語である‘直説法’と‘接続法’の用法について議論されてきた．またこれらは‘主張｛assertion｝’と‘非主張｛non-assertion｝’という観点も解釈しうるものである(Bolinger 1968; Terrell and Hooper1974; Hooper 1975; Klein 1975)．最も簡にして要を得た記述はLunn(1995:430)のものであり，ここでは直説法の選択は主張に関連し，接続法の選択は非主張に関連するとした．スペイン語における従属節での用例を使ってLunn(1995)は以下の3つの理由によって，命題は主張されない場合があることを示唆している．

(i) the speaker has doubts about its veracity:
Dudo que sea buena idea
I doubt that be+3SG+PRES+SUBJ good idea
‘I doubt that’s a good idea’

（ｉ）話し手はその真実性について疑いを持っている．
私はそれが良いアイデアであることを疑っている．

(ii) the proposition is unrealized:
Necesito que me devuelvas ese libro
I need that me return+2SG+PRES+SUBJ that book
‘I need you to return that book to me’

（ii）命題は現実化されない．
私はあなたにその本を返してくれることを望んでいる．

(iii) the proposition is presupposed:
Me alegra que sepas la verdad
me it pleases that know+2SG+PRES+SUBJ the truth
‘I’m glad that you know the truth’

（iii）命題は前提される．
あなたが真実を知ったら私は嬉しい．

この分析で重要なことは，接続法という**非現実**｛Irrealis｝マーカーの選択は事実と事実ではないものとの区別によるものではない（ましてや真実か真実ではないものとの区別でもない）ということを明確に示している点である．主張されたことなのか，あるいは主張されてないことなのか，といった区別に基づ

いて分析が行われている．これは前提されていることに関連する 3 番目の用例で特に明確になる．なぜならここでの前提（あなたが事実を知る）は明らかに現実化されているもの(factual)であるからである．話し手と聞き手の両者によって前提されていることが知られている．確かに Givón(1994:304)は，知られているために‘超現実｛super realis｝’が現われることがあるとコメントしている．したがって，ここで問題とされているのは事実｛factuality｝や確信｛certainty｝，真実｛truth｝といったことではない．問題となっているのは，主張されていることは何もないということと，情報としての価値がないということである．なぜなら話し手と聞き手の両者は命題を受け入れているからである．このような理由によって命題は**非現実**｛Irrealis｝として扱われ，主張されていない前提が命題となる．

非主張の命題には他のタイプがある．これらは 1.4 で議論される．

1.2　二つの基本的な識別

1.2.1　ムードとモーダル体系

言語学がモダリティの全範疇を文法的に扱うのには基本的に 2 つの方法がある．これらは（ｉ）モーダル体系，（ii）ムードといった観点から識別される．両者は一つの言語の中で現われる場合がある．例えばドイツ語と中央 Pomo 語（本節の後部を参照せよ．また 6.3.2 を参照）ではモーダル動詞のモーダル体系とムード（直説法や接続法）を有する．しかしながらほとんどの言語ではどちらかがより卓越しているのである．ヨーロッパ言語のうちいくつかの言語では接続法は廃れ始めており，一方英語では実質的に消滅し，同時にモーダル動詞によるモーダル体系が形成されていった（4.3.1 を参照）．

一般的にムードについては，たいていの節が**現実**｛Realis｝か**非現実**｛Irrealis｝である．つまりその体系は基本的（プロトタイプ的）に二元体なのである．明白な例としてはヨーロッパ諸言語における直説法と接続法がなす対立であり，直説法は**現実**｛Realis｝として節をマークし，接続法は**非現実**｛Irrealis｝として節をマークする．類似した識別（概念的－文法的機能のやや異なった組を伴ってはいるが）としてはアメリカ原住民諸語のいくつかとパプアニューギニアのいくつかの言語で見られる．これらの言語の研究における識別は直説法と接続法という観点よりも（文法範疇である）**現実**｛Realis｝と**非現実**｛Irrealis｝という観点からなされてきた．

スペイン語における直説法 / 接続法の対立の用例と，Amele 語における現実 / 非現実の対立の用例は 1.1.1 で挙げたが，ここで再掲する．

Creo　que aprende
I believe that learn+3SG+PRES+IND
'I believe that he is learning'
私は彼が学んでいることを信じている.

Dudo　que aprenda
I doubt that learn+3SG+PRES+SUBJ
'I doubt that he's learning'
私は彼が学んでいることを疑っている.

ho　bu-busal-en　　age qo-in
pig SIM-run out-3SG+DS+real 3PL hit-3PL+REM.PAST
'They killed the pig as it ran out'
彼らは豚が走り出したときそれを殺した.

ho　bu-busal-eb　　age qo-qag-an
pig SIM-run out-3SG+DS+IRR 3PL hit-3PL-FUT
'They will kill the pig as it runs out'
彼らは豚が走り出したら殺すだろう.

現実{Realis}と**非現実**{Irrealis}の対立は基本的にまたはプロトタイプ的に二元体であると言われてきたが例外もある．特に（ｉ）命令法{Imperative}と指令法{Jussive}はムードの直説法 / 接続法の体系の外にあり(5.4 参照)，また現実と非現実のマーカーがあるところで，いくつかの節はこの識別について無標である場合もある(6.5.2 参照)．しかしこのような例外があるとしても，概念的に現実と非現実の二元体的な対立を本質的にマークする形式の組は通常存在するのである(7.2 の議論を参照).

厳密に言えば，直説法 / 接続法と，現実 / 非現実との間に類型論的な違いはない．両者は現実と非現実の概念的特徴の違いを表しており，**現実**と**非現実**という類型論的範疇の例として見做されうるものなのである．しかしそれらの分布と統語的な機能にはいくつか違いがあり，それらのいくつかは先に挙げた用例によって表されている.

（ｉ）接続法は基本的に従属節に現われる.
（ii）非現実と現実はしばしば他の文法マーカーと共に現われる.
（iii）両者はしばしば概念的に冗長であるが，それらは若干異なる．非現実は他のマーカーと共に現われるが，接続法は従属節の中で補文標識の種類によって，現われ方が決まるからである.

（iv）直接法 / 接続法の体系と違って，現実 / 非現実の体系は通常テンスの体系と共に現われない．一般的な過去｛general past｝と現在は現実としてマークされ，未来は非現実としてマークされる．

これらの理由によって，直接法 / 接続法は5章で，現実 / 非現実は6章で別個に扱われる．しかしこれは識別の基準の明確なセットに基づいて行われているというよりも，実際の考察に基づいてある程度の判断がなされているという点が強調されなければならない(7.1 を参照)（術語の問題と概念上の‘現実’と‘非現実’という術語の使用に関する決定，文法マーカーと類型論の範疇については 1.7 を参照)．

モーダル体系の中で，異なる種類のモダリティは置き換え可能な項目の一つの体系の中において識別される．そのような体系の明白な例は英語のモーダル動詞であり，それらは以下のように命題の事実上の位置づけに関する判断をするのに用いられる．

Kate may be at home now
Kate must be at home now
Kate will be at home now
ケイトは今家にいるかもしれない．
ケイトは今家にいるに違いない．
ケイトは今家にいるだろう．

これらは次のように訳すことができ，またラベル付けされる．

あり得る結論	推測｛speculative｝
唯一可能な結論	推定｛deductive｝
妥当性のある結論	想定｛assumptive｝

更に異なる体系としては中央 Pomo 語(Mithun1999:191)の証拠的モダリティ｛evidential modality｝があり，そこでは（稀に用いられるが）無標の形式だけではなく，一般的な知識｛general knowledge｝，一次的な個人の経験（通常視覚である)，聴覚的証拠，伝聞，推量｛inference｝がある．

čʰéemul
rain fell
‘It rained’
雨が降った

čʰéemul-ʔma
rain fell-GEN.KNOW
'It rained' (that's an established fact)
雨が降った　（それは証明された事実である）

čʰéemul-ya
rain fell-VIS
'It rained' (I saw it)
雨が降った（私はそれを見た）

čʰéemul-nme·
rain fell-AUD
'It rained' (I heard it)
雨が降った（私はそれを聞いた）

čʰéemul-ʔdo
rain fell-HSY
'It rained' (I was told)
雨が降った（私は言われた）

čʰéemul-ʔka
rain fell-INF
'It rained' (everything is wet)
雨が降った（すべての物が濡れている）

（またここには話し手によってなされた行動を表す個人的な経験と，話し手に影響を及ぼした行動に関する 2 つのマーカーがある．これについては 2.2.5 で議論される）Tuyuca 語に類似した体系がある．2.2.1 を参照.

現実と**非現実**の違いはムード体系の重要な部分である．

また更に**現実**と**非現実**の区別の重要性は，モーダル体系の中にある術語が概念的に非現実であり，通常は無標の現実の形式があるという点においても，一般的にモーダル体系に適用されうる．例えば英語では，モーダル動詞によってマークされた（非現実の）モダリティに 3 つの種類があるが，しかしそこにはモーダル動詞を含まない現実の形式である‘叙述｛declarative｝’もある．

Kate is at home now
ケイトは今家にいる．

同様に中央 Pomo 語には, 1 つの無標の現実形式と命題について異なる種類の証拠を示す 5 つの非現実形式がある.

しかし単純に**現実 / 非現実**の違いを容易に適用できない二つの種類の状況がある. 第一に, いくつかの言語にはモーダル体系に関して無標の（現実）叙述がないものがある. したがってその体系は現実と非現実の形式を含むようにも, あるいはその言語には現実形式がないようにも見える - 2.7.1 を参照せよ. 第二に, 中央 Pomo 語は**現実 / 非現実**の区別があると見て当然のモーダル体系を有するが, 中央 Pomo 語はまた現実と非現実のマーカーに関して完全に独立したムード体系も有するのである(6.3.2 を参照).

最後にムードとムード体系の明確な区別をするのは常に可能というわけではないことを記しておく. なぜなら, いくつかの言語ではモダリティの全体系が両方の特徴を持っているからである - 6.5.3 と 6.5.4 を参照せよ.

1.2.2　命題と出来事のモダリティ

以下の用例の組には概念的特徴が含まれた明確な対立がある（最初の二つの用例はすでに 1.2.1 で引用され, 二番目の二つの用例は許可 {permission} と義務 {obligation} を示している).

Kate may be at home now　ケイトは今家にいるかもしれない.
Kate must be at home now　ケイトは今家にいるに違いない.

Kate may come in now　ケイトは今家に入ってもいい.
Kate must come in now　ケイトは今家に入らなければならない.

その違いは通常‘認識的 {epistemic}’モダリティ, ‘拘束的 {deontic}’モダリティという術語で表されるものであり, また‘可能 {possible}’と‘必然 {necessary}’を用いてパラフレイズされることによって表される.

It is possible (possibly the case) that Kate is at home now
It is necessarily the case that Kate is at home now
ケイトが今家にいるのは可能（可能な状況）だ.
ケイトが今家にいる状況は必然だ.

It is possible for Kate to come in now
It is necessary for Kate to come in now
ケイトが今家に入ることは可能だ.
ケイトが今家に入ることは必然だ.

二つ組の用例の重要な違いは，‘that’と‘for’によって示されていることである．これは最初の組はケイトが家にいるという命題に対する話し手の判断{judgement}に関するものであり，一方二番目の組はケイトが入ることという潜在的な未来の出来事に対する話し手の態度に関するものであるということを明確に指し示している．これらの理由によって，基本的な違いは‘命題のモダリティ’と‘出来事のモダリティ’ということになるだろう．(この対立は‘willの要素を含むもの’と‘willの要素を含まないもの’というJespersen(1924:329-31)と基本的には同じである)

この違いはここで表されているように認識的モダリティと拘束的モダリティの違いに適用されるだけではない（可能と必然の概念に広く関連している - 4.1を参照)．他のタイプのモダリティに関して言えば，特に出来事のモダリティの中に動的モダリティが含まれなければならず(Palmer1979:36-7;1986:102-3)，また命題のモダリティの中に証拠的モダリティが含まれなければならない．（Chung and Timber-lake(1985:244)は‘証拠的{evidential}’に対して‘epistemological’という術語を用いているが，‘epistemological’は有用な術語である‘認識的{epistemic}’に非常に類似している)．‘認識的{epistemic}’，‘拘束的{deontic}’，‘動的{dynamic}’という術語はVon Wright(1951:1-2)から用いている．

要約すると，認識的モダリティと証拠的モダリティは命題の真理値{true-value}または現実的な位置づけ（命題のモダリティ）に対する話し手の態度に関連するものである．対照的に，拘束的モダリティと動的モダリティは実現化されていない出来事や行われているのではなく単に潜在的に過ぎない出来事（出来事のモダリティ）について言及するものである．

1.3　モーダル体系におけるモダリティの分類

1.3.1　認識的なものと証拠的なもの

認識的なものの体系と証拠的なものの体系は命題のモダリティの主たる二つのタイプであり，またそれらは1.2.1において英語と中央Pomo語から例示された．これら二つのタイプの本質的な違いは（議論で間接的に示されたように)，認識的モダリティは命題の現実的な位置づけについて話し手の判断を表すところにあり，一方証拠的モダリティは話し手が現実的な位置づけについて持っている証拠を示すものである．英語の例は推測{speculative}，推定{deductive}，想定{assumptive}といった3つの種類の（認識的な）判断である．それらは類型論的な範疇である，**推測**{Speculative}，**推定**{Deductive}，**想定**{Assumptive}の例として見做してもよい．中央Pomo語の例は，‘一般的な

知識{general knowledge}', '一次的な個人の経験(通常視覚によるもの)', '聴覚的な証拠', '伝聞{hearsay}', '推量{inference}' といった 5 つの証拠を含んでいる. これらのうち最初の 4 つは**報告**(gen), **視覚**, **聴覚**, **報告**(1)を例示しており, 一方最後のもの(推量{inference})は認識的範疇である**推定**{Deductive}を例示している.

一見したところ, 類型論的範疇である**推定**は両方の体系に現われている. そこには明確な理由がある - 英語の MUST によって表される推定{deduction}は通常証拠に基づかれた判断を示している. Coates(1983:41)は,「最も普通の使われ方として**認識的な** MUST は話し手が言っていることが真であるという点において, 話し手の確信を伝えるものであり, またそれは話し手が知っている事実(それは明示される場合もあるし, ない場合もある)からの推定に基づいているのである」とコメントしている. したがって, *ケイトは家にいるに違いない* は, ケイトが会社にいないという観察に基づいた判断なのかもしれない. 同様に中央 Pomo 語の '推量{inference}' の形式は, 命題に対して間接的で通常視覚的な証拠がある. 概念的にこれらは非常に類似しており, 両者ともに Deductive として扱われる. なぜなら推定と証拠の両方が含まれているので, 英語の形式を判断の体系{judgment system}のなかで扱い, 中央 Pomo 語の形式を証拠の体系{evidential system}のなかで扱うのが妥当である. しかし純粋に議論と例示の目的のために, Deductive は**認識的なもの**(2.1)のセクションで議論されるだろう.

二つ目の観察としては, 証拠{evidentials}は一次的な認識的(判断)体系のなかに現われるかもしれないということである. 例えばドイツ語のモーダル動詞は英語と似ており, **推定**{Deductive}と**推測**{Speculative}の判断を表すが, SOLLEN と WOLLEN は証拠として用いられる(Hammer 1983:231,232).

Er soll　　steinreich sein
He SOLLEN+ 3SG+PRES+IND very rich be
'He is said to be extremely rich'
彼はとてもお金持ちだと言われている.

Er will　　eine Mosquito abgeschossen haben
he WOLLEN+3SG+PRES+IND a Mosquito shot down have
'He claims to have shot down a Mosquito' (plane)
彼はモスキート(飛行機)を打ち落としたと主張している.

最初の用例は報告されたものを示しており, 二番目の用例は文の主語として描かれた人物によって主張されていることを示している. 両者は話し手が命題についての証拠を示しているに過ぎない.

証拠的モダリティのなかには主たる 2 つのタイプがあり，それは**感覚**{Sensory} と**報告**{Reported} であることがある．前者は**視覚**，**非視覚**，(少なくとも) **聴覚**を包括しており，後者は報告の 3 つの下位タイプを包括している．これらの形式が命題モダリティのタイプを識別することは論じうる．その結果，**認識的なもの**，**報告**，**感覚**といった 3 つのタイプが存在する．しかし実際には**認識的モダリティ**と**証拠的モダリティ**という二分法が本書では貫かれるだろう．

1.3.2　拘束的なものと動的なもの

拘束的なものと**動的なもの**は証拠的モダリティの主たる2つのタイプである．簡単に言うとそれらの違いは，拘束的モダリティについては決定的な要因は関与する個人に対して無関係であり，一方動的モダリティについてそれらは内面的特質に関連する．したがって拘束的モダリティは義務{obligation} や許可{permission}，外的な原因から起るものと関連しており，動的モダリティは個人に関連することから由来する能力や意志に関連する．その違いは次の例で見られる．

John may/can come in now　(permission)
John must come in now　(obligation)
ジョンは今入ってもいい / 入れる．(許可)
ジョンは今入らなければならない．(義務)

John can speak French　(ability)
John will do it for you　(willingness)
ジョンはフランス語が話せる．(能力)
ジョンはあなたのためにそれをするつもりだ．(意志)

最初の二つの用例は (**拘束的な**) **許可**{Permissive} と**義務**{Obligative} の類型論的な範疇を例示している．二番目の例の組は (**動的な**) **能力**{Abilitive} と**意志**{Volitive} の範疇を例示している．しかしこれは次の三点において過度に単純化したものであると言える．

第一に，**動的**モダリティは規則や法のような外的な権威に由来するにもかかわらず，典型的に，そしてしばしばその権威は実際の話し手であり，その話し手が聞き手に対して許可を与えたり，義務を課すのである．Searle(1983:166) が‘指令{directives}’を「我々が他者にあることをさせるところ」と定義したのは，この理由からである．

第二に，**動的**モダリティの範疇の一つである**能力**は主語の身体的，精神的な

能力という観点以上に広く解釈されなければならないし，主語に直接影響を与えるような情況を含めなければならない（しかしもちろん拘束的な許可ではない）．これは**拘束的な** CAN と**動的な** CAN の対立のなかで見受けられる．**拘束的な** CAN は許可を指し示しており，一方**動的な** CAN は以下の例のように，単に能力を示しているのではなく，より一般的な意味における可能性を示しているのである．

He can go now　(Deontic: I give permission)
He can run a mile in five minutes　(Dynamic: he has the ability)
He can escape　(Dynamic: the door's not locked)
彼は今行くことができる．(**拘束的**：私は許可を与える)
彼は5分で1マイル走ることができる．(**動的**：彼は能力を持っている)
彼は逃げることができる．(**動的**：ドアは閉まっていない)

三番目に，**約束**｛Commisive｝という他の範疇があり，Searle によると「あることをなすために我々自身に約束している」定義されている．英語の SHALL で例示されている．

You shall have it tomorrow
あなたにそれを明日持たせよう．

行動に関する決定的な要因は主語ではなく，話し手に委ねられているので，これは**動的**モダリティの他のタイプとして最も見受けられるものである．
しかし**約束**と**動的**モダリティの二つのタイプである能力と可能性は他の言語よりも英語でより明確にマークされるものであると認められなければならない．

1.4　モダリティの他のタイプ

先のセクションで議論されたモダリティの下位タイプは，モーダル体系の分析に主に関与するものであった．しかしモダリティ，特にムードという点（唯一ではないが）に関連する他の文法範疇がある．

1.4.1　前提｛Presupposed｝

非現実として前提された命題の扱いについては 1.1.2 で議論された．例を挙げる．

Me alegra　que sepas　　la verdad
me it pleases that know+2SG+PRES+SUBJ the truth
'I'm glad that you know the truth'
あなたが真実を知ってくれたら嬉しい.

この用例のように従属節における接続法の用法は，恐らく前提に関する使用の最も明確な指摘である．なぜなら従属節のなかでは命題によって何も主張されていないのが明らかだからである．しかし非現実｛irrealis｝としてマークされる前提された命題の例は主節においても見出すことができる．例えばイタリア語の譲歩節での接続法の使用は，話し手が命題の真理値について受け入れていることを表している．

sia　　pure　come dici tu　ma io non vengo
be+3SG+PRES+SUBJ perhaps as　you say but I　not come
'It may be as you say, but I'm not coming'
あなたがそのように言うのなら，私は来ない.

また訳に見るように，英語ではモーダル動詞(may)をここで使っているのは関与的なことである．Cado 語(Oklahoma-Chafe1995:357)で'賞賛｛admirative｝'の範疇が非現実としてマークされるのは，さらに驚くべきことである．

hús-baʔa-sayi-k'awih-saʔ
ADM-1+BEN+IRR-name-know-PROG
'My goodness he knows my name'
まぁ，彼が私の名前を知っているなんて.

Chafe はこれを'驚異｛surprising｝'とした．しかし話し手は命題を主張しておらず，聞き手にとって明らかなことについて，彼の驚きを示しているのは明らかである(6.6.7 を参照).

'**前提**｛Presuppsed｝'は Kiparsky and Kiparsky(1971)が'事実｛factive｝'と呼ぶものと非常に類似している．これは後悔｛REGRET｝，憤慨｛RESENT｝[3]と，他の多くの動詞，そして構造は'事実上の述語｛factive predicates｝'であるとした議論である．しかし Coates(1983:235)の「知識は事実上の述語の伝統的な例である」という指摘に見られるように，その術語は誤解をもたらす．知識は話し手が事実として情報を受け止めていることを明確に示すが，前提には含まれない - 話し手はその事実を等しく受け止めていることを示していないのである．知識を補足するもの｛complement of KNOW｝は前提の意味において**事実**｛Factive｝ではない.

1.4.2　否定と疑問

否定｛Negative｝と**疑問**｛Interrogative｝は英語において文法的な妥当性から Quirk, Greenbaum, Leech and Svartvik(1985:83)によって，共に‘非主張｛non-assertive｝’として分類されている．*any* や *yet* のような形式をある種の‘非主張’と関連づけている．したがってそれらが時折モーダル体系に現われたり，あるいはムードマーカーが存在する非現実としてマークされることは驚くべきことではない．

驚くべき例としては，Quechua(Cole 1982:164)の一種である Imbabura 語の明らかに認識的なものの体系であるもののなかで見出される．そこでは同一のマーカーが疑問と否定の両方で用いられている．Cole はそのマーカーを次のようにリストアップしている．

ma(rí)	emphatic first-hand information	強調された一次的な情報
mi	first-hand information	一次的な情報
shi	conjecture	推量｛conjecture｝
cha(ri)	doubt	疑い
chu	Yes–No question	Yes-No 疑問
chu	negation	否定

最初の二つは恐らく感覚による証拠を示しているものであろう．一方二番目の二つは判断のマーカーである．三番目の組は同一のマーカーが**疑問**と**否定**に用いられていることを表している．用例は次のようなものである．

kan-paj ushi-wan　　Agatu-pi-mi
you-of　daughter-with Ageto-in-F.INF
‘I met your daughter in Ageto’
私は Ageto であなたの娘に会った．

kaya-shi　　kan-paj churi shamu-nga
tomorrow-CONJ you-of　son　come-3+FUT
‘I suppose your son will come tomorrow’
あなたの息子は明日私のところに来るだろうと思う．

Juzi-ka kitu-man chaya-shka-chá
José-TOP Quito-to arrive-PERF-DUB
‘Perhaps José has arrived in Quito’

恐らく José は Quito に到着した.

mayistru-chu ka-ngui
teacher-QUES be-2sg
'Are you a teacher?'
あなたは先生ですか？

ñuka-ka mana chay llama-ta shuwa-shka-ni-chu
I-TOP not that sheep-ACC steal-PERF-2SG-NEG
'I didn't steal that sheep'
私はあの羊を盗んでいない.

しかし同様にあるムード体系（現実と非現実）において，**疑問**と**否定**は Cado 語(Chafe 1995:334-5; 6.6.3 を参照)では非現実としてマークされる.

kúy-t'ayi-bahw
neg-1+AG+IRR-see
'I don't see him'
私は彼を見ていない.

sahʔyi-bahw-nah
2+AG-+IRR-see-PERF
'Have you seen him?'
あなたは彼を見たか？

疑問と否定はヨーロッパ諸語では**非現実**としてマークされることはないと考えられている場合がある．主節のなかで**非現実**としてそれらが扱われていることを指し示すものがないのは確かだが，従属節ではそのような**非現実**としての扱いの証拠がある．したがって報告された（間接的な）疑問はラテン語では接続法で表さられ（5.2.4 を参照），一方スペイン語やイタリア語の否定された言語活動動詞もまた通常接続法で現われる（5.2.3 を参照）.

1.4.3　願望，畏怖など

願望｛wishes｝と畏怖｛fears｝のモダリティにのなかでの位置づけは，それらが未知の事実に対する位置付けであったり，あるいは現実化されていない出来事の命題に対する話し手の態度を概念的に表すものであるにも拘わらず，若干不明瞭である．したがってそれらは部分的に拘束的なものであり，認識的な

ものでもある．ラテン語やその他の言語において従属節のなかで接続法によって表される願望と畏怖の用例は多くある（5.3.3 参照）が，接続法はまたラテン語と古典ギリシャ語のように主節でも用いられる．

modo valeres (Cic. *Att.* 9.22)
only be well+2SG+IMPERF+SUBJ
'If only you were well'
あなたが元気でさえいてくれれば．

mé: soús diaphthéire:i gámous (Eur. *Alc* 315)
not your ruin+3SG+PRES+SUBJ marriage
'I'm afraid she may ruin your marriage'
彼女があなたの結婚を台無しにするかもしれないことに私は驚いた．

同様に西アフリカの言語である Fula 語(Arnott1970:299ff.)では，願望は接続法として認められるものによって表される特徴の一つである．

njuutaa balɗe
be.long+2SG+SUBJ in days
'May you live long!'
あなたが長生きしますように！

願望，欲望，優遇｛preference｝の表現は実現化しなかった出来事と同様に関連しているが，一般的に従属節においてのみのものである．スペイン語から用例を挙げる．

quiero que estudias más
I want that study+3SG+PRES+SUBJ more
'I want you to study more'
私はあなたがさらに勉強することを望む．

1.4.4　モーダルとしての過去時制

モーダル体系に影響を及ぼす更なる特徴がある．それは'非現実｛unreality｝'，'仮定｛tentativeness｝'，'可能性｛potentiality｝'などを表すための過去時制形式の使用である．これはしばしばムードから独立して機能するが，相互に作用するかも場合もある．これは8章で議論されるがここでは2つの例を挙げる．

第一に，英語の3つのモーダル動詞は形式的に現在と過去を持つ．

WILL	*will*	*would*
CAN	*can*	*could*
MAY	*may*	*might*

3つすべての過去時制の形式は，過去の時を指し示すのに用いられうる．しかし過去の時を指し示すことは過去時制形式の最も一般的な機能ではない．むしろそれらは次のように仮定を表すのに多く用いられる．

He'll be there now	彼は今そこにいるだろう．
He'd be there now	彼は今そこにいるだろう．
He may be there now	彼は今そこにいるかもしれない．
He might be there now	彼は今そこにいるかもしれない．
He can't be there now	彼は今そこにいるはずがない．
He couldn't be there now	彼は今そこにいるはずがない．

第二に，多くの言語では次の英語によって例示されているように‘現実{real}’の条件と‘非現実{unreal}’の条件によって識別される．

If the children are here, John will be happy
If the children were here, John would be happy
もしここに子供がいるなら，ジョンは幸せだろう．
もしここに子供がいるなら，ジョンは幸せだろう．

If Mary comes, John will stay
If Mary came, John would stay
もしメアリーが来るなら，ジョンは留まるだろう．
もしメアリーが来るなら，ジョンは留まるだろう．

それぞれの用例の組の二番目のものは非現実{unreal}である．それらのうち初めの用例（現在の状況を指示しおり，事実は既知である）では，子供がここにいないという明確な含意があり，その結果ジョンは幸せではないのであろう．二番目の用例では，未来を指し示しており，そこでは事実はわからないものとなっている．含意はメアリーは来なさそうだということである．用例に見るようにこの違いは，現実の条件の両方の節では現在時制形式を伴い，非現実の仮定法の両方の節では過去時制形式を伴うというように，時制によってマークされている．

過去時制のこのような使用は‘モーダルな過去{modal past}’として言及さ

れるだろう.

1.4.5　複合体系

それぞれの言語において類型論的に関与するモーダル体系が形式の体系と一対一で対応するというような，モーダルマーカーが分離した体系があるのが理想的である．類型論の研究においては望ましいが，実際にはそれほど単純でもなく，また上手く整理されないのである．体系が整理されず複雑である理由として以下の3点[4]が挙げられる.

第一に，明らかに異なる二つの体系が同一（もしくはかなり類似した）のマーカーの組を用いることがある．これは英語の認識的な体系と拘束的 / 動的{deontic / dynamic}な体系に関するものであり，同一のモーダル動詞を使う．1.2.1で例示されたように，特にMAY，CAN，MUSTがそうである（確かに多くの言語は認識的モダリティと拘束的モダリティに関して同一の形式を有している - 4.2.1を参照）．例えばCANは認識的なものと拘束的あるいは動的なものとして使われることがある.

He can't be in his office now (epistemic)
He can come in now (deontic, permission)
He can run a mile in four minutes (dynamic, ability)

彼は今会社にいないはずだ．（認識的）
彼は今入ってもいい．（拘束的，許可）
彼は4分で1マイル走ることができる．（動的，能力）

しかしこれらの用法にはいくつかの形式的な違いがある．例えば，積極的な認識的モダリティであるMAYはCANよりもはるかに用いられるという点や，MAYは拘束的なものの場合においてのみCANと置き換えられるという点，そして過去時制形式である *could* は動的なものの場合に限って過去を示すのに使われるという点である．これらの特徴については4.2.3でさらに詳しく論じられる.

第二に，いくつかの場合において，概念的に等しいモーダル範疇のいくつかが一つの言語において一つの体系の項として扱われることがある．これは**推定**{Deductive}についてであるが，**推定**は証拠に基づいた判断を含んでいるため，英語や中央Pomo語でそれぞれ見られるように(1.3.1を参照)，判断の体系，あるいは証拠的な体系の術語になりうる.

第三に，単独の形式体系が二つかそれ以上のモーダル体系に属している形式をしばしば含む．したがって，ドイツ語におけるモーダル動詞は認識的，拘束的の両者のようにモーダル動詞の機能の大部分を果たすだけではなく，そこに

は明らかに証拠的な形式(SOLLEN と WOLLEN)があるのである(1.3.1 を参照). Imbabura 語(Cole 1982:164, 1.4.2 で説明された)の体系には術語のより多様な組さえある.

第四に, 形式の体系の術語と類型論的に関与する概念上の特徴とが, 単純に一対一の関係で存在しないことがある. したがって Lega 語(Bantu, Eastern Zaire – Botne 1997:511-22 と, 個人的なコミュニケーションによる)では, 一次的な機能であると思われる**報告** {Reported}, Speculative, **感覚** {Sensory} の 3 つの小詞 {particle} がある. これらは類似した範疇であるが, それらのうち二つに関連するさらなる特徴がある. **報告**に関する術語はしばしば疑いまたは不信 {disbelief} を表す.

nkumgwágá (bónɔ), ámbo bazongo bɛ́ kulyágá merɛndɛ
I hear that whites EV eat frog
'I hear that Westerners eat frogs (though I find that unlikely)'
西洋人は蛙を食べると聞く. (私はありそうにないと思うのだが)

感覚(**視覚**と**聴覚**)という術語もまた, Deductive に関連する信頼{confidence}の類と信じられうる報告の両方を表現することがある.

ampó mbulá zésalɔka
EV rain rain
'It is already raining' (I can see it)
すでに雨が降っている. (私にはそれが見える)

ampó ɛ́kukúrá momponge
EV she.is.pounding rice
'She's assuredly pounding rice' (I can hear it)
彼女は確かに米を挽いている. (私にはそれが聞こえる)

ampó Kisangá ɛ́ndilɛ kw isɔkɔ; kikápu kyǎgɛ́ takɛ́ gánɔ
EV Kisanga went to market; basket is not here
'Kisanga surely went to the market; her basket is not here'
Kisanga は確かに市場に行った ; 彼女のかごはここにない.

ampó Moké ákorwa
EV Moke tired
'Moke is tired' (Moke told me)
Moke は疲れている. (Moke が私に言った)

詳しくは 2.2.4 を参照せよ.

第五に，同一の形式の体系は Ngiyambaa 語(Donaldson 1980:159-62)のように，モーダルな体系だけではなく，時制のような他のものも含むことがある.

（ｉ）**命令** {*Imperative*}

ŋindu　　bawuŋŋ-ga yuwa-dha
you+NOM middle-LOC lie-IMP
'You lie in the middle!'
あなたは真ん中に横たわれ！

（ii）**過去** {*Past*}

yuruŋ-gu ŋidjiyi
rain-ERG rain+PAST
'It rained'
雨が降った.

（iii）**現在** {*Present*}

yuruŋgu ŋidja-ʈa
rain-ERG rain-PRES
'It is raining'
雨が降っている.

（iv）**非現実** {*Irrealis*}

yuruŋ-gu ŋidja-l-aga
rain-ERG rain-CM-IRR
'It might/will rain'
雨が降るかもしれない / 降るだろう.

（ｖ）**目的** {*Purposive*}

ŋadhu bawuŋ-ga yuwa-giri
I+NOM middle-LOC lie-PURP
'I must lie in the middle'
私は真ん中に横たわらなければならない.

yuruŋ-gu ŋidja-l-i
rain-ERG rain-CM-PURP
'It is bound to rain'
雨が降るに違いない.

実際には Ngiyambaa 語の状況は上で記したもの(Donaldson1980:251-65)よりもさらに複雑である．そこには明らかにモーダルに関連する接語の組と，そ

うではない接語の組がある．Donaldson はそれらを‘**信用**｛Belief｝’の接語，‘**知識**｛Knowledge｝’の接語，‘**証拠**｛Evidence｝’の接語の 3 つに分類している．以下の例を挙げる．

‘**信用**’の接語

（ｉ）**主張**｛Assertion｝

waŋaːy-baː-na yana-nhi
NEG-ASS-3ABS walk-PAST
‘He didn’t walk’ (again)
彼は歩かなかった．（再び）

（ii）**断定的な主張**｛Categorical assertion｝

guniːm-baɽa-nuː balu-y-aga
mother+ABS-CATEG.ASS-2OBL die-CM-IRR
‘Your mother is bound to die’
あなたの母親は死ぬに違いない．

（iii）**反対の主張**｛Counter-assertion｝

guyan-bagaː-dhu gaɽa
shy+ABS-CNTR.ASS-1NOM be+PRES
‘But I’m shy!’
しかし私は内気だ！

（iv）**仮説**｛Hypothesis｝

galiː-ŋinda-gila ŋiyanu balu-y-aga
water-CARIT-HYPOTH we+PL+NOM die-CM-IRR
‘We’ll probably die for lack of water’
私たちは水がなくて死ぬだろう．

‘**知識**’の接語

（ｉ）**感嘆**｛Exclamative｝

minja-waː-ndu dha-yi
what+ASS-EXCL-2NOM eat-PAST
‘What did you eat?’ / ‘You ate what?’
あなたは何を食べたのか？ / あなたは何を食べたのか？

guya-waː-ndu dha-yi
fish+ABS-EXCL-2NOM eat-PAST
‘So you ate a fish!’ / ‘What? You ate a fish’
だからあなたは魚を食べた！ / なに？あなたは魚を食べた．

（ii）**無知**｛Ignorative｝

minjaŋ-gaː-dhu　　dha-yi
what+ABS-IGNOR-1NOM eat-PAST
'You ate something, I don't know what' / 'I don't know what you ate'
あなたは何かを食べた，私は何かを知らない．/ 私はあなたが何を食べたのかを知らない．

guya-gaː-ndu　　dha-yi
fish+ABS-IGNOR-2NOM eat-PAST
'Did you eat a fish' / 'You ate a fish, I don't know'
あなたは魚を食べたのか / あなたは魚を食べた，私は知らない．

'**証拠**' の接語

（ｉ）**感覚**の証拠 {Sensory evidence}

ŋindu-gara　　girambiyi
you+NOM-SENS.EVID sick+PAST
'One can see you were sick'
人はあなたが病気だとわかる．

gabugaː-gara-lu　　ŋamumiyi
egg+ABS-SENS.EVID-3ERG lay+PAST
'It's laid an egg by the sound of it'
その音によって卵が生まれる．

（ii）**言語**の証拠 {Linguistic evidence}

ŋindu-dhan　　girambiyi
you+NOM-LING.EVID sick+PAST
'You are said to have been sick'
あなたは病気だったと言われている．

証拠の接語は明らかに証拠のマーカーであるが，他の大部分はモーダルの傍流である．

1.5　類型論

現在では文法的な類型論が，純然たる形式や文法的なマーキングに基づいて網羅されえないということはよく知られている．Croft(1995:88)は次のように言っている．「一般的に汎言語的な等価物は次の二つの理由によって純粋に形式上（構造上）の見地に達していない．第一に言語にまたがるヴァリエーションはあまりにも多い･･･第二に形式上の定義は単一言語の構造上の体系の内部にある･･･これらの理由によって，類型論者は意味論や語用論，または談話に基づい

た定義といった言語体系の外部にある定義を一般的に使う」(定義に含まれる特徴は本書では‘概念的なもの’として言及されている．したがって意味論対語用論などといったことに関するいかなる議論も避けている)

概念的な基準と形式的な基準が関連しうる方法を簡潔に考えてみるのは有益であろう．

第一に，単独の範疇は汎言語的に同じものであることがある．例えば英語やTamil 語，Ngiyambaa 語，Quechua 語(2.1.2 を参照)のように．

第二に，ある範疇は一つの言語では形式的に識別されるかもしれないが，他の言語では一つのマーカーによって示されるいくつかの範疇のうちの一つである場合がある．したがって Amele 語で未来は唯一マークされるが，Manam 語（両方ともパプア諸語である - 6.1 を参照）では非現実マーカーによって示される 5 つの範疇のうちの一つであるに過ぎない．

第三に，ある単独のマーカーはいかなる言語においても形式的に識別されない多くの異なる概念的範疇を示すことがあるが，しかしそれにも拘わらずそれは類型論者の興味をひくものである．したがって**前提**(Presupposed)はスペイン語では接続法によって示される(5.2.5 参照)．いたる所で唯一に識別されるわけではないが，類型論的に面白いのは前提は Cado 語では非現実のマークとして説明されることである(6.6.7 参照)．

最後に，他の言語において形式的な位置づけが疑わしくマークされた形式の組を比較することは時には有益である．したがって英語におけるモーダル動詞は形式的に定義された組であるが(4.2.1 参照)，しかしそれらと，いくつかの形式上のマーカーがあるドイツ語だけではなく，形式的な位置づけが大変疑わしいロマンス諸語を比べるのは有益なことである(4.2.2 参照)．

1.6　文法的マーカー

モダリティの文法マーカーは非常に多様であり，ここで詳細に例示するのは有益ではないだろう．4.2 ではモーダル動詞の文法的な位置づけについて，また 6.3.1 では現実と非現実のマーカーの文法的な位置づけについてそれぞれ議論がなされている．しかしいくつかのコメントがある方がいいであろう．

基本的には 3 つのマーカーがある．（ⅰ）個別の接尾辞，接語，小詞，（ⅱ）屈折（ⅲ）モーダル動詞．

個々の項の用例はすでに挙げた．例えば 1.4.2 の Imbabura 語のように．それらはモーダル体系とムードの両方の術語のマーカーとして見做されている．

語彙的な動詞だけではなくテンスやムード，人称 - 数詞 {person-number} の形式を含む全体的な屈折形式は直説法と接続法に特徴的である．しかしながら現実 / 非現実という観点から描かれたいくつかの言語には，ムードと人称－数詞の両方のマーカーが同時に存在する．またそのような言語(Takelma 語)が少

なくともあり，そこでは語彙的な動詞もまた形式に含むのである(6.3.1 参照).

モーダル動詞の使用はモーダル体系に限定されているようである.

またそこにはムードマーカーが現われる統語的な条件がいくつかある．6.3.2 にはアメリカ原住民言語の一つの例と，パプア諸語のいくつかの例があるが，そこでは現実と非現実は‘連結された{linked}’節のなかでのみマークされる.

最後に，いくつかの言語には小詞と接語の数多の組がある．したがって Mithun(1986:99)は Cayuga 語(Northern Iroquioian)には 55 以上の異なる証拠の小詞があるとしている．組の項の大部分がここで議論されるいかなる意味においてもモーダルではないようであっても，そのような組がモダリティの文法的研究にどこまで関連するものなのかを定めるのは容易なことではない．そのような膨大な組は通常，文法的というよりは語彙的なものとして見做されるものである．しかしそれらの項のいくつかは類型論的な関心を集めるものである場合がある.

1.7　術語

術語と概念に関する言及はすでになされたが，ここでその問題について簡潔に考えるのは有益である.

類型論研究には３つに識別されているが，関連する概念の組がある（談話の３つのレヴェル）－多様で異なる言語に共通するように思われる類型論的な範疇，個別言語において類型論的な範疇と関連する文法的マーカー，類型論的に等価物であると証明する概念的特徴．これら 3 つのレヴェルそれぞれに異なる術語や異なる注釈を用いる方が賢明であるように思われるが，いくつかの理由によってこれは実際には不可能であり，また恐らく明確さよりも混乱が生じるだろう．つまり実際にはすべてのレヴェルで同じ術語を使うのが普通であり，有益なのである．例えば，文法書で‘未来時制’は（概念的な）未来を示しているとなっている．確かに文法用語に関する名付けはそれらと関連する概念的未来から一般的に由来している．明らかに範疇のいくつかには置き換え可能な名付けがあり, Lyons(1977:30)や Bar-Hillel(1970:370)は‘叙述{declarative}’，‘疑問{interrogative}’，‘命令{imperative}’と‘叙述{statement}’，‘疑問{question}’，‘命令{command}’の区別をするべきだとしている．この意見には次の二つの理由から一貫して倣わない．第一に，いくつかの範疇に関する術語のペアが明確ではない．さらに著者によって一貫していないということが挙げられる．第二に，もし曖昧さを避けることができるならば，同じ術語を使う方が実際には有益な場合もある．例えばラテン語の否定に関する接続法では否定命令{negative imperative}（形態論的に命令と定義されていることについて比較せよ）とする方が，禁止{prohibition}とするよりもさらにわかりやすい.

使用される決まりごととしては，Realis, Irrealis(1.1.1), Speculative, Deductive, Assumptive など(1.3.1)といった類型論的範疇を区別するための大文字の使用である．しかしこの決まりは次の二つの理由によって常に使われるものではない．第一に，同じ術語は個別言語の文法範疇についてしばしば用いられる．例えば imperative と future は Imperative と Future のようになる．そのような場合，類型論的な位置づけを強調する必要がないならば，頭文字を大文字にしないで用いる方がより扱いやすい（直説法と接続法は（類型論的に）Realis, Irrealis の例であるので，識別が重要な場合というのは（文法的な）realis, irrealis に関してである）．第二に，モダリティのタイプを述べるのに大文字の術語を用いるのは価値のあることではないようである - event, propositional, epistemic, deontic, dynamic は主たる類型論的なクラスについて言及するものであって，個別言語の文法範疇を言及するものではない．頭文字の大文字はそれらが最初に取り上げられるときにのみ使われる．

‘question’，‘command’といった術語が直ちに役立つときに，そのような術語を使わず概念的，文法的範疇を区別するのは容易なことではない．一つの可能性としては，概念的範疇については引用符が用いられる場合もあるが，引用符は本書で使われるのとは異なる個々の著者によって使われている術語を指し示すときも使われる．その代わりに，混同する危険があるときには，‘notionally’または‘notional’といったグロスを概念的範疇を示すために付け加える．

また異なる著者によって使われる術語には多様なヴァリエーションがあることや，それらが本書で使われるものとは異なるという問題がある．極端な例としては‘report’，‘quotative’，‘hearsay’といった術語の使用が著者によって異なって使われるということである(2.2.2 参照)．そのような理由により，引用符はそのような著者の術語すべてに用いられる．またその著者の術語は用例に対してグロスの中で使われるが（それらは小文字の略語として使われる），これらの範疇で使われる略語は標準的なものを使用する（リストは本書の最初のページにある）．[5)]

要約すると以下のようになる．

（ｉ）いくつかの言語で‘直説法 / 間接法’の使用という点で例外があり，また他の言語で‘現実 / 非現実’が類型論の**現実 / 非現実**に関連するという例外があるが，文法範疇の術語は，類型論で用いられるものと概して等しいものである．

（ii）類型論的な範疇は頭文字の大文字を用いることによって同一のものとして扱われる．それらに用いられた術語にヴァリエーションはない．

（iii）概念的な範疇が必要なところでは‘概念的 {notional(ly)}’とグロスづけされる．

（iv）著者各々によって用いられる術語は，引用符によって示される．またこれらの術語は用例におけるグロスの中（小文字で）で示されるが，標準的な縮約形である．

類型論の範疇で用いられる術語の選択についても説明が必要である．ここで原則を説明することは混同を避けるためであり（‘report’，‘quotative’，‘hearsay’のような），また原則を説明するにあたって，当然一般的によく知られた術語を使い，読者にとって不快にならない術語であるべきである．考えられる（また決められるべき）問題は以下のようなものである．

（i）Imperative や Jussive のような，よく知られた術語がいくつかあるが，これらについては意味的に置き換えることはできない．
（ii）Interrogative / Interrogation や Negative / Negation のように形容詞形と名詞形の両方がある術語がる．（i）に矛盾のないよう，形容詞形が用いられるであろう．
（iii）術語の大部分は終わりに *-ive* を持つが，*Visual* は語源学的には正しいが，まったくの造語である *Visive* よりも好ましい．
（iv）前提されることに関する明確な術語はない－‘Presuppositive’は非常に一般的ではなくふさわしくない．分詞の形である（*-ed* の形）‘Presupposed’が好ましい．
（v）‘report’，‘hearsay’，‘quotative’の混同については，（*-ive* を伴った）‘Quotative’よりも（*-ed* を伴った）‘Reported’の方が好ましい．しかし他の術語を使うことによって生じる混乱を避けるために Reported の 3 つの下位範疇がある．これらは二次的な情報を示す Reported(2)，三次的な情報を示す Reported(3)，一般的に真実であると言われていることを示す Repored(Gen)として言及されるだろう（2.2.2 を参照）．
（vi）願望や恐れ，習慣的過去については形容詞形ではないもので示される．しかし最初の二つについては‘Desiderative’，‘Timitive’が使われた場合もある．

1.8　基本的な範疇の要約

すでに言及されたが，主たる類型論的範疇とそれらの分類について要約するのは役に立つことだろう．

モーダル体系の中でこれらの範疇は当然のことながらきれいに整理されうるが，他の範疇，つまり**現実 / 非現実**のようにまったくではないにしろ，それらのほとんどが上手く分類されていないものがある．

Propositional modality
- Epistemic
  - Speculative
  - Deductive
  - Assumptive
- Evidential
  - Reported: Reported (2), Reported (3), Reported (Gen)
  - Sensory: Visual, non-Visual, Auditory

Event modality
- Deontic
  - Permissive
  - Obligative
  - Commissive
- Dynamic
  - Abilitive
  - Volitive

命題のモダリティ

認識的なもの

推測 {Speculative}
推定 {Deductive}
想定 {Assumptive}

証拠的なもの

報告 {Reported} :**報告**(2) {Reported(2)} ,**報告**(3) {Reported(3)} ,
報告(Gen) {Reported(Gen)}
感覚 {Sensory} :**視覚** {Visual} , **非視覚** {non-Visual} ,
聴覚 {Auditory}

出来事のモダリティ

拘束的なもの

許可 {Permissive}
義務 {Obligative}
約束 {Commissive}

動的なもの

能力 {Abilitive}
自発 {Volitive}

非現実(Irrealis)としてマークされ，しかしムードに関してかなり見出される他の重要な範疇は：**未来**｛Future｝，**否定**｛Negative｝，**疑問**｛Interrogative｝，**命令－指令**｛Imperative-Jussive｝，**前提**｛Presupposed｝，**条件**｛Conditional｝，**目的**｛Purposive｝，**結果**｛Resultative｝，**願望**｛Wishes(‘Desiderative’)｝，**畏怖**｛Fears(‘Timitive’?)｝，そして一般的ではないが，**習慣的過去**｛Habitual-Past｝である．

1.9　構成

本書は基本的に二つの部分から成り立っている．

最初の部分は，第二章，第三章，第四章からなり，これらはモーダル体系に関連するものである．第二章では命題のモダリティを扱い，主なセクションで認識的なモダリティと証拠的なモダリティを扱う．第三章では出来事のモダリティを扱い，主なセクションで拘束的モダリティと動的モダリティを扱う．二つの章には他のものを扱うセクションがあるが，これらも関連する事項である．モダリティの両タイプに影響を及ぼすことについては第四章で扱う．

二番目に部分は，第五章，第六章，第七章であり，これらはムードに関連するものである．第五章では直説法と間接法について扱い，第六章では現実，非現実について扱う．他方これら両方に影響を及ぼすことについては第七章で扱う．

第八章ではモーダルとして用いられる過去時制の問題を扱う．

2　モーダル体系：命題のモダリティ

1.2.2 で示したように，認識的モダリティ｛epistemic modality｝と証拠的モダリティ｛evidential modality｝は命題の真理値，または現実のありよう｛factual status｝に対する話し手の態度を表すものであるので，命題のモダリティ｛propositional modality｝といえる．

認識的モダリティと証拠的モダリティの基本的な違いは，前者は命題の現実的なありようについて話し手が判断するものであり，一方後者は話し手が命題に関して持っている証拠を示すものである．

しかし，1.3.1 で記したように，2 つの点において実際は，認識的モダリティと証拠的モダリティの両者に完全な違いが常にあるとは限らないのである．

第一に**推定**｛Deductive｝という範疇は，判断｛judgment｝と証拠｛evidence｝の両方を含んでおり，その二つの体系に現れうるが，他の範疇でもそれが一般的に起こり得るのではないが，あるのは事実である（例えば Tuyuca 語における**想定**｛Assumptive｝．2.1.3 を見よ）．1 回目は証拠的モダリティのセクションで，2 回目は認識的モダリティのセクションでというようにこれらを 2 回にわたって扱うのは妥当ではない．したがって認識的モダリティのセクションで考察されるだろう．証拠的モダリティのセクションでは最も重要である‘**報告**｛Reported｝’‘**感覚**｛Sensory｝’という純粋に証拠的な特徴について述べる．

第二に証拠的な範疇は，一次的には認識的なもの（judgment）の体系で時々現れるが（例えば 1.3.1 で示されたドイツ語の SOLLEN,WOLLEN の使い方），これらは証拠的なもの のセクションで扱われる．

後のセクションでは他の命題のモダリティのタイプを扱う．

2.1　認識的モダリティ

2.1.1　３つのタイプ

言語には共通して不確実性を表したり，観察しうる証拠からの推量を示したり，一般的に知っているものとして推量を表したり，といった３つの判断に関する種類｛judgment type｝がある．類型的には**推測**｛Speculative｝，**推定**｛Deductive｝，**想定**｛Assumptive｝に分けられる．用語の置き換えがきくものとして，まず**推定**｛Dubitative｝があるが，この形式は一般的に積極的な疑い｛positive doubt｝を示すわけではないので，推測｛Speculative｝の方が望ましい．

３つのマーカーを持っている言語というのは数少ないが，英語は例外的にそれらを持ち，法助動詞である MAY, MUST, WILL をつかう．

John may be in his office.
ジョンは会社にいるかもしれない.
John must be in his office.
ジョンは会社にいるに違いない.
John'll be in his office.
ジョンは会社にいるだろう.

最初の例は，ジョンが事務所にいるかどうか話し手に確信がないことを示しており，２番目は証拠に基づいて話し手が確信を持っていることを表している．例えば事務所の明かりがついていて彼が家にいない等．３番目の例はジョンについての周知の事実に基づいた判断である．例えば彼はいつも８時に出るとか仕事中毒であるなど（妥当な結論）.

MUST は WIlL よりも確固たる結論として描かれているようなので，前述の３例は以下のようにも表しうる.

a possible conclusion	あり得る結論
the only possible conclusion	唯一可能な結論
a reasonable conclusion	妥当な結論

議論があるかもしれないが，英語の体系にはまったく両立が可能とは限らない二つの対照をなすものがある．まず一つは結論付けの強さ，即ち MAY と MUST の違いである．つまり認識的に可能なものと認識的に必然なものとの違いである（4.1.2 を見よ）．この違いは**推測**の（MAY）と**推定**の（MUST）とを区別する．２つ目の違いは**推定**の（MUST）と**想定**の（WILL）といった観察に基づいた推量と経験的・一般的知識から来る推量との違いである．多くの言語において，これらの対照をなすもののうちの一つが認識的なものの体系の中で唯一対照をなすものになるのか，或いは重要な対照を成すものになるかである．当然ながら認識的なものの体系に関しては多くの言語で，観察に基づく推量と経験に基づく推量という対照がよく見出される.

上記２つの対照をなす組のうち，共通している要素は**推定**である．しかしそれに関連している概念的特徴はどの対立がより顕著であるかということによって，幾分か異なっている.

これらの理由によって，二つの対照を成す組は別のセクションで扱われる．１番目は**推測**と**推定**｛Speculative and Deductive｝で．２番目のものは**推定**と**想定**｛Deductive and Assumptive｝で.

しかしこれら３つは命題のモダリティに最も共通した範疇であるが，いくつかの言語においては異なった体系がある．例えば Ladakhi 語(Tibeto－Burman)では，モーダルマーカーの基本的な組の中に‘推量｛inference｝’（＝**推定**

{Deductive}）のマーカーがあるが，これはまた推量の４タイプを区別する２番目の組でもある．しかしこれらは証拠的な特徴を含んでおり，これらは2.2.1で議論される．

2.1.2　推測と推定

英語には以下のように**推測**{Speculative}と**推定**{Deductive}の対照がある．

John may be in his office.
ジョンは会社にいるかもしれない．
John must be in his office.
ジョンは会社にいるに違いない．

さらなる特徴がある．これらの例文は現在に関する命題についての判断を表しているが，MAYに関しては（MUSTはそれと共通しないが）命題は未来を述べることもできる．

John may come tomorrow.
ジョンは明日来るかもしれない．

また，これらは過去分詞HAVEと併用することで過去についての命題も述べうる．

John may/must have been in his office.
（ジョンは会社にいたかもしれなかった / いたにちがいなかった．）

ヨーロッパ諸言語の多くは同じような対照をなす．以下デンマーク語の例．

Det kan　　være sandt
that may+3SG+PRES be　true
'That may be true'
それは本当かもしれない．

Det må　　være sandt
that must+3SG+PRES be　true
'That must be true'
それは本当に違いない．

英語のようにデンマーク語はゲルマン語であるが，同じ対照はロマンス語であるイタリア語にもある．イタリア語の例.

Può　　essere nell　ufficio
can/may+3SG+PRES be　　in the office
'He may be in the office'
彼は会社にいるかもしれない.

Deve　　essere nell　ufficio
must+3SG+PRES be　　in the office
'He must be in the office'
彼は会社にいるに違いない.

またそれは現代ギリシャ語にも見出せるが，非人称動詞を用いてである.

bori　　na　ine　　sto　ɣrafio tus
can+IMPERS that they are in the office　their
'They may be in their office'
彼らは会社にいるかもしれない.

prepi　　na　ine　　sto　ɣrafio tus
must+IMPERS that they are in the office　their
'They must be in their office'
彼らは会社にいるにちがいない.

これは現代ヨーロッパ諸語に限ったことではない．タミル語（Dravidian,S. India and Sri Lanka－Thiagarayan1981;Asher1982)では広い意味でモーダルと考える形式はたくさんあるが，そのうち二つだけが動詞接尾辞*-laam,-um*　という形式である．これらは束縛的｛deontic｝に用いられるだけではなく，認識的｛epistemic｝に**推測**と **推定**にも用いられるにも拘らず，これらをAsher(1982:16772)は　'義務｛debitive｝'，'許可｛permission｝'と呼んでいる（3.2.1 を見よ).

以下の例文のグロスで用いられる'譲歩｛concessive｝'という用語は'許可｛permission｝'が認識的な意味で用いられるのを示すために用いられている.

Kantacaami vantaalum vara-laam
Kandaswami come+CONCESS come-PERM
'Kandaswami may perhaps come'
Kandaswami は多分来るだろう.

Gaɳeecan ippa Mannaarkuʈiyile irukka-ɳum
Ganesan now Mannargudi+LOC be-DEB
'Ganesan must be in Mannargudi now'
Ganesan は今 Mannargudi にいるに違いない.

判断 {judgment} の二つのタイプは，1.4.5 で見た Ngiyambaa 語のように複合体系でしばしば見られる.

yuruŋ-gu ŋidja-l-aga
rain-ERG rain-CM-IRR
'It might/will rain'
雨が降るかもしれない / 降るだろう.

yuruŋ-gu ŋidja-l-i
rain-ERG rain-CM-PURP
'It is bound to rain'
雨が降るに違いない.

1.4.2 で記したように Imbabura 語には '推量{conjecture}' と '疑い{doubt}' というマーカーがあるが，Imbabura 語に似た言語で Quechua 語の一種である Inga 語でより明確な例がある（Levinsohn 1975:14-15,22).

その違いは '推定された行動 {action deduced}' と '推測された行動 {action speculated}' の違いであり，完全な体系は以下のようなものである.

mi	目撃された行動 – 肯定
chu	目撃された行動 – 否定
si	話し手に報告された行動
cha	起こったものとして話し手によって推定された行動
(char-	補強された蓋然性)
sica	話し手によってあり得ることとして推測された行動

Levinsohn はこれらのマーカーを '直指示的なアスペクトの前接語 {deictic aspect enclitics}' と呼んでいる．なぜなら，それらが本動詞と結びつかない場

合，それらは普通新情報であるレーマを示すからである．しかしこれはモダリティの問題に関係ない．彼はそれらの例を示したが，訳文の中でモーダルのありよう｛modal status｝について触れておらず，前接語についてのグロスもない．

nis　puñuncuna-mi (15)
then they.slept-MI
'Then they slept' (witnessed affirmative)
そして彼らは眠った（目撃された肯定）

chica nuca mana yachani-chu (31)
that I　not　I.know-CHU
'I don't know that myself' (witnessed negative)
私は自分自身を知らない．（目撃された否定）

chacapi-si　yallinacú (22)
on.bridge-*si* they.were.crossing
'They were crossing on the bridge' (reported)
彼らは橋ですれ違っていた．（報告された）

chihoraca　mal-cha cado carca fiide del bautismo (23)
at.that.time bad-CHA it was　baptismal certificate
'At that time my baptismal certificate must have been incomplete' (deduced)
その時私の洗礼証明は不完全であったに違いない．（推定）

chipica diablo-char ca (19)
there　devil-CHAR　it.was
'A devil was presumably there' (deduced, probability reinforced)
悪魔は恐らくそこにいた．（推定，補強された蓋然性）

yuyanacurca-sica　chica cajta huamra (27)
they.were.thinking-SICA that　be　child
'I suppose they were thinking he was a child' (speculated)
彼らは彼が子供だと思っていたと私は思う．（推測）

ここで'推定｛deduced｝'，'推定，補強された蓋然性｛deduced, probability reinforced｝'のように蓋然性という観点において更なる**推定**｛Deductive｝の違

いがあるということが注目されるだろう．これについては2.1.5で議論される．

最後に，タミル語での‘義務｛debitive｝’と‘許可｛permissive｝’の形式が認識的と拘束的の両モダリティに用いられるのは偶然ではない．また，1.2.2で示したように英語のMAY, MUSTにおいても同じである．これは認識的なもの｛epistemic｝，拘束的な可能性｛deontic possibility｝と4.1の必然｛necessity｝のセクションで説明される．

2.1.3　推定と想定

2.1.1で示したように，英語では**推定**｛Deductive｝と想定｛Assumptive｝が対照をなす．

John must be in his office.
ジョンは会社にいるに違いない．
John'll be in his office.
ジョンは会社にいるだろう．

WILLとMUSTの違いはPalmer(1990)にて例証されている．

It's nine o'clock – John will be in his office.
9時だ．－ジョンは会社にいるだろう．
Yes, the light are on, so he must be there.
そう，灯りがついている，だから彼はそこにいるに違いない．

MAY，MUSTと同様WILLは未来を述べるのに用いられ（しかし純然たる未来の用法と区別するのは難しいが．－4.3.2を見よ.），HAVEがつくと過去について言及する．

対照は他の諸言語においても数多く見られる．しかし，それらの多くが報告や感覚といった証拠的なマーカーを含む体系の中に**推定**｛Deductive｝と想定｛Assumptive｝が共に現れるのである．そのような言語の一つにTuyuca語があり，(Colombia-Barnes1984:257)，そのマーカーは‘明瞭｛apparent｝’と‘想定｛assumed｝’と呼ばれている．完全なパラダイムは以下に記す．

díiga　apé-wi
soccer play+3SG+PAST-VIS
‘He played soccer’
(I saw him play)
彼はサッカーをした．

（私は彼がしたのを見た.）

díiga　apé-ti
soccer play+3SG+PAST-NONVIS
'He played soccer'
(I heard the game and him, but I didn't see it or him)
彼はサッカーをした.
（私は試合があるということと彼がするということを聞いたが，私は試合又は彼を見なかった.）

díiga　apé-yi
soccer play+3SG+PAST-APP
'He played soccer'
(I have seen evidence that he played: his distinctive shoe print on the playing fields. But I did not see him play)
彼はサッカーをした.
（私は彼がサッカーをした証拠を見た：彼のものだとわかる模様の靴がグラウンドにあった．しかし私は彼がするのを見なかった.）

díiga　apé-yigɨ
soccer play+3SG+PAST-SEC
'He played soccer'
(I obtained the information from someone else)
彼はサッカーをした.（私は他の人からその情報を得た.）

díiga　apé-hĩyi
soccer play+3SG+PAST-ASSUM
'He played soccer'
(It is reasonable to assume that he did)
彼はサッカーをした.
（彼がサッカーをしたと想定するのが妥当である.）

これらは類型的範疇である，**視覚**｛Visual｝，**聴覚**｛Auditory｝，**推定**｛Deductive｝，**報告**｛Reported｝，**想定**｛Assumptive｝の例として個々に妥当に分けられうる．すでに 1.3.1 で論じられたが，これを複合した体系として即ち判断と証拠の両マーカーを含むものとして扱うのは良くないだろう．**推定**と**想定**は，関与的である判断が証拠に基づいている - Tuyuca 語の場合は視覚的な証拠と一般的によく知られているものという点からである - という点で，それら

は判断と証拠の両方として考察されうるというのがより妥当であるだろう．そのようなものとしてそれらは一次的に認識的なものか，証拠的なもののどちらかの体系に組み込まれる．

推定と**想定**として同じように見なされうるマーカーの組はWintu語でも見られる（現在殆ど絶滅しているN.Californiaの言語．Schlichter 1986:51-3）：そこには‘推量{inferential}’の*-re*とSchlichterが‘予期{expectational}’と呼んでいる*-ʔe*がある．‘推量{inferential}’（**推定**{Deductive}）の例は以下のようなものである．

heke　　ma·n hara·ki-re·-m
somewhere EXCL go+COMPLET-INF-DUB
‘He must have gone somewhere’ (I don’t see him)
彼はどこかに行ってしまったに違いない．（私は彼を見ていない．）

piya　mayto·n dekna·sto·n piya ma·n biyaki-re·-m
those feet　　steps　　that EXCL be+COMPLET-INF-DUB
‘Those tracks of steps! That must have been him’
あの足跡！あれは彼のものに違いない．

‘予期{expectational}’（**想定**{Assumptive}）の例は以下のようである．

tima min-elʔ　　pira·-ʔel
cold die-EXPECT starve-EXPECT
‘He might freeze to death, he might starve’ (it’s cold and he’s alone, helpless, sick)
彼は凍死するかもしれないし，彼は飢え死にするかもしれない．（寒く，彼は一人で，助けも無く病気だ）

ʔimto·n nuqa·ʔ-l
berries　ripe-EXPECT
‘The berries must be ripe’ (it’s that time of year)
その果実は熟れているに違いない．（収穫の時期である）

Schlichterは想定{assumptive}を‘might’と‘must’として訳したが，彼はまた，話し手がその叙述は真実であると信じていると述べている．**推定**の場合，‘環境による感覚的証拠から来るもの’であって，その殆どは視覚的なものである．そして**想定**の場合は‘類似した状況に伴うその人の経験や規則的な

パターン，または生活に共通した繰り返される環境から来るもの’である．()のコメントと上記の所見は**想定**の例を示しているが，これらはWILLで訳していれば，より明白であっただろう．

‘He’ll freeze to death, he’ll starve.’
彼は凍死するだろう，彼は飢えているだろう．
‘The berries will be ripe.’
その果実は熟れているだろう．

与えられたデータによると，証拠的な体系における**想定**は英語におけるWILLと殆ど違いなく見えるが，証拠的な体系における**推定**と英語のMUSTとの間には僅かな違いがある．MUSTは推量に基づいた強調がなされるときにのみ用いられ，一方証拠的な体系における**推定**はより広く用いられる．つまり，推量の程度がいかなるものであっても，そこに含まれるのである．Oswalt(1986:38-9)はKashaya語における‘推量{inferential}’は‘英語だったら通常“must have”を用いない多くの状況で現れる’とした．以下に例を挙げる．

kalikak^{h} dima·　ši-qa-č-q^{h}
book　holding make-cause-self-INF
‘He has a picture taken of himself holding a book’
彼は本を持っている自分を写真に撮った．

heʔén šin-iwa　ma　mace·-t^{h}i-qa-m
how　doing-QUES　you guard-NEG-INF-RESP
‘Why did you not guard her?’
なぜあなたは彼女を守らなかったのか？

彼は次のようにコメントしている．「写真の存在は（目に見えるもの），写真が撮られた証拠である（その行動が見られなくても）」，「護衛しなかったのが見られなくても推量され…なぜなら捕虜に逃げられたからである」

また，Makah語におけるある例は注目されうる．Jacobsen(1986:12)は「身体的な証拠」に関するマーカーの例について訳すのに‘must’を使わない．

haʔukaƛ pi·dic
‘I see you ate’
私はあなたが食べたのを見る．

同様にMithun(1986:101-2)はWyandot語，Seneca語，Cayuga語，Mohawk

語の推量を表す小詞 {inferential particle} についての議論の中で８つの例のうち２つしか訳に‘must’を使わなかった.

話し手がその命題は真実であると信じている事実についてのいくつかの議論にはいくつかの強調がある．このように Schlichter(1986:51)は‘推量 {inferen - tial}’について「話し手は自分の叙述が真実であると信じている」と述べ（上記を見よ），一方 Oswelt(1986:34)は「Kashaya 語の推量 {inferential} の接辞は確信の欠如は全く無く，より高い証拠が欠けている」としている．これらの言語における**推定**が英語の MUST と意味的に異なるかどうかは 2.7.1 で議論される.

2.1.4　譲歩としての MAY

MAY は譲歩として，即ち‘although’の意味で以下のように用いられる.

He may be rich, but he's not very lucky.
彼はお金持ちかもしれないが，彼はついていない.
He may have been rich, but he wasn't very lucky.
彼はお金持ちだったかもしれないが，彼はついてなかった.

ドイツ語の MÖGEN も似たような使い方をする（Hammer1983:261）.

Er mag　　noch so gescheit　sein, . . . aber . . .
he MÖGEN +3SG+PRES+IND ever so intelligent be, . . .　but . . .
‘He may be intelligent, but . . .’
彼は知的かもしれないがしかし….

譲歩を表す節について，話し手は命題についての疑いを指し示さない．ある事態の状態と他のものとを対照させるために，むしろそれを真実として受け止めるのである．従って MAY の用法は**推測** {Speculative} という観点からではなく，**前提** {Presupposed} という観点から説明されうる．ラテン語やイタリア語スペイン語といった他の言語では接続法が用いられるだろう．（1.4.1 と 5.2.5 を見よ.）

2.1.5　**緩和** {Modifications}

幾つかの言語は判断の度合いが弱いか強いかを示す方法を持っている．例えば英語なら法助動詞の過去形，つまり‘法的過去’（1.4.4 と 8.2.1 を見よ）である．これらは専心 {commitment} の程度の低さと，より‘不確かな {tentative}’

判断を表す.

MAY と WIll の過去形である *might* と *would* は以下のように用いられる.

Mary might be at the school by now.
メアリーは今ごろ学校にいるかもしれない.
Mary would be at the school by now.
メアリーは今ごろ学校にいるだろう.

MUST は過去形を持たないが，法的過去の等価物として *ought to* や更に一般的なものとして *should* がある（これは形の上で SHALL の過去形であるが).

Mary ought to / should be at school by now.
メアリーは今ごろ学校にいるはずだ.

しかしこれは幾つかの条件性をもたらす．一つまり‘もし，物事が私の思うとおりであったなら’等. それにこれは単なる MUST を弱めた形式であったり，より不確かな形式ではない（Palmer1979:49,cf100-2).

他の過去形，即ち *could* がある．*could* は現在形である *can* が類似した意味で用いられないにも拘わらず，ある種の推量を暗示するのに以下のように用いられる.

Mary could be at the school by now.
メアリーは今ごろ学校にいるはずだ.

これはあり得る結論を示唆しているのかもしれないが，今，どのような時であるか，またはそこに行くのにどれだけ時間がかかるかというような周知の事実に基づいているのである.

ドイツ語における過去時制形式に類似した用法があるが，それは接続法と共に用いる．MÖGEN の現在形は弱い認識的な判断を表現するのに用いられるのが最も一般的であり，その接続法における過去形は更に不確かなものを表す. (Hammer1983:227ff)

Man möchte meinen, dass . . . (229)
one MÖGEN+3SG+IMPF+SUBJ think that . . .
‘One might think that . . .’
ある人は…と考えるかもしれない.

しかしながら，KÖHEN と DÜRFEN はまた同じ意味で用いられる．

Er könnte krank sein (227)
he KÖNNEN+3SG+IMP+SUBJ ill be
'He might be ill'
彼は病気かもしれない．

Er dürfte krank gewesen sein (228)
he DÜRFEN+3SG+IMPF+SUBJ ill been be
'He might well have been ill'
彼は病気であったかもしれない．

Hammer によると，'*möchte* はしばしば可能性や妥当性を表示したり，又は躊躇や控えめな疑いを表す' 一方 '*dürfte* は *könnte* よりも更なる妥当性を示唆するが，同時により不確かなものや丁寧さを示す'（様々な条件における類似した形式は 8.2 で詳細に議論されている.）とした．

英語とドイツ語における違いというものは弱い判断と強い判断の間に生じうる．Inga 語においても類似した違いが現れる（上の 2.1.2 における Levinsohn 1975 を見よ）．

chihoraca mal-cha cado carca fiide del bautismo (23)
at.that.time bad-CHA it was baptismal certificate
'At that time my baptismal certificate must have been incomplete' (deduced)
その時私の洗礼証明は不完全であったに違いない．（推量）

chipica diablo-char ca (19)
there devil-CHAR it was
'A devil was presumably there' (deduced, probability reinforced)
悪魔は恐らくそこにいた．（推量，補強された蓋然性）

しかし，そこには違いがある．Inga 語において 'presumably' という訳が補強された蓋然性の粗末なものであるにも拘らず，通常の結論とより積極的なものとの間には対照があるように見える．英語とドイツ語における対照は通常の結論とそれよりも消極的なものとの間にある．

2.1.6　過去時制の指示

MAY と WILL の現在形は過去分詞に *have* を加えることで得られる過去の出来事に対する現在の判断をするのに使われる.

Mary may / will / must have arrived by now.
メアリーは今頃着いたかもしれない / 着いただろう
/ 着いたに違いない.

しかし，これらの法助動詞の過去形は話し手が過去の判断を示すのに用いることはできない．以下のようには言えない.

＊ Yesterday Mary might/would arrive.

言い換えれば，命題は過去の中で存在しうるが，モダリティー（judgment）はそうはいかない（勿論，書き言葉には Mary might / would arrive.が独立した節として現れうるが，それは登場人物中の一人の思考を表しているに過ぎず，例えば次のように John relaxed – Mary would be there by now.　ジョンは安心した．－メアリーは今頃着いただろう．これは（以下を見ればわかるように）．‘understood’という報告を表す動詞がついた実質的に報告された発話である）.

これには理由がある．推量｛inference｝と結論は実質的に主観的で遂行的である．それらは発話時に話者によって実際に行われている．過去を表す語彙的な動詞を伴って推量と結論を報告することは以下の例のように完全に可能ではあるが, 推量と結論は過去においてなされ得ない. 例えば Mary thought that…, メアリーは～と考えた，　Mary concluded that…,メアリーは～と決断した，など．Lyons(1977:798)は理論的に客観的で認識的なモダリティが可能な例を示したが，それは考え出されたものであり，彼は主観的で認識的なものと客観的で認識的なものとの違いは少なくとも不確かであるということをしぶしぶ認めている.

MUST は過去の形式をもたない. その形態論だけの理由によって*Mary must be there yesterday を排除する．しかし，そこには唯一可能な結論であり，通常正しいと証明されたことを示す HAVE TO の過去形の予期せぬ用法がある.

I　found the book at last – in the bookcase – it had to be there
私はついにその本を見つけた－その本棚の中に－それはそこにあるに違いない.

しかし，これは次のように説明される．－HAVE TO は法助動詞ではなく，MUST のように主観的でもない．従って次のようにパラフレイズし得る.「～は

認識的に必然であった」言い換えれば,「～するより他なかった」と.

しかし，法助動詞の過去形式は報告をあらわす過去時制動詞と共に報告された発話の中で用いられる（その意味では過去しか示さないのかもしれない－Palmer 1990:43 を見よ）.

He may / will be there.　彼はそこにいるかもしれない/いるだろう.
He said he might / would be there. 彼はそこにいたかもしれないと言った/いるだろうと言った.

MUST は過去形式を持たないので, 類似した構造で用いられる場合や, HAVE TO によって取って代わられる場合もある.

He must be there.　彼はそこにいるに違いない.
He said he must be there. 彼はそこにいるに違いないと言った.

2.1.7　推量と確信｛Inference and confidence｝

Coates(1983:41,131,177)は英語の認識的なものの法助動詞について以下のように述べている.

「最も普通の用法では，認識的な MUST は話し手が自分が述べていることが真であるということについて確信｛confidence｝していることを表し，その場合の確信は，話し手にとって知っている事実（それは事実が文脈の中で明らかにされているかもしれないし，又はそうでないかもしれないが）からの推定｛deduction｝に基づいている．MAY と MIGHT は認識論的可能性の法助動詞であり，表現された命題の中で話し手の確信の欠如を表している．WILL は命題が真であることに対する話し手の確信を表している. しかし, 認識的な MUST とは違って，話し手の確信は論理的な推量｛logical inference｝の過程に基づいたものではない．その代わり，一般常識や繰り返された経験に基づいている.」

しかし，ここで繰り返される‘確信｛confidence｝’についての言及には若干の誤りがある．なぜなら，ここには 2 つの問題があるからである．一つは‘確信’の問題，つまり話し手の専心｛commitment｝の程度の問題である．もう一つは結論の強さの問題である．それは以下のように副詞によって確信の程度を表しうるからである.

Perhaps she's there.　多分彼女はそこにいる.
She's probably there.　恐らく彼女はそこにいる.
She's certainly there.　確かに彼女はそこにいる.

これらと法助動詞がついた文は，必ずしも等しいというわけではない．

MUST についてはそこには常に推量に基づいた事実（しばしば観察しうる）の幾つかの指標がある．Coates(1983:41)からの例を挙げると，

> His teeth were still chattering but his forehead, when I felt it, was hot and clammy. He said ‘I must have a temperature’.
> 彼の歯はまだカチカチ音を鳴らしたが，私が彼の額を触ったとき，熱くて湿っていた.「私は熱があるに違いなかった.」と彼は言った.

類似した例は Palmer(1979:44)にもある.

> All the X-rays showed absolutely negative. There was nothing wrong, it must just be tension, I suppose.
> 全てのレントゲンは絶対的に陰性であった. そこには悪いものはなく，私が思うにほんの取り越し苦労にすぎない.

MUST の本質的な特徴は既知の事実からの推定 {deduction}，推量 {inference} の概念であって，それは *certainly, definitely* などといった副詞に表されるたんに話し手の確信ではないというのは明らかである.

同様に WILL は *probably* という副詞によってパラフレイズされないが，明らかに観察しうる事実ではなく，周知の事実からの推量を描いている.

このように *Mary will be at the school by now.*（メアリーは今頃学校にいるだろう）は，今がどのような時間であり，またメアリーの行動が何であるのかを知っている事実に基づいた結論を指し示している.

対照的に，*Mary may be at school.* と *Perhaps Mary is at school.* との間にはほとんど違いがないように見えるが，最初の例は結論のための十分な理由が欠けており，2 番目の例は現実的な確信 {confidence} が欠けているという点で消極的な意味である．ちょうどミルクなしのコーヒーとクリームなしのコーヒーに違いがないようなものである.

そして推量 {inference} と確信 {confidence} には違いがある．前者について言えば，話し手が利用可能な情報から推量することを話し手自身が示しているのであり，一方後者では話し手が言っていることの中で話し手自身が持っている確信の程度を示しているのである. MUST と *certainly* のような副詞の間には明白な違いがある．前者のモーダルな助動詞は推量を表現するのであり，後者は副詞的な確信を表すのである. 同じことが WILL にも当てはまり，*probably* と異なる．MAY と *perhaps* の場合にはほとんど違いがないが，しかしそれらは消極的な意味で各々推量と確信の例えのように見受けられるのである。

しかし，確信を表すマーカーは推量のマーカーにつけられるのかもしれない.

法助動詞について言えば，話し手の専心はHalliday(1970:331)が呼んだ話し手の専心を補強するという‘調和の取れた組み合わせ｛harmonic combination｝’を加えるか，又は話し手の専心を減らす‘語調を和らげることば｛hedge｝’を加えることによって修正することが可能である．Coates(1983:46,138)は認識的なMUSTに関して調和の取れた｛harmonic｝意味で使われる，*I 'm sure, surely* と *certainly* が起こることを記し，語調を和らげることば｛hedge｝である *I think*（最も一般的な），*I mean, I suppose, I fancy, I take it,* と *I would guess* が起こることを記している．MAYに関して彼女は調和の取れた｛harmonic｝意味である *perhaps, possibly* と語調を和らげることば｛hedge｝である *I suppose, I think, I don't know, I wouldn't know, I'm not sure, I mean,* と *It seems to me* を示している．これらは文法体系に属さないものであり，またこれらの分析は本研究の範囲を超えているものとする（類似した問題についての論議は2.2.7と2.7.2を見よ）．

2.2　証拠的モダリティ

2.2.1　証拠的なものの体系｛Evidential systems｝

一次的に証拠的なものの多くの術語について形式上の体系があるが，**報告**｛Reported｝と**感覚**｛Sensory｝(感覚の証拠)といった純粋に証拠的な意味範疇の２タイプがあるに過ぎない．確かに，Donaldson(1980:275-6)によると，Ngiyambaa語には２つの‘証拠的な接語｛Evidence clitics｝’しかなく，それらは以下に示すような‘感覚的な証拠’と‘言語で表された証拠’といったものである．

ŋindu-gara　　girambiyi
you+NOM-SENS.EVID sick+PAST
'One can see you were sick'
あなたが病気だったことを知っているはずだ．

ŋindu-dhan　　girambiyi
you+NOM-LING.EVID sick+PAST
'You are said to have been sick'
あなたは病気であったと言われている．

（Ngiyambaa語では‘感覚的な証拠’は五感のどれも含むかもしれない．2.2.3を見よ．）

しかし形式上の体系の多くは2.1.の判断｛judgments｝で議論されたように，

他の範疇を含む．その様な拡大した証拠的なものの体系の明確な例の一つ（Central Pomo 語）は 1.2.1.で例示した．他のものでは Tuyuca 語（ブラジルとコロンビアーBarnes 1984:275,また Malone1988 のデータの再分析を参照）があり，そこには証拠的なものの範疇は‘視覚’，‘非視覚’，‘明瞭{apparent}’，‘二次的’，‘想定｛assumed｝’がある．

díiga　apé-wi
soccer play+3SG+PAST-VIS
‘He played soccer’
(I saw him play)
彼はサッカーをした．（私は彼がプレイするのを見た．）

díiga　apé-ti
soccer play+3SG+PAST-NONVIS
‘He played soccer’
(I heard the game and him, but I didn’t see it or him)
彼はサッカーをした．（私は試合のことと彼のことを聞いた．しかし私は試合も彼も見ていない．）

díiga　apé-yi
soccer play+3SG+PAST-APP
‘He played soccer’
(I have seen evidence that he played: his distinctive shoe print on the playing fields. But I did not see him play)
彼はサッカーをした．（彼がプレイしたという証拠を見た．：グランドに彼の靴だとわかる足跡があった．しかし私は彼のプレイを見ていない．）

díiga　apé-yigɨ
soccer play+3SG+PAST-SEC
‘He played soccer’
(I obtained the information from someone else)
彼はサッカーをした．（私は他の人からその情報を得た．）

díiga　apé-hĩyi
soccer play+3SG+PAST-ASSUM
‘He played soccer’
(It is reasonable to assume that he did)

彼はサッカーをした.（彼がプレイしたと仮定するのは理にかなっている.）

初めの2つは感覚の証拠を指し示しており,4番目は話し手が聞かされたことからの情報であり，一方，3番目と5番目は見たもの，或いは知っていることからくる証拠に基づいた判断を指している.

より異なった体系についてはG.H.Matthews(1965:99-100)がHidatsa語を示している.

そこには訳が付いていて深刻な問題があるにも拘わらず(2.7.1.を見よ)，これは振り当てられたグロスによって興味深いものである.Matthewsは各々の文の終わりの節がムードを表す形態素で終わることを示している．そのような6つの形態素が以下のようにグロス付けされている.

確固たるもの｛*Emphatic*｝:「その文が真実であると話し手がわかっているものを指し示す．つまり，もし文末にEmphaticで終わる文が正しくなければ，話し手は嘘つきだと見なされる」

ピリオド｛*Period*｝:「その文が真実であると話し手が信じているものを指し示す．つまり，もしそれが違った事実であるとわかった場合，その話し手は間違ったのであって，嘘つきではない」

引用｛*Quotative*｝:「話し手は周知の事実として言われたと見做していることを指し示している」

報告｛*Report*｝:「話し手は文の中で他人から与えられた情報を聞かされていることを指し示しているが，話し手自身にはその真理値に対する証拠は何ら無い」

不明瞭｛*Indefinite*｝/**疑問**｛*Question*｝:「これらはその文が真実であるかどうかを話し手が解らないことを指し示している．また，**不明瞭**｛Indefinite｝は聞き手が知らないと話し手が思っていることを意味する．一方，疑問｛Question｝は聞き手が知っているものと話し手が思っていることを指し示している」

上から順に**確固たるもの**，**ピリオド**，**引用**の例を示すと，

wacéo íikipi kurè héo ski
man　pipe　carried　EMPH
'The man (sure) did carry the pipe'
その男は（確かに）パイプを持っていた.

wacéo íikipi kurè héo c
man　pipe　carried　PER
'I suppose the man carried the pipe'
その男はパイプを持っていたと私は思う.

wacéo íikipi kurè héo wareac
man　pipe　carried　QUOT
'The man carried the pipe, they say'
彼らが言うには，その男はパイプを持っていた.

（'**報告**' と '**不明瞭**' のマーカーとしてはそれぞれ *rahe*（2.2.2.の例を見よ.），*toak* があり，一方 'Question' には実際的な音声の形が無い）

今まで記されてきた拡大した証拠的なものの体系の殆どはアメリカ先住民言語の中で見出されてきたが，Foley（1986:165）はパプア言語の幾つかに証拠的なものがあると報告している．彼は Loeweke と May(1980)の Fasu 語の例を引用したが，そのリストは '見えるもの {seen}'，'聞こえるもの {heard}'，'証拠からの推定 {deduced from evidence}'，'知っている情報源からの伝聞 {hearsay from a known source}'，'知らない情報源からの伝聞 {hearsay from a unknown source}'，'憶測 {supposition}' を含んでいる.

a-pe-re
SE[EN]-come-[SE]EN
'[I see] it coming'
それが来るのを（私は見た）.

pe-ra-rakae
come-CUST-HEARD
'[I hear] it coming'
それが来るのを（私は聞いた）

pe-sa-reapo
come-PAST-DED
'[I've concluded] it's coming'
それが来るのを（私は判断した）

pe-sa-pakae
come-PAST-HSY.UNKNOWN
'[I've heard] it's coming'
それが来るのを（私は（情報源はわからないが）聞いた）

pe-sa-ripo
come-PAST-HSY.KNOWN
'[I've heard] it's coming'
それが来るのを（私は（情報源が明確）聞いた）

pe-sa-pi
come-PAST-SUPPOSE
'[I think] it's coming'
それが来るのを（私は思った）

更に驚くことにLadakhi語（Tibeto-Burman－Koshal 1979）は認識的なモダリティについて（拘束的なものの接辞のセットも同様に）３つも体系を有している.

第一に, 6つの接辞の体系があり, そのうち4つは証拠的な'報告{reportive}'(Reported), '視覚的なもの{observed}'(Visual), '経験的なもの{experiental}'(not fully explained), '推量{inference}'(Deductive)がある. その他の2つの一つに('可能{possible}')は**推測**{Speculative}であり, その他は'総称的{generic}'と呼ばれている.

pəlldən-ni　spe-ča　sill-ət
Paldan-ERG book-DIR read-REP
'Paldan reads a book' (a report)
Paldanは本を読んでいる.（報告）

kho-e　lcəŋ-me cəd-duk
he-ERG tree-die cut-OBSERVED
'He cuts the tree' (direct observation)
彼は木を切っている.（直接見ている）

kho che-ərək
he　go-EXPERIENTIAL
'He goes' (speaker's feelings)
彼は向かっている.（話し手の感覚）

kho-ə zur-mo sənte duk ši-ok
he-DAT pain-DIR very be die-INF
'He will die, because he is very sick'
彼は死ぬだろう．何故なら彼はひどく病んでいるから．

kho-e thore ŋə əčo thuk-cen
he-DAT tomorrow my brother-DIR meet-POSSIBLE
'He is likely to meet my brother tomorrow'
彼は明日私の弟に会うらしい．

ñi-mə zəktəŋ sər-ne sərrənok
sun-DIR daily east-ABL rise-GEN
'The sun rises daily in the east'
太陽は毎日東から昇る．

第二に，いくつかの証拠的な特徴を含んだ推量{inference}の４タイプは-*thig*-という接辞によって示される．その４タイプとは'音からの，或いは習慣的出来事からのもの'，'正確に記憶されていない観察'，'観察ではなく，部分的な或いは曖昧な知識'，'推測｛guessed｝'例えば遠方で起こった出来事ゆえにはっきりと見ることが出来ないというようなもの'．

dolmə yoŋ-thig-rek
Dolma come-INF-SOUND
'Dolma is coming' (hearing footsteps, voice, etc.)
Dolma が近づいている．（足音や声などが聞こえている．）

khoe kəne pene ŋe khyer-thig-yot
he me from money take-INF-OBSERVED
'He might have taken money from me'
彼は私からお金を盗ったかもしれない．

kho i-khəŋpe nəŋŋə duk-thig-son
he this-house in live-INF-UNOBSERVED
'He might have lived in this house'
彼はこの家に住んでいたかもしれない．

əpumo　rdemo　yot-thig-duk
that-girl beautiful be-INF-GUESSED
'That girl might be beautiful'
あの少女は美しいかもしれない.

第三に，単純な叙述や明確な知識，経験又は感覚，見えたり聞こえたものといったものを表すのに用いられる４つの繋辞がある.

ŋə məg-mi　yin
I　soldier-DIR be
'I am a soldier' (simple statement)
私は兵士だ.（単純な叙述）

khoŋ-ŋə pe-ne　yot
he-DAT　money-DIR be
'He has money' (definite knowledge)
彼にはお金がある.（明確な知識）

ŋə go-ə　zur-mo　rək
I　head-DAT pain-DIR be
'I have a head-ache' (experience)
私は痛い頭を持っている.（経験）

pu-mo　rdemo　duk
girl-DIR beautiful be
'That girl is beautiful' (seen)
あの少女は美しい.（見えたもの）

2.2.2　報告

Tuyuka 語，Nigiyambaa 語，Fasu 語の**報告**｛Reported｝（'二次的｛second-hand｝'，'言語的な証拠'，'伝聞｛hearsay｝'）の例は先の章で触れた.

報告｛Reported｝はムード体系を持つ言語で見られるが，その体系には唯一'結合｛joint｝'があり（6.1 を見よ），言い換えればそこには**現実**｛Realis｝，**非現実**｛Irrealis｝といった文法的なマーカーが他の範疇の文法的なマーカーと共起するのである．この共起はこれらの範疇が概念的に'現実｛realis｝'又は'非現実｛irrealis｝'であるということを示している（またそれらそのものは類型的には**現実**又は**非現実**である）．Hixkaryana 語（Calib,N.Brazil-Derbyshire

1979:1435）の体系に見られるように**報告**は一般的に**非現実**としてよくマークされる．そこでは‘不確かなもの｛uncertain｝’は**非現実**のマーカーであり，‘伝聞｛hearsay｝’という術語は**報告**として使われる（6.5.4 を見よ）．

nomokyan　　ha-ti
he.come+NONPAST+UNCERT INTEN-HSY
‘He’s coming (they say)’
彼が近づいている．（彼らが言う）

しかしながら，ドイツ語やデンマーク語（Davidsen-Nielsen1990:96）のように卓越した判断の体系を有する言語で同じような形態が見られる．

Er soll　　steinreich sein
He SOLLEN+3SG+PRES+IND very.rich be
‘He is said to be extremely rich’
彼は非常に裕福だと言われている．

Han skal　　være enormt　　rig
He SKULLE+PRES be　enormously rich
‘He is said to be enormously rich’
彼はべらぼうに裕福だと言われている．

幾つかの言語では**報告**の下位範疇を認識する必要がある．Willet(1988:57,96)は報告された証拠には 3 つの種類があるとしている．

1）二次的な証拠｛*Second-hand evidence*｝：話し手は直接目撃した者から状況描写を聞いたと主張する．
2）三次的な証拠｛*Third-hand evidence*｝：話し手は直接目撃していない者から状況描写を聞いたと主張する．
3）民間伝承からの証拠｛*Evidence from folklore*｝：話し手は描写された状況が言い伝えからなるものだと主張する．

これらの下位範疇に適切な呼び方を与えるのは難しい．‘引用’や‘伝聞’，‘民間伝承’といった術語を用いるのが望ましいのかもしれない．しかし，これらの術語の使用は文献においては一貫性を欠くので，これは混乱をもたらすかもしれない．ましてや，3 番目の下位範疇は通常一般的に真実であると信じられていることを示すのであって，必ずしも民間伝承や伝統といった分野を示さない

という点で，‘民間伝承’は誤解を招く．

こういった理由によって‘**報告** (2)’，‘**報告** (3)’，‘**報告** (Gen)’とする（‘**報告**’は分化されていない範疇や下位範疇を含む総合的な範疇を指す場合もある）．

多くの言語において同一の形式が**報告**の全３タイプとして用いられることもある．これはMithun(1986:102-3)の‘引用を表す小詞｛quotative particle｝’の例である北部イラク諸語のCayuga語，Oneida語，Mohawk語，Seneca語の場合のように思われる．その例のうち２つは明らかに言い伝えからのものであり，一方残りの２つには証拠が‘二次的’なのか‘三次的’なのか解らない．同じことがTuyuca語にも当てはまり，Barnes(1984:261)では話し手とは「話し手に伝えられた情報を報告する」とされており，また**報告** (Gen)の例を示しており，それは伝説の一部である．

ãñã́ kĩ̃re baka-yigɨ
‘A snake bit him’
蛇が彼を噛んだ．

同様に先に挙げたHixkaryana語の例は‘彼らが言う｛they say｝’というのがグロス付けされている．しかし，Derbyshireは更に同じ‘伝聞’という小詞は，語られている言い伝え全体を通して度々繰り返されるはずだと述べ，そしてGivón(1982:34-5)はSherpa語(Tibeto-Burman)で間接/伝聞のマーカーは教典での一節において用いられると報告した（2.7.1を参照）．

しかし幾つかの言語は下位タイプを区別するマーカーを持っている．そしてFasu語(2.2.1.)は‘知っている情報源からの伝聞’と‘知らない情報源からの伝聞’に関して異なったマーカーを有しており，それらは即ち**報告**(2)と**報告** (3)に該当する．

pe-sa-pakae
come-PAST-HSY.UNKNOWN
‘[I've heard] it's coming’
それが近づいて来ている（のを私は聞いた）．

pe-sa-ripo
come-PAST-HSY.KNOWN
‘[I've heard] it's coming’
それが近づいて来ている（のを私は聞いた）．

Hidatsa語(Siouan,USA)でも同様に，Matthews(1965:99-100)は彼が呼ぶところの，‘引用’と‘報告’との違いを区別している（言い換えれば再びそれぞ

れ**報告** (2)と**報告** (3)になる). これらは以下のようにグロス付けされている(2.2.1.を参照).

引用 {*Quotative*}：話し手は言われたことが周知の事実だと見做していることを指し示している.

報告 {*Reported*}：話し手は文中で他の誰かによって与えられた情報を言われたということを指し示しているが, その真理値には何の証拠も無い.

以下に例を挙げる.

wacéo íikipi kurè héo wareac
man pipe carried QUOT
'The man carried the pipe, they say'
その男がパイプを持っていたそうだと彼らが言っている.

wacéo wíira rakcí héo rahe
man pipe carried REP
'The man carried the pipe, they say'
その男がパイプを持っていたそうだと彼らが言っている.

中央 Pomo 語もまた(2.2.1.の例を見よ), '一般的な知識' と '伝聞' には違いがある. '**一般的な知識** {General Knowledge}' は**報告** (Gen)として分類されるものであり, 一方, '伝聞' は**報告** (2)か或いは**報告** (2)に**報告** (3)を足したもののように見える (例文は '私は言われた' というグロスがついている).

より異なった区別はドイツ語にあり, それは**報告**の更に別のタイプである(1.3.1.を参照). モーダルな動詞の SOLLEN が他人が言っていることを表す半面, WOLLEN は主語によって表された人が言っていることを示している(Hammer1983:231,232).

Der Geschäftsführer sollte schon nach Hause gegangen sein
the manager SOLLEN+3SG+PAST already to house gone to.be
'The manager was said to have gone home already'
その責任者はすでに家に帰ったと言われた.

Er will　　eine Mosquito abgeschossen haben
he WOLLEN+3SG+PRES+IND a　Mosquito shot.down　have
'He claims to have shot down a Mosquito' (plane)
彼はモスキート（飛行機）を落としたと主張している.

また，WOLLEN は主語による非言語コミュニケーションにも用いられる.

Er wolle　　mich nicht erkennen
he WOLLEN+3SG+PAST me　not　to recognize
'He pretended not to recognize me'
彼は私に気づかない振りをした.

ドイツ語についてはもう一つ注目する点がある．上で述べたことを簡潔に言うと，接続法は言われたことを指し示すのに用いられる．即ち以下に述べるような**報告** (2)である(5.2.5 を参照).

Bei seiner Vernehmung berief sich H. auf Notwehr.　Er
in　his　examination appealed　H　to　self-defence. he
sei　mit　S. in Streit　geraten　und
be+3SG+PRES+SUBJ with S. in quarrel fallen　and
habe　sich von diesem bedroht　gefühlt
have+3SG+PRES+SUBJ self　by　him　threatened felt
'In the course of his cross-examination, H. pleaded self-defence. He had become involved in a quarrel with S. and had felt himself to be threatened by him'
尋問の間，H 氏は自己防衛を主張した．S 氏とのケンカに巻き込まれたと．そして彼は S 氏に脅かされていると感じた.

2 番目の文は話し手（或いは書き手）によって主張されているのではなく，(H 氏によって）述べられたことを示している.

確実な報告と確実ではない報告とのより大きな違いは Lega 語にあるが，これは 2.2.4.で議論される.

2.2.3　感覚

感覚｛Sensory｝を取り巻く状況は**報告**｛Reported｝のそれと似ており，ある言語では単独の**感覚の**範疇を持つにも拘わらず，ある言語では**視覚**｛Visual｝(視

覚的な証拠）と**聴覚**｛Auditory｝（聴覚的な証拠）といった下位範疇を持つが，それらが最も目に付く．しかし，実際にはそこには一般的に3つの可能性がある．：(ⅰ)単独のマーカー（**感覚**），(ⅱ)視覚的なマーカーとその他すべての感覚（恐らく**視覚**と**非視覚**に分けられるような）のマーカー，(ⅲ)視覚的，聴覚的なマーカー（**視覚**と**聴覚**）．稀に視覚や聴覚より他の感覚のマーカーがある場合がある（以下参照）．

Ngiyambaa 語（Donaldson1980:275-6）は最初のタイプ，つまり五感全てを含める可能性のある感覚的証拠に用いられる接辞がある．

ŋindu-gara　　girambiyi
you+NOM-SENS.EVID sick+PAST
'One can see you were sick'
人はあなたが病気だったと見て取れる．

gabugaː-gara-lu　　ŋamumiyi
egg+ABS-SENS.EVID-3ERG lay+PAST
'It's laid an egg by the sound of it'
(The chicken concerned was out of sight.)
それがその音によって卵を産んだ．（当該の鶏は見えない）

yura:bad-gara　　ŋidji　　guɽuga-nha
rabbit+ABS-SENS.EVID here+CIRC be inside-PRES
ŋama-ɽa-baɽa-dhu-na
feel-PRES-CATEG.ASS-1NOM-3ABS
'I can tell there's a rabbit in here. I (can) feel it for sure'
(The speaker had her hand in a burrow.)
この中にウサギがいるとわかる．私には確かにそれを感じられる．
（話し手はウサギの巣の中でウサギの足を掴んだ）

dhagun-gir-gara　ŋina　　dhiŋgaː　ga-ɽa
earth-nasty-with-SENS.EVID this+ABS meat+ABS.be+PRES
'This meat tastes nasty with earth'
(Said while attempting to eat it.)
この肉は泥臭い味がする．
（と，それを食べようとしている間に言った）

waraːy-gara-dhu-na　　bungiyamiyi　　dhiŋgaː-dhiː
bad+ABS-SENS.EVID-1NOM-3ABS change.with.fire+PAST meat+ABS-1OBL
'I have burnt my meat so it's no good, to judge by the smell'
(Said outside the house where the meat was cooking.)
臭いからすると私は肉を下手に焼いてしまった.
（と，肉が焼かれている家の外で言った）

その感覚には極めて明白に視覚，聴覚，感触，味，臭いといったものが各々含まれている.

目に見えるもの（**視覚**｛Visual｝）の１つのマーカーとその他全ての感覚（非視覚｛non-Visual｝）に関するマーカーといった２番目のタイプは Tuyuka 語（Barnes1964:260）に代表される．2.2.1.からの例を以下に繰り返す.

díiga　apé-wi
soccer play+3SG+PAST-VIS
'He played soccer'
(I saw him play)
彼はサッカーをした.（私はプレイを見た）

díiga　apé-ti
soccer play+3SG+PAST-NONVIS
'He played soccer'
(I heard the game and him, but I didn't see it or him)
彼はサッカーをした.
（私は試合の声と彼の声を聞いたが，私はその両方を見なかった）

２番目の例が聴覚について言及しているにも拘わらず，Barnes はこれを「非視覚的証拠とは誰かが，何かが，或いはある出来事が如何に匂い，聞こえ，味がし，感じられ（つまり匂い，音，味，感触）ということを報告するのに用いられるのかもしれない」と述べている．以下に例を示す.

yoáro susúhã-ta (*ta* = 3PL+PAST)
'They smelled (of liquor) a long way off'
彼らは遠くから漂う（お酒の）匂いをかいだ.

mũtúru bísiti (ti = 'other' (1, 2 or inanimate) +PAST)
'The motor roared'
モーターが轟音をたてた.

また，話し手自身の感情，痛み，知識を述べるのにも用いられる．

páaga pũnĩ–ga (*ga* = 'other'+PRES)
'My stomach hurts'
私の胃が痛む．

t sá-ga
'I like it'
私はそれが好きだ．

視覚｛Visual｝，**聴覚**｛Auditory｝の両方に関する分離したマーカーである3番目のタイプは一般的ではない．確かにOswelt(1986:43)は「Kashaya語，北部Pomo語，中央Pomo語は非視覚的感覚である証拠的な**聴覚**｛Auditory｝を持っているという点において世界の言語の中でも明らかに珍しい」と言っている．

中央Pomo語についてはMithun(1999:181)は**視覚**だけではなく**聴覚**（それに単純な平叙文だけではなく，**報告**｛Reported｝や**推定**｛Deductive｝も含めて．それについては2.7.1.を参照）を明確にマークするよく整理された体系を示した．完全な体系は1.2.1.で示した．以下に**聴覚**と**視覚**の例を繰り返し示す．

čʰéemul-ya
rain.fell-VIS
'It rained' (I saw it)
雨が降った．（私はそれを見た）

čʰéemul-nme·
rain.fell-AUD
'It rained' (I heard it)
雨が降った．（私はその音を聞いた）

Kashaya語について，Oswelt は**視覚**の対のマーカーと**聴覚**のマーカーについて言及している．**視覚**のマーカーにはOswelt(1986:36)が'現実｛factual｝'，'視覚｛visual｝'と名づけているものがあるが，それらの形式的な違いはそれぞれ未完了相と完了相のそれである．これら対の其々は話し手が見ているものか，見たものについて言及するが，'現実｛factual｝'はまた，より広く一般的に観察されてきた，或いは常識的な行動の階層を言及するのにも用いられるのかもしれない．以下に例を挙げると

qowa°q-ŵă　(qowá·qʰ)
pack-FACT
'(I see) he is packing'
彼が荷造りしている（のを私は見た）.

qowa°q-yă　(qowahy)
pack-VIS
'(I just saw) he packed, I just saw him pack'
彼は荷造りをした（のを私はちょうど見た）.
私は彼がちょうど荷造りをしているのを見た.

聴覚のマーカーは完了相，未完了相の両方と共起する.

mo-V̂°d-V̂°nnă (mo·dun)
run-IMPFV-AUD
'I hear/heard someone running along'
私は誰かが走っているのを聞いている / 聞いた.

mo-m°ac-V̇°nnă (momá·cin)
run-PERFV-AUD
'I just heard someone run in'
私は誰かが立ち寄ったのをちょうど聞いた.

しかし**聴覚**のマーカーはアメリカ先住民言語に限られてはいない．2.2.1.で記したように**視覚**と**聴覚**の両マーカーはパプア諸語である Fasu 語にも見られる（Foley1986:165;Loeweke and May1980）.

a-pe-re
SE[EN]-come-[SE]EN
'[I see] it coming'
それが近づきつつある（のを私は見ている）.

pe-ra-rakae
come-CUST-HEARD
'[I hear] it coming'
それが近づきつつある（のを私は聞いている）.

幾つかの言語の中には，聴覚に関して主に用いられるが，聴覚に関してのみ用いられるのではないマーカーがある．Gordon(1986b:76-7)はMaricopa語（Yuman）の中で視覚と聴覚について例を示している．

m-iima-'yuu
2–dance-SEE.EV
'You danced' (I know because I saw)
君は踊った（私は見たので知っている）.

m-ashvar-a
2-sing-HR.EV
'You sang' (I know because I heard it)
君は歌った（私は聞いたので知っている）.

しかし，彼女は「'hearing evidential' とは，一次的な知識･･･それは出来事を目撃することによって得るのではなく，話や出来事を他の手法で理解（通常は聴覚）することによる，そういった知識として用いられるのである.」と述べている．更に，それは例えば 'sing' のように音と強く関連する動詞や以下に述べるような動詞と密接に関連した動詞ともっとも強く結びつくのである.

Pam-sh　'im nyip ny-mhank ii-'a
Pam-SUBJ say me　3/1–like　say-HR.EV
'Pam told me that she likes me'
Pamは私に彼女は私のことが好きだと言った.

同様にMakah語(Nootka,Washington State)に関して,Jacobsen(1986:9-10)はマークされていない平叙文と聴覚マーカーのついた例を挙げている.

wikiˈcaẓaw
'It's bad weather'
悪い天気だ.

wikiˈcaẓ akq̓adʔi
'It sounds like bad weather'
悪い天気のように聞こえる.

しかし，Jacobsenは同一のマーカーが人間の感覚に用いられうることと，近年それが直接的な観察を言及するために拡大していっているという点に注目し

ている．

視覚や聴覚以外の感覚を表す特定のマーカーの例は証明されていない．しかし，Kashaya 語には珍しいことに，**視覚**と**聴覚**とを区別する（上記を参照）ものがあり，また Kashaya 語には‘その他のクラス｛catch-all class｝’があり，それは行動から離れて見受けられる証拠を基にした推量を偶然含むものである．(Oswalt1986:43).

これは Oswalt が‘**推量**｛Inferential｝ I’と呼ぶもので‘高位証拠性の欠如’を表している．以下に例文を示す（Oswalt1986:38-9).

mu cohtoc-qă
‘He must have left, he has left’
彼は発ったに違いない，彼は発った．

cuhni· muʔt̀a-qă
‘Bread has been cooked’ (I can smell it)
パンが焼けた．（私はその匂いをかいだ）

Maricopa 語には上で述べたように，通常聴覚として用いられるマーカーで他の感覚が表されうる．

Ladakhi 語（2.2.1.でその例について議論された）ではその状況は複雑である．幾つかある証拠的なものの基本的な組の中に**視覚**に関する証拠があり，推量を表すのに用いられる幾つかの接辞の組の中に**聴覚**（又は**聴覚 - 想定**｛Auditory-Assumptive｝）に関するものがあり，**視覚 - 聴覚**｛Visual-Auditory｝について言及する繋辞がある．繰り返し 2.2.1.からの例を挙げる．

kho-e lcəŋ-me cəd-duk
he-ERG tree-die cut-OBSERVED
‘He cuts the tree’ (direct observation)
彼は木を切っている．（直接的な観察）

dolmə yoŋ-thig-rek
Dolma come-INF-SOUND
‘Dolma is coming’ (hearing footsteps, voice, etc.)
Dolma はこちらに来つつある．（足音や声などを聞いている）

pu-mo rdemo duk
girl-DIR beautiful be
‘That girl is beautiful’ (seen)

その少女は美しい.（見える）

付け加えて，経験と感情に関する繋辞を足した基本的な組の中に‘経験的なもの｛experiental｝’（十分説明されていないが）がある.

kho che-ərək
he　go-EXPERIENTIAL
‘He goes’ (speaker’s feelings)
彼は行く（話し手の感情）.

ŋə go-ə　　zur-mo　rək
I　head-DAT pain-DIR be
‘I have a head-ache’ (experience)
私は頭が痛い（経験）.

最後に英語ですら知覚とモダリティの間に幾つかの関連があるのは注目されるかもしれない．人が見，聞き，嗅ぎ，味わい，感じたことを表す最も一般的な方法は法助動詞の CAN を用いることである.

I can see the moon
I can hear a funny noise
I can smell something burning
I can taste salt in this
I can feel something hard here
私には月が見える.
私にはおかしな騒音が聞こえる.
私には何かが焼ける匂いがする.
私にはこの中に塩の味を感じる.
私にはここに何か硬いものがあると感じる.

これら全ては話し手が知覚を持っていることを指し示しており，知覚を得るための能力があることを示しているのではない．関連している点は，英語では通常単純な平叙文で感覚に関する情報を表すのではなく，その代わりにモーダルな形式を使うが，これはまさに Ngiyambaa 語が証拠的な接語でもって感覚的証拠を示すことと同じことなのである.

2.2.4　直接的，間接的な証拠

言われたこと(**報告** {Report})か，或いは推量されたもの(**推定** {Deductive})のどちらかを示す単独のモダリティマーカーを持つ言語が幾つかある．トルコ語について言えば，Akasu-Koç Ayhan と Slobin(1986:159)は接尾辞-*dI* が付くもので彼らが‘直接的な経験’と呼ぶものと，接尾辞 *mIş* が付くもので彼らが‘間接的な経験’と呼ぶものの間の対照を例示した．後者の例を以下に挙げる．

Ahmet gel-mIş
Ahmet come-MIŞ
‘Ahmet came / must have come’
Ahmet は来た．/来たに違いない．

これは次の様に理解されるかもしれない．

(a)推量 {inference} : 話し手は正面のホールにかかっている Ahmet のコートを見ている．
しかし，話し手は Ahmet をまだ見ていない．
(b)伝聞 {hearsay} : 話し手は Ahmet が到着したと聞かされた．しかし話し手は Ahmet をまだ見ていない．

(註 : Lewis(1967:101))

しかし推量の解釈は，Ahmet の到着から生じている壁にかかっているコートのように先行する過程に起因している状態から描写された推量 {inference} のみ可能である．従って‘推量 {inferential}’の解釈ではなく，結果として‘伝聞 {hearsay}’の解釈のみ以下のように考えられるかもしれない．

yağ mur yağ-acak-miş
rain　　rain-FUT-*miş*
‘It is reported that it will rain’
*‘It will probably rain’
雨が降るだろうということが報告されている．
*多分雨が降るだろう．

また Sherpa 語では Givon(1982:32)が‘直接的’証拠，‘間接的－伝聞’証拠と呼ぶものの間に相違がある．以下に例を挙げる．

ti　laĝ a　ki-yin-no
he work do-AUX-be+DIR
'He is working (and I have direct evidence to support this)'
彼は働いている（そして私はそのことを支持する直接的な証拠を持っている）.

ti　laĝ a　ki-yin-way
he work do-AUX-be+INDIR
'He is working (I have indirect/hearsay evidence)'
彼は働いている　（私は間接的/伝聞の証拠を持っている）.

Abkhaz 語(N.W.Caucasus-Hewitt1979:196)にも似たようなものがあり，「推量｛inference｝または伝聞｛hear-say｝の結果として成された主張を指し示す」ためにある時制形式の中で動詞に付く接尾辞がある．以下に例を挙げる．

də-r-s-xà-zaap'
him-they-kill-PERF-INFER/HSY
'Apparently they have already killed him'
明らかに彼らはすでに彼を殺してしまった.

しかし, Abkhaz 語は多様なモーダルな概念を表す数多くの構造を持っている．
他に考えられる例としては，旧ソ連のイラン系の言語である Tajik 語がある．Rastorgueva(1963:64)は‘証拠｛evident｝’と‘非証拠｛non-evident｝’の形式を区別しており，「後者は話し手にとって既知の出来事や行動であって，それは個人の経験に基づいたものではなく，間接的な情報源からのもの，つまり他者の言葉や論理的な推量から来るもの」を指し示しているものとしてグロス付けされている．‘非証拠’の動詞の形式は完了相から形成された複合語であり，それは繋辞の形式を含んでいる．例を挙げる．

aka ʃodiː *meomadaast*, rost-mi
'(they say that) Mr Shodi is coming. Is that true?'
（彼らは次の様に言っている）Shodi 氏は来つつあるそうだ．それは真実か？

推量｛inference｝の例は無いが, 他の例は即座に感知しない事｛non-immediate awareness｝を指し示しており，それは過去において（正しい）推量）として見受けられたものである.

man avval uːro naʃinoxtam, diḳḳat karpa binam, Aχmad *budaast*
'At first I didn't recognize him; then when I looked carefully, I saw it was Ahmed'
最初，私は彼に気が付かなかった．そして私が注意深く見たら，
その人が Ahmed だとわかった．

Abkhaz 語の例の訳の中で推量または伝聞からの主張の両方の意味を表すのに英語で *apparently* という単語を付け加えているのは適切である．

Lega 語(Bantu,Zaire-Botne1997:512-22，私信による)を取り巻く状況には更に驚くべきものがある．そこでは間接的で信用できない証拠と，直接的で信用できる証拠との間に明白な相違がある．その言語には文法的な位置づけに関して３つの小詞があり，それらは不変化詞｛invariant｝であり，そして節の頭にのみ現れる．

'possibility' と称されているそれらのうちの一つは 'しばしば感覚に基づく弱い推量｛inference｝' を指し示し，それはまた判断｛judgment｝の推測｛Speculative｝のマーカーとして理解されうる（ここではこれ以上触れない）．

ɛ́mbɛ mbula zékokɔ́ ka
SPEC rain fall
'Maybe it will rain'
多分雨が降るだろう．

他の二つは証拠的なものである．一つ(ámbo)は**報告**｛Reported｝として用いられるが，それはまた言語活動動詞の後や疑問文において疑いを表すのに用いられるかもしれない．次のように．

nkumgwágá (bónɔ), ámbo bazongo bɛ́ kulyágá merɛndɛ
I hear that EV whites eat frog
'I hear that Westerners eat frogs' (though I find that unlikely)
私は西洋人が蛙を食べると聞いた
（私はそれがありそうにない事と思ったのだが）．

ámbo Amísi ɛ́ndilɛko Misisi?
QUOT Amisi went to Misisi
'Is it really the case that Amisi went to Misisi?'
Amisi が Misisi に行ったのは本当か？

残りの一つである証拠的なもの(*ampɔ́*)は，その証拠性が '特別しっかりして

いるか，或いは説得力がある’と信じられている場合に用いられる．その証拠性は以下の３つの主なタイプからなる．

１）直接的な感覚証拠，特に視覚や聴覚といった．
２）強い推量的証拠（**推定**）．
３）信用されうる報告．

その例は次のようなものである（最初と最後は母語話者からによるもの）．

ampó mbulá zésalɔka
EV　rain　rain
‘It is already raining’ (I can see it)
既に雨が降っている．（私はそれを見ることができる）

ampó ɛ́kukúrá　　momponge
EV　she is pounding rice
‘She’s assuredly pounding rice’ (I can hear it)
彼女は確実にお米をすりつぶしている．（私はその音を聞く事ができる）

ampó Kisangá ɛ́ndilɛ kw isɔkɔ;　kikápu kyǎgɛ́ takɛ́ gánɔ
EV　Kisanga went　to　market; basket　is not　here
‘Kisanga surely went to the market; her basket is not here’
Kisanga は確かにマーケットに行った．何故なら彼女の籠がここに無い．

ampó Moké ákorwa
EV　Moke tired
‘Moke is tired’ (Moke told me)
Moke は疲れている．（Moke が私に言った）

（Moke が疲れているのを話し手が見ることができたなら最後の例は述べられるのかもしれない）

二つの証拠性の基本的な違いは，最初のものは信頼性が多少劣り，二番目の証拠は概して信頼できるものであるということである．**報告**の二つのタイプのこのコントラストは特に顕著なものである．

2.2.5　その他の証拠的な可能性

他の可能性がある．Makah 語では（上記の**聴覚**｛Auditory｝に関する部分で論じられたが），視覚的なものや直接的な経験を示す無標の形式があるが，また‘不確かな視覚’についてのマーカー（*caqi*）もある．従って Makah 語には**視覚**｛Visual｝の二つのタイプがある．

čapač
‘It’s a canoe’

それはカヌーだ．

čapaccaqil
‘It looks like a canoe’
それはカヌーのようだ．

また違う特徴が中央 Pomo 語（Mithun 1999:181）に見出される．1.2.1 と 2.2.3 で例示した５つの証拠的なものに付け加えて，話し手によって行われた行動の個人的な経験に関するマーカーと話し手に影響する行動に関するマーカーがある（Mithun はこれらについてラベルを示していないが）．

da-čé-w-la
pulling-seize-PERF-PERS.AG
‘I caught it’ (I know because I did it)
私はそれを捕まえた（それをしたのは私なので私は知っている）．

da-čé-w-wiya
pulling-seize-PERF-PERS.AG
‘I got caught’ (I know because it happened to me)
私はそれに捕まった（それが私にふりかかって来たので私は知っている）．

関連する言語である Kashaya 語は Oswalt（1986:34-6）が‘行為｛performative｝’と呼ぶ形式を持っており，それは以下の例のように話し手によって行われた行動について用いられる．

qowa°q-ŵela
‘I am packing (a suitcase)’ (imperfective)
私は（スーツケースを）荷造りしている．（不完了体）

qowa°q-mela
'I just packed' (perfective)
私はちょうど荷造りした．(完了体)

付け加えて，Oswalt(39-40)が'個人的な経験'と呼んだ他のマーカー(*-yomă*)がある．これは'引用｛quotative｝'（＝Reported）を除く他の全てのマーカーに代わって地の文の最初の段階で用いられる．

mul-í-yow-e·　　hayu cáhno-w
then-ASS-PERS.EXP-NONFINAL dog　sound-ABSOL
'Then (I saw, heard, judged) the dog barked'
そしてその犬がほえるのを（私は見た，聞いた，判断した）．

これは**感覚**｛Sensory｝のマーカー以上のものである．なぜならこれは推量も含むので．しかしこれは命題モダリティの包括的なマーカーではない．なぜならこれは**報告**｛Reported｝を排除しているので．

2.2.6　階層

Oswalt(1986: 43)はKashaya語の証拠性についてそこには次のような階層があるとしている．

行為｛performative｝＞事実｛factual｝＞視覚｛visual｝＞聴覚｛auditory｝＞推量｛inferential｝＞引用｛quotative｝
（即ち'**行為**｛Performative｝'＞**叙述**｛Declarative｝＞ **視覚**｛Visual ｝＞ **聴覚**｛Auditory｝＞**推定**｛Deductive｝＞**報告**｛Reported｝）

ここで先行するものは次に続くものよりも上の階層にある．Oswaltはこのような位の順序は普遍的であるようだと示唆している．なぜなら英語でさえ証拠的な概念は動詞によって表されるからである．「従って自分が遂行している，或いは遂行した（完了）行動について話す話し手は通常その事を証拠性の低い認識として見做さないだろう….」（'**行為**｛Performative｝'よりも）．同様に「いかなる言語の話し手であれ，人がドアに近づいているのを見ることができながら"私は誰かがドアに近づくのを聞いた"と言いはしないだろう．」
Oswaltは具体的な例をKashaya語から挙げていないが，Tuyuca語には数多の例と議論がある（Barnes 1984:262-4）．その階層は次のようなものである．

視覚｛visual｝＞非視覚｛non-visual｝＞明瞭｛apparent｝

＞二次的｛second-hand｝＞想定｛assumed｝
（即ち**視覚**｛Visual｝＞ **非視覚**｛Non-visual ｝＞**推定**｛Deductive｝
＞ **報告**｛Reported｝＞**想定**｛Assumptive｝）

階層の中で最も低いのは‘**想定**｛Assumptive｝’であり，これは話し手がことの状態や習慣的或いは一般的な‘行動パターン’に関する予めの知識を持っているときに用いられる．しかしその状態や出来事が行われているのか或いは認識されているのかという情報が無いときに限って用いられる．そのような意味に於いてそれは証拠的なものの体系の消極的な項｛member｝であり，準備された証拠が利用できないときに用いられる．

これとは対照的に，**視覚**はより証拠的である．これは話し手が状態やことを見たり眺めているときはいつでも用いられる．話し手が他の証拠のタイプを持つ，或いは持っていたときですら，話し手は他のタイプの適切なものよりも視覚的な証拠を使うだろう．従って，ジャガーに殺される際犬が悲鳴をあげるのを聞いても，後に殺された証拠を見るならば，話し手は非視覚的証拠ではなく視覚的証拠を使うだろう．視覚的証拠は聴覚に勝るのである．

Barnesはいかなるときでも視覚的情報を与えるものの重要性を強調している．例えば母親を家に置いて来た状態で，他人に母親が家にいるかどうかを尋ねられたなら，**想定**｛Assumptive｝（想定)を必要とする「母は家にいる」という答えよりも「母は家にいた」というように過去の視覚的情報を示すために視覚的な証拠でもって答えるだろう．何故なら母親が現在どこにいるかに関する有効な情報が他にないからである．

2.2.7　証拠と確信

2.1.7において，推量｛inference｝を表すマーカーと確信｛certainty｝を表すマーカーには違いがあり，前者だけが厳密にはモーダルの体系に属するということが議論された．しかし次の例のようにHanis Coos語には両者を含む形式上の体系がある（Oregon-Frachtenberg 1922:385-8, cf Mithun 1999:182）．

kwa	‘it seems, as if, like, kind of’
yîku, k^w	‘maybe, perhaps, I guess’
hakwaɬ, kwaɬ	‘it seems, as if’
qẽn	suspicion
qaiku	supposition
qaini·	sudden recollection ‘Oh, I recollect’
natsi·	‘I doubt’
heñn	hearsay, ‘I was told, it is said’
îl	‘surely, certainly’
cku	knowledge by evidence, ‘it must have been that’

‘～のようだ，まるで～のようだ，～らしい，～の種類である’
‘おそらく，多分，～と思う’
‘～のようだ，　まるで～のようだ’
疑い
推量
突然よみがえる記憶，‘ああ，私は突然思い出した’
‘私は疑っている’
伝聞，‘私は言われた，（そのように）それは言われている’
‘確かに，確実に’
証拠による知識，‘～であったに違いない’

これらのほとんどは‘確信と知識の程度’を示しており，またこれらのうち６つはむしろ**推測**{Speculative}のタイプのように見えるが，‘surely, certainly’といったマーカーは，推量｛inference｝や推定｛deduction｝よりむしろ確信｛confidence｝の度合いを表しているようである（2.1.7 を参照）．しかし上記の体系は明らかに**報告**｛Reported｝（‘伝聞｛hearsay｝’）や**推定**｛Deductive｝（‘証拠による知識｛knowledge by evidence｝’）といった認識的 - 証拠的マーカーを含むものである．従って，体系の全容はドイツ語の小詞よりもモダリティの問題としてはより興味深いものである(2.6.1 を参照).

2.3　疑問と否定

疑問｛Interrogative｝と**否定**｛Negative｝は一般的ではないにしろ，時には認識的なもののモーダル体系の項となる．例えば Menomini 語にはモーダル体系の術語として**疑問**がある．Hockett(1968:2378)による例を示す.

pi·w	he comes, is coming, came
pi·wen	he is said to be coming, it is said that he came
pi·ʔ	is he coming, did he come?
piasah	so he *is* coming after all! (despite our expectations to the contrary!)
piapah	but he was going to come! (and now it turns out that he is not!)

彼は来る，来ている，来た
彼は来ていると言われている，彼が来たと言われている
彼は来ているのか？彼は来たのか？
そして彼は結局来ている！（私たちの期待が反対のものであるにも拘わらず）
しかし彼は来ようとしていた！(そして今では彼がそうではないということが明らかになった)

いくつかの言語で**否定**と**疑問**の両方に同じマーカーを用いるのは恐らく驚くべきことではない．なぜならこれらは英語の例に見るように(1.4.2 を参照)，‘非主張｛non-assertive｝’のように見受けられるからである．その明確な例としては Imbabura 語が挙げられる（Cole1982:164）．全体系は 1.4.2 で挙げたが，関与する例（*chu* に関するもの）は以下のようなものである．

mayistru-chu ka-ngui
teacher-QUES be-2SG
‘Are you a teacher?’
あなたは先生ですか？

ñuka-ka mana chay llama-ta shuwa-shka-ni-chu
I-TOP not that sheep-ACC steal-PERF-2SG-NEG
‘I didn't steal that sheep’
私はあの羊を盗んでいない．

否定と疑問の両方に用いられる同じ形式の例として他に Tiwi 語(Australia-Osborne 1974:43)がある．この言語では無標の直説法｛indicative｝があるが，命令法｛imperative｝，接続法｛subjunctive｝，強制法｛compulsional｝，不完結法｛incompletive｝といった４つのムードマーカーがある．接続法には否定，非過去の疑問文，そして起こりそうにない事柄を表す３つの機能がある．以下に最初の２つの機能の例を挙げる．

aɹnuŋkwa ji-ma-kəòimi
NEG　　he-SUBJ-do
'He doesn't do it'
彼はそれをしていない.

pu-ma-ta-wari
they-SUBJ-FUT-fight
'Are they going to fight?'
彼らは闘おうとしているのか？

別の可能性としては，**疑問**に関する特定のマーカーを持たず，話し手側の知識の欠如を指し示すマーカーによって疑問｛questions｝が表されるということがある．これは Ngiyambaa 語の'知識｛knowledge｝'の接語の体系から例を挙げる(Donaldson 1980). そこには'感嘆｛exclamative｝'や'無知｛ignorative｝'といった二つの接語がある．'無知｛ignorative｝'は起ったかもしれない事柄を表す'反現実｛counterfactual｝'や英語の'perhaps'を表す'仮説｛hypothesis｝'のそれぞれと共に用いられる．

minjaŋ-gaː-ma-ndu　　dha-yi　　(253)
What-IGNOR-CNTF-2NOM　eat-PAST
'You might have eaten I don't know what' (but you didn't)
あなたは私が知らないものを食べたかもしれなかった.
（しかしあなたは食べていない）

guya-gila-gaː-lu　　dha-yi　　(257)
fish+ABS-HYPOTH-IGNOR-3ABS eat-PAST
'Perhaps he ate a fish'
多分彼は魚を食べた.

しかし'無知｛ignorative｝'は他の接語が現われない場合には疑問を表す.

minjaŋ-gaː-ndu　　dha-yi　　(260, 262)
what+ABS-IGNOR-2NOM eat-PAST
'You ate something, I don't know what'/'I don't know what you ate'
あなたは何かを食べた，私が知らないものを / 私はあなたが食べたものを知らない.

guya-gaː-ndu　　dha-yi　　(260, 263)
fish+ABS-IGNOR-2NOM eat-PAST
'Did you eat a fish?'/'You ate a fish, I don't know'
あなたは魚を食べたのか？ / あなたは魚を食べた，私は知らない.

感嘆 {exclamative} も同様に，無知 {ignorance} と驚き {surprise} を表すのに用いられる.

minja-waː-ndu　　dha-yi　　(260, 262)
what+ABS-EXCL-2NOM　eat-PAST
'What did you eat?'/'You ate *what*?'
あなたは何を食べたのか？/ あなたは何を食べたのか？

guya-waː-ndu　　dha-yi　　(260, 262)
fish+ABS-EXCL-2NOM eat-PAST
'So you ate a fish!'/'What? You ate a fish!'
あなたは魚を食べた！ / なに？あなたは魚を食べたのか！

話し手側の無知をマークするある形式による疑問{question}の暗示は 2.6.2 で議論される Kogi 語の'参加者の体系 {participant system}'の中で更に明確に示される.

更に特異な例として，Huichol 語(Mexico-Grimes 1964:27)では無標の形式がしばしば疑問文に用いられるが，一方陳述は明確に'主張 {assertive}'としてマークされる. つまりほとんどの言語で普通であることの反対なのである. Grimes は,「いかなる主張 {assertion} も受け入れられたり，或いは受け入れられなかったりし得るので，明確な主張というものは英語の'Yes-No'疑問文と語用論的に等価物となるのである. しかしながら会話の文脈では法的な形式の無い主張は疑問文として訳されるようである」以下に例を挙げる.

pée-t　　ʎa
ASS-direction go
'He left'
彼は発った.

mázá tikuucúu
deer　asleep
'Is the deer asleep?'
鹿は眠ったか？

しかしほとんどの言語で曖昧な疑問というものは，無知｛ignorance｝の表現で表されるということが指摘されなければならない．英語では WONDER という動詞は，疑問を表したり，恐らく要求を表すのに使われるかもしれない．

I wonder if he's arrived
I wonder if you can help me
彼は到着したかしら．
あなたが私を助けてくれることができるなら．

（しかし *if* や *whether* によってマークされる疑問と思案(rumination)の潜在的な違いに関する Bolinger 1988 を参照せよ）逆に疑問文は疑い｛doubt｝を表すのに使われるかもしれない．

We're expecting him, but will he come?
私たちは彼に期待しているが，彼は来るだろうか？

モーダルな体系の中に**疑問**または**疑問**と**否定**の両方を表す言語は２つあり，それは Hixkaryana 語 (Carib, N.Brazil) と Serrano 語 (Uto-Aztecan, California)である．しかしこの両言語には（現実｛realis｝，非現実｛irrealis｝といった）ムード体系もあるので，これらは 6.5.4 で議論される．

また，一つ以上の疑問マーカーを持つ言語もある．Tuyuca 語は'一次的｛first-hand｝'な疑問と'非一次的｛nonfirst-hand｝'な疑問（2.5 で簡潔に議論される）を持っている．一方，Khezha 語(Tibet-Burman)では，Yes-No 疑問に関する５つのタイプのマーカーと Wh-疑問に関する６つのタイプのマーカーがある．

2.4　他の二つの可能性

Kashaya 語（現在は滅多に使われないが）には遠く隔たった過去の活動を表す'遠過去｛remote｝'の接辞があり，それはしばしば話し手の個人的な体験を表す．あまり遠い過去ではない場合には，「参加者は死ぬので，或いは世界はとても変わってしまったので」といった取り返しのつかない過去を表す (Oswalt 1986:40).

men ši-yiʔ ciʔ -tʰi-miy
this do-PL+HAB-NEG-REM
'They never used to do that in the old days'
彼らは遠い昔これを決して使わなかった.

しかし例文そのものが習慣的な活動に関与しているのは興味深いかもしれない．なぜならBargam語(Papua-Roberts 1990:384, Hepnarによる出版されていない原稿から引用)には同様な例文（習慣的｛habitual｝とラベルされた）が非現実｛irrealis｝マーカーを伴ったものであるからである.

miles-eq leh-id teq anamren aholwaq-ad in
return-SS+IRR go-DS+IRR then owner see-SS+SIM 3SG
didaq tu-ugiaq
food PERF-give+HAB.P+3SG
'When (the pig) would return and then the owner would go and, on seeing it, used to give it food'
（豚が）戻ってきたとき，飼い主は豚を見るために外に出て，
餌を与えたものである.

Roberts(1990:283, fn.13)は英語もまた「私たちが子供だったとき，成長する過程でよく遊んだものだ」というような習慣的な過去を表すのにモーダルな形式（非現実｛irrealis｝?）が用いられるとした．WILLの形式の使用は「私たちが実際に遊んだことよりもむしろ，遊ぶ傾向にあった」というように，習慣的な行動よりも傾向を示しており，また非現実として見受けられる習慣的な行動を許すのがこれである，と付け加えることができる．しかしこの関連性はBybee et al.1994:239（7.3を参照せよ）によって疑問視されている.

またKashaya語(Oswalt 1986:42)は，「真実だと証明されたもの」，つまり現在周知の状況に比べて，過去において信じられていた事を表す方法がある．それには二つの接辞があり，*-bi-* は'推量｛Inferential｝ II'とラベル付けされ，*-wa-*は動詞の特徴である'絶対｛absolutive｝'のマーカーである.

kʰe hiʔbaya-ʔ-bi-w
my man-ASS-INF-ABSOL
'It turned out to be my husband'
私の夫であることが判った.

Menomini語(Algonquian)に関して，Hockett (1958:237-8)によって指摘され

た形式は若干の違いを見せている．－完全な体系については 2.3 を参照せよ．

piasah そして彼はついに来つつある．
(私たちの期待が反対のものであるにも拘わらず)
piapah　しかし彼は来ようとしていた．
(今となっては彼はそうではないことが判明した)

両言語には期待されたことと，真実であると証明されたこととが対照をなしている．更に Menomini 語の例については，何も主張されていないように見える．ありうる訳としては，「彼が来ているのには驚いている」，そして「彼が来ていないのには驚いている」．この訳については前提｛pressuposition｝という観点から論じられるかもしれない（1.4.1 と 6.6.7 のように）．Kashaya 語の例は，それ自身に類似した訳を与えることはできないが，しかしそこには依然として不測の要素があり，そしてこれは主張よりも重要なことなのかもしれない．またこれらの例文は英語の‘*had to*’(2.1.6)の用法と幾分共通している．それらの全ては現在の時間の事実｛present time fact｝の認識に関連しているが，周知の事実や過去における想定｛assumed｝された事柄に関与している．

2.5　命題の体系の構造

この章の構成は命題のモダリティの 2 つのタイプである認識的モダリティと証拠的モダリティのうち，証拠的モダリティの主たる 2 つのタイプである**報告**｛Reported｝と**感覚**｛Sensory｝の観点から成り立っている．これは次のように‘証拠的なもの’の意味を規定した Willett(1988:96)のものと本質的には同じである．

Ⅰ．Direct Evidence（直接的証拠）
　A. Visual　（視覚）
　B. Auditory　（聴覚）
　C. Sensory　（感覚）
Ⅱ．Indirect Evidence　（間接的証拠）
　A. Reported　（報告）
　　1. Second-hand（二次的）
　　2. Third-hand　（三次的）
　　3. From Folklore　（民間伝承による）
　B. Inferring（推量）
　　1. From results　（結果による）
　　2. From reasoning　（妥当なものによる）

個々の範疇は明確にマークされているにも拘わらず，Willettによって示されたように，個々の範疇を構造に分類したものは概念的な基準に広く基づかれたものであり，そしてこれは個々の範疇の持つ弱点かもしれない（例えば Croft 1955:88 を参照せよ）．しかし時にはそこに形式上の正当さがある．この例は Tuyuka 語の証拠についての分析に見られ，それは幾度も論じられた（例えば 2.2.1 を参照せよ）．5 つの範疇は**視覚**｛Visual｝，**非視覚**｛non-Visual｝，**推定**｛Deductive｝，**報告**｛Reported｝，**想定**｛Assumptive｝であり，Barnes(1984:267)は最初の 3 つを‘一次的｛first-hand｝’とし，残りの 2 つを‘非一次的｛nonfirst-hand｝’とした．しかしながらMalone(1988:123)は最初の2つのみが‘一次的’であると論じた．その結果**推定**｛Deductive｝は‘非一次的’となる．Malone の議論は，Tuyuca 語が‘一次的’，‘非一次的’として区別される疑問のマーカーの 2 つのタイプを持っている事実に基づいており，そしてそれは，予想される反応のタイプによって決められるものなのである．このテストによって，**推定**は**視覚**｛Visual｝，**非視覚**｛non-Visual｝と同様，一次的である．なぜなら一次的である疑問に反応するからである（一次的，二次的という術語に関するほかの分析は，Chafe(1986:263)，Frawley(1992:412-15)に続いてBotne(1997:523-5)がある）．

同様に，しかしながら更に巧みに，Steele(1997:280-90)は引用/非引用｛quotative/non-quotative｝，主張 / 非主張｛assertion/non-assertion｝，モーダル/非モーダル｛modal/non-modal｝といった対立をマークする構造的な分析に関する形式的な基盤を与えるLuiseno語(Uto-Aztecan, S. California)の分析を提示している．そこではLuiseno語には‘複合接辞｛particle complex｝’とSteele が呼ぶものがあり，それは 4 つの部分に分かれている．3 番目の部分は人称と数をマークし，これは本稿とは関連性がない．1 番目，2 番目，4 番目の部分はゼロとしてマークされるか，或いは接辞を伴う（*kun* 以外であれば，*X* として表している）．あり得る組み合わせは次のようなものである．

非引用｛Non-quotative｝
　非モーダル主張｛Non-modal assertion｝　0-0-3-0　OR　0-0-3-X
　非主張｛Non-assertion｝X-0-3-0
　モーダル主張｛Modal assertion｝　X-0-3-X

引用｛quotative｝
　主張｛Assertion｝　0-kun-3-0　OR　0-kun-3-X
　非主張｛Non-assertion｝　X-kun-3-0　OR　X-kun-3-X

例文は以下のようなものである（4 つの部分に分析される複合接辞を伴う）．

noo n　　takwayak　　(0-0-n-0)
I　PART.COMPL sick
'I am sick'
私は病気だ.

heyiquṣ　ṣum　　(ṣu-0-m-0)
dig+PAST PART.COMPL
'Were they digging?'
彼らは掘っていたのか？

heyi xumpo　　(xu-0-m-po)
dig　PART.COMPL
'They should dig'
彼らは掘るべきだ.

nookunun　takwayak　　(0-kun-n-0)
PART.COMPL sick
'I'm sick, so I'm told'
私は病気だ，そう私は言われた.

heyiquṣ　ṣukunum　　(ṣu-kun-m-0)
dig+PAST PART.COMPL
'They were digging – is that what you said?'
彼らは掘っていた－とあなたは言ったのか？

引用 / 非引用であるかは2番目の位置が0 / kunであるかによって区別され，また主張 / 非主張は1番目の位置で0 / *X*になるかによって区別されるようである．この分析では，'モーダル主張｛modal assertion｝'は非主張の形式であり（公式を見ればわかるように - 1.1.2 を参照），また非引用非主張に関しては，一番目の位置で *X* によってマークされているに過ぎない．勿論何よりも重要なのは，当該の言語では単純に概念的にマークされているのではなく，形式的にマークされているということである.

2.6　談話と参加者

2.6.1　談話の体系

モーダルは談話において，参加者たちが自分の意見，態度，概してお互いの情報交換をすることに重要な役割を担っている．従って談話に関するより直接的な体系があるのは自然なことである．

モダリティよりも談話に関してより関連性のある体系の良い例は，Cashibo語(Shell 1975:178-93)の体系である．三人称単数を用いる形式は次のようなものである．

ka	叙述的 {declarative}
kaisa	独立節での報告 {report in independent clause}
isa	従属節での報告 {report in dependent clause}
kara	疑問 {interrogative}
ria	反応 {response}
riapa	疑いを含んだ質問に対する反応 {response whether question implies scepticism}
karaisna	疑問報告 {interrogative report}

例を挙げる．

Jorgenïn ka　aín lápiz　ɕãasiaṣa
George　DEC+3 his　pencil break+PAST+3
'George broke his pencil'
ジョージは自分の鉛筆を壊した．

Jorgenï kaísa　aín lápiz　ɕãasiaṣa
George REP.IND+3 his　pencil break+PAST+3
'George broke his pencil, it is said'
ジョージは自分の鉛筆を壊したと言われている．

aín lápiz　isa　ɕãasiaṣa　kišon　ka
his　pencil REP.DEP+3 break+PAST+3 CLOSE OF QUOTE DEC+3
Jorgenin ʔi　kaaṣa
George　me say+PAST+3
'George told me that he broke his pencil'
ジョージは自分の鉛筆を壊したと私に言った．

Jorge　kara　k^{w}an
George INT+3 go+PRES+INT
'Is George going?'

ジョージは行っているのか？

(aṣ) ria　　k^{w}anín
(he) RESP+3 go+PRES+3
'Yes, he is going'
はい，彼は行っています.

(aṣ) riapa　　k^{w}anín
(he) RESP.SCEP+3 go+PRES+3
'Yes, he certainly is going!'
はい，彼は確かに行っています！

an ka　　ñokáṣa　　ʔi　karaisna　k^{w}an　　kišon
he DEC+3　ask+PAST+3 me INT.REP+3 go+PAST+1/2 CLOSE OF QUOTE
'He asked me if I went'
彼は私が行くのかどうかを尋ねた.

従って Cashibo 語は, 特に陳述{making statements}, 質問{asking question}, 返事{giving replies}, 強調した返事{emphatic replies}（最初の 2 つは叙述{Declaratives}と疑問{Interrogatives}に訳せる）に関する形式の完全な談話の体系を有している.

Ngiyambaa 語(Donaldson 1980:252-5)の'信用{belief}'を表す接語には, いくつか談話上の特徴があり, それらは 1.4.5 と更に詳しくは 2.7.2 で例示した. Donaldson はそれらを次のように定義している.

主張{Assertion}　陳述{statement}に対する聞き手の注意を表すのに用いられる.

断定的な主張{Categorical assertion}　話し手は陳述の絶対的な真実性が重要であるという陳述を表している.

反対の主張{Counter-assertion}　先の陳述を否定するか, 或いは話し手が聞き手の楽しみを疑っているという幾つかの前提を否定することを意図している.

仮説{Hypothesis}　話し手側の未確認の仮説として陳述されている.

例を挙げる.

waŋaːy-baː-na yana-nhi
neg-ASS-3ABS　walk-PAST
'He didn't walk (again)'
彼は歩かなかった（再び）.

guniːm-baɽa-nuː　balu-y-aga
mother+ABS-CATEG.ASS-2OBL　die-CM-IRR
'Your mother is bound to die'
君の母親は死ぬに違いない.

guyan-bagaː-dhu　gaɽa
shy+ABS-CNTR.ASS-1NOM　be+PRES
'But I'm shy!'
しかし私は内気だ！

galiː-ŋinda-gila　ŋiyanu　balu-y-aga
water-CARIT-HYPOTH we+PL+NOM die-CM-IRR
'We'll probably die for lack of water'
私たちは水がなくて多分死ぬだろう.

'反対の主張｛Counter-assertion｝'は明らかに談話の問題である.**'断定的な主張**｛Categorical assertion｝'もまた誰かが言ったことによって引き起こされうるという点で談話に関連している．一つの例文の中で場所について論じられて，そして誰かが介在している.

ŋadhi-laː-baɽa-dhu　badhiyi
there+CIRC-EST-CATEG.ASS-1NOM　come+PAST
(EST=ESTablished reference)
'That's exactly where I've (just) come from!'
そこはまさに私が来た場所だ！

他の例文は「私はそれをすでに見た」と訳されている.

常に言及されてきたわけではないが，間接的に言及されてきたことに，英語には助動詞の NICE 特性に関連する構成要素に見られる，談話の特徴を指し示す形式がある（これは Huddleston(1976:333)と Palmer(1974:15)に基づく頭文字である）．これらの特徴は次の例のようなものである.

Negative	I can't go
Inversion	Must I come?
'Code'	He can swim and so can she
Emphatic Affirmation	He *will* be there

否定｛Negative｝　私は行けない.
倒置｛Inversion｝　私は来なければならないのか？
'**コード**｛Code｝'　彼は泳げるし，彼女もそうだ.
強調断言｛Emphatic Affirmation｝　彼はそこにいるだろう.

明らかに否定｛negation｝は誰かが言ったことを打ち消すために，'倒置｛inversion｝'は質問するために，そして強調断言｛emphatic affirmation｝は疑われてきたことを再び断言するために，それぞれ用いられるのかもしれない．特に'**コード**｛Code｝'　は，談話との関連性が高い．それは語彙動詞なしにモーダルな動詞の使用を許すものであり，語彙動詞は以下のように語彙動詞からの前方照応的に'理解された'ものである.

A. Can he do it?
B. Yes he can.
A.　彼はそれができるのか？
B.　はい，彼はできます.

Well, he may, But he must などといった，そのような一連のモーダルな動詞があるはずである．そのため会話にかかわるどの人も話題が何であるのかわからないだろう．更に 2.3 で見たように，疑問と否定はモーダル体系に加わることがあり，これらも談話で重要な役割を担う.

多くの言語は談話で用いられるかもしれない小詞の組を有する．例えばドイツ語の'モーダルな小詞｛modal particle｝'のように（Curme(1905:368)(1960:350-2)）．最も重要なものは次のようなものである.

ja	本当に，なぜ，わからないのか，あなたは知っている
doch	結局，～だけれども，ちょうど，本当に，確かに
denn	確かに，よく知られているように，学んだように
schon	決して恐れずに，疑いなく，確かに，当然のこととして
wohl	確かに，確かに

しかしこれらは談話と直接関連せず，またこれらはおそらく文法体系の項として定義できない.

中国語における文末の小詞の組はより的確に定義されうる．これは Li と

Thompson(1981:238ff.)によってグロス付けされている.

le　現在の適切な状態
ne　質問に対する反応
la　懇願する同意
ou　親切な警告
a/ya　強制力の弱化
ma　質問

例文を挙げる.

yíyàng de le (264)
same it LE
'It's the same (you're wrong in thinking that what you have is different)'
それは同じだ（あなたが持っているものが違うという考えにおいて，あなたは間違っている）.

tāmen yoǔ san tiáo niú ne (301)
they exist three CL cattle NE
'(Listen) they have three cows'
（聞きなさい）彼らは三頭の牛を持っている.

wo he bàn bei ba (308)
I drink half glass BA
'I'll drink half a glass, OK?'
私はグラス半分の酒が飲みたい．いいでしょう？

wo yào dǎ nǐ ou (308)
I will hit you OU
'Let me tell you, if you do this, I will hit you'
私に言わせて欲しい．もしあなたがこれをするなら，私はあなたを殴るでしょう.

nǐ　lái　a/ya　　cf. nǐ　lái　(315)
you come A/YA　　you come
'You come here'　　'You come here!'
ここに来なさい.　　ここに来い.

nǐ　hao ma　(305)
you well MA
'Are you well? (= How are you?)'
あなたは元気か？

更に驚くことに，Khezha 語(Tibet-Burman　Kapfo, Bhat1990:80-1 によって引用された)には，Yes-No 疑問に関する 8 つのタイプのマーカーと，それとは別に談話の特徴に広く関連する選択である Wh-疑問に関する 8 つのタイプのマーカーがある.

Yes-No 疑問に関与する問題は次のようなものである.

（ｉ）話し手は裏づけを知っており、また期待している；
（ii）話し手は信用できる情報を持っており，裏づけを期待している；
（iii）話し手は不確かさを示している（否定的なマーカー）；
（iv）話し手は命題が真であることを想定するが，不確かだ；
（ｖ）話し手は聞き手が同意することを当然のことと考えている；
（vi）話し手は再確認を求めながらも，命題に驚いている；
（vii）話し手は珍しい噂を耳にして，修正を求めている；
（ix）話し手はその出来事が普通ではないので納得しておらず，再び確認することを求めている；

例文を挙げる.

nò　merí-e　　nì-à-díre
you Mary-ACC love-REAL-INT
'You are in love with Mary, aren't you?'
あなたはメアリーに恋していますね？

nò　mhechə-à-ya/nì
you work-REAL-INT
'Are you working?'
あなたは働いていますか？

àpfə　wò-dà-mo
father come-PERF-INT
'I presume my father has come?'
私の父は来たと思うのだが？

àpfə　wò-dà-níe
father come-PERF-INT
'Perhaps my father has (probably) come, hasn't he?'
恐らく私の父は来ましたよね？

nò-nə　méri-e　ni-à-yo
you-NOM Mary-ACC love-REAL-INT
'Oh! You are in love with Mary? (I can't believe it)'
おお，あなたはメアリーに恋しているの？（私は信じられない）

ì-zò　lésə-à-momí
your-mother sick-REAL-INT
'Is your mother ill?'
あなたの母親は病気ですか？

nò　àwe-è　nì-à-lè
you me-ACC love-REAL-INT
'Do you love me?'
あなたは私を愛していますか？

（接尾辞 *–a* は'未完了相｛imperfective｝'として Kapfo によってグロス付けされている．しかし Bhat は非現実未来と比べてそれを現実として扱うことを訂正している．）

2.6.2　参加者体系

ある言語では談話の中で参加者について，より直接的に言及する体系を有するものがある．

Hensarling(1982)は Kogi 語(Chibchan, N.Colombia)には，「論じられている状況について誰が何を知っているのか」を指し示す'証拠的'な体系があると一応示唆している．彼女は以下のように 5 つの小詞に関するマトリックスを示している．

	話し手	聞き手	グロス
ni	＋	＋	思い出させること｛remind｝
na	＋	－	知らせること｛inform｝
shi	＋	－	尋ねること｛ask｝
skaN	－	－	疑うこと｛doubt｝
ne	－	?	推測すること｛speculate｝

例文を挙げる.

ni-gu-ku-á
REMIND-do-I-NEAR.PAST
'I did it just a while ago, as you know'
あなたが知っているように私はちょうど少し前にそれをやった.

na-gu-ŋ̇gú
INFORM-do-INTERMEDIATE.PAST
'I tell you he did it some time ago'
彼が数時間前にそれをやったと私はあなたに言う.

shi-ná
ASK-be+PROXIMATE
'Is that the way it is?'
あれはそのままかい？

skaŋ-gú
DOUBT-do+PROXIMATE
'Who knows if it did just now?'
それがたった今かどうか誰が知っているのか？

näbbi nóŋ̇gutse né　　haŋ̇gna
lion　little　　SPECULATE think+PUNCTILIAR
'"I wonder if it is a small lion", he thought'
「それが小さなライオンだったら」と彼は思った.

（*né* はここでは節の終わりに現われているが，他の例文でも同じ位置に現われうる.）

'思い出させること｛Remind｝'は，話し手と聞き手の両者が知っているこ

とに，‘知らせること｛Inform｝’は，話し手は知っているが聞き手は知らないことに，‘尋ねること｛Ask｝’は聞き手は知っているが話し手は知らないことに，‘疑うこと｛Doubt｝’は両者が知らないことに，‘推測すること｛Speculate｝’は話し手が知らないことに（聞き手の知識は考慮されない），それぞれ関連する．

更に複雑な体系は，Lowe(1972)によって示された Nambiquara 語(Brazil)である．彼は二つの側面を含む体系を示した．

出来事の証明｛event verification｝：個人の｛individual｝，集団の｛collective｝
話し手の志向｛speaker orientation｝：観察｛observation｝，推定｛deduction｝，語り｛narration｝

‘話し手の志向｛speaker orientation｝’の体系は，**視覚**｛Visual｝，**推定**｛Deductive｝，**報告**｛Reported｝といった，明らかによく知られた3つの術語に関する証拠的なものの体系である．

観察｛observation｝　私は自分が見たものを報告する
推論｛deduction｝　私は自分の推論を述べる
語り｛narration｝　私は言われた

‘出来事の証明｛event verification｝’の体系は，話し手と聞き手を含むものである．つまり話し手が単独で，或いは話し手と聞き手の両者が出来事を見たり，起った出来事を推量したり，或いは出来事について言われたことを推量したり，といったことである．Lowe は次のようにグロスを示した．

個人の｛individual｝，観察｛observation｝：‘行為者の行為を私が見たことを私はあなたに報告する’
個人の｛individual｝，推定｛deduction｝：‘私が見る，または見たことなので，起ったに違いなかった行為の推論を私はあなたに言う’
個人の｛individual｝，語り｛narration｝：‘確かに起ったということを誰かに私は言われた’
集団の｛collective｝，観察｛observation｝：‘私と聞き手は行為者が行っていることを見たことを報告する’
集団の｛collective｝，推定｛deduction｝：‘話し手と聞き手が見たことから彼らは行われたに違いない確かな行為を推量する’
集団の｛collective｝，語り｛narration｝：‘話し手と聞き手はある出来事が行われたと言われた’

動詞 wa3kon3 に対する個人の証明の三人称の諸形式（he3 は‘過去’と解釈され，ra2 は‘定アスペクト’に加えて人称と証明と志向のマーカーのうち２つが強調されたものと解釈される）は以下のように示されている．

wa^{3}kon^3*na*^{1}hē^{3}ra^2	‘He worked’
wa^{3}kon^3*n*ū^{3}hē^{3}ra^2	‘He must have worked’
wa^{3}kon^{3}ta^{1}hē^{3}ra^2	‘I was told that he worked (past)’
	彼は働いた．
	彼は働いたに違いなかった．
	彼は働いたと言われた（過去）．

対応する‘集団の’の変種の形式（文末の wa2 についてのみ‘不定ムード｛indefinite mood｝’とグロス付けされている）は，次のように示されている．

wa^{3}kon^{3}tait^{1}ti^{2}tu^{3}wa^2	‘Both you and I saw that he worked’
wa^{3}kon^{3}nait^{1}ti^{2}tu^{3}wa^2	‘He worked, as deduced from what we saw’
wa^{3}kon^{3}ta^{1}tē^{1}ʔti^{2}tu^{3}wa^2	‘It was told us that he worked’
	あなたも私も彼が働くのを見た．
	私たちが見たことから推測すると，彼は働いた．
	彼は働いたと言われている．

2.7　叙述

認識的なもののモーダル体系に関する言語では，モダリティについて無標の形式をとるのが一般的であり，またその無標の形式は概念的には率直な主張｛unqualified assertion｝を単純にマークしている．そしてその無標の形式は**現実**｛Realis｝として見做され，一方モーダルな形式は**非現実**｛Irrealis｝である．この形式，つまり非モーダルな形式，或いは**現実**｛Realis｝として見做される，モダリティに関して無標の形式は，**叙述**｛Declarative｝である．そして英語については，テンスやアスペクトといった他の動詞の範疇についてマークされるが，**叙述**｛Declarative｝はモーダルな動詞の欠如によってマークされるのである（通常，他の無標の形式として**命令**｛Imperative｝があるが，これは概念的には主張ではなく命令｛directive｝であり，拘束的モダリティ｛deontic modality｝と共に議論される．3.4 を参照）．

なぜなら命令はモダリティに関しては無標なので，**叙述**はモーダルな形式よりもある意味において‘より強い’ものではないからである．それは主張や話

し手の専心に関する理由を指し示すことをせず，単純に主張しているに過ぎない．「ジョンは会社にいるかもしれない」或いは「ジョンは会社にいるに違いない」とする方が適切な状況において，話し手が全面的な確信や強い証拠性がないときに，「ジョンは会社にいる」と言うことはまったく可能である．モーダル体系を使うことなく，モーダルな概念を表すことはまったく可能である．これは次のような語彙動詞の使用を通じて達することができる．

I think that Mary is in her office
I saw John in his office this morning
メアリーは会社にいると思う．
今朝ジョンが会社にいるのを見た．

文法的に最初のものはモーダルな判断{judgement}である**推測**{Speculative}の例ではない．同様に二番目のものも**視覚**{Visual}な証拠的なものの例ではない．それらは両方とも**叙述**であり，関与する概念上の解釈は，「私は思う」や「私は見た」という主張の術語（言い方）である（その状況は 5-7 章にある**現実**{Realis}，**非現実**{Irrealis}といった大まかな二つの体系について議論されているムード体系のほとんどにおいて異なり，また概して単純なものである．文法的には両者は無標ではなく，体系の中で等しい位置づけがなされている）．

2.7.1　叙述とモーダル体系

多くの言語にはあらゆるモーダル体系から独立した**叙述**{Declarative}がある．英語もその一つであり，英語には**叙述**と認識的なモーダルとの対立がある．

Mary is at home
Mary may/must/will be at home
メアリーは家にいる．
メアリーは家にいるかもしれない / いるに違いない / いるだろう．

現実{Realis}と**非現実**{Irrealis}の識別の観点から，その状況は明らかなようである．つまりモーダルな動詞のない**叙述**は，**現実**であり，モーダルな形式を伴うものは**非現実**である．しかし無標の**現実**と有標の**現実**の体系[6]という，この単純な状況はモーダルな体系に関してすべての言語で典型的というわけではない．そこにはいくつか異なる状況がある．

最初に，いくつかの言語では**叙述**はモーダル体系として同じ形式上の体系における術語になる．これは 1.4.5 で十分説明され，例示もしたが，Ngiyambaa 語(New South Wales, Australia-Donaldson 1980:159-62)がそうしたものであ

る．ここでは過去と現在といった**叙述**が**命令**｛Imperative｝だけではなく，**推測**｛Speculative｝（‘非現実’）や**叙述**（‘目的｛purposive｝’）といったマーカーとして同じ体系に現われるのである（3.4 で議論される）．

そして更に問題を含んだ二番目のものは，形式的で概念的な無標の**叙述**は存在しないというものである．なぜなら全ての範疇は単一の形式体系に属するだけではなく，全ての概念的な証拠的なものに属するからである．このような言語に Tuyuca 語(2.2.1 を参照)がある．そこでは‘最も強い’証拠は**視覚**｛Visual｝であり，そしてそれに最も近いものに**叙述**がある．しかしその**叙述**は単純に主張｛assert｝しているのではなく，命題に対する視覚的な証拠を指し示すこともしているのである．

本書で繰り返され，証拠的なラベルと共にグロス付けされた例文は次のようなものである．

Tuyuca
díiga　apé-wi
soccer play+3SG+PAST-VIS
‘He played soccer’
彼はサッカーをした．

díiga　apé-ti
soccer play+3SG+PAST-AUD
‘He played soccer’
彼はサッカーをした．

díiga　apé-yi
soccer play+3SG+PAST-DED
‘He played soccer’
彼はサッカーをした．

díiga　apé-yiɡɨ
soccer play+3SG+PAST-QUOT
‘He played soccer’
彼はサッカーをした．

díiga　apé-hĩyi
soccer play+3SG+PAST-ASS
‘He played soccer’
彼はサッカーをした．

非常に類似した体系である中央 Pomo 語と比較するのは，役に立つだろう（1.2.1 から再引用する）．そこでは無標の形式（稀な用法だが）と有標の証拠的なものの範疇のセット（‘一般的な知識｛general knowledge｝’は**叙述**｛Declarative｝の例に非常に近いようである）がある．

čʰéemul
rain fell
‘It rained’
雨が降った．

čʰéemul-ʔma
rain fell-GEN.KNOW
‘It rained’ (that’s an established fact)
雨が降った．（確立された事実）

čʰéemul-ya
rain fell-VIS
‘It rained’ (I saw it)
雨が降った．（私はそれを見た）

čʰéemul-nmeˑ
rain fell-AUD
‘It rained’ (I heard it)
雨が降った．（私はその音を聞いた）

čʰéemul-ʔdo
rain fell-HSY
‘It rained’ (I was told)
雨が降った．（私は言われた）

čʰéemul-ʔka
rain fell-INF
‘It rained’ (Everything is wet)
雨が降った．（全てのものが濡れている）

従って中央 Pomo 語には**叙述**と証拠的なものの体系があり，Tuyuca 語は**叙述**ではなく，単に証拠的なものの体系を持っているに過ぎない．

実際には‘モーダル化されていない’言語はないとLyons(1982:110)によって主張されてきた他の言語があり，またこの主張はHidatsa語におけるすべての主節は‘ムード’で終わるというG.H.Matthews(1965:98)の主張に基づいている．しかしこれは厳密には正しくない．なぜなら‘**ピリオド**{Period}’マーカーは過去時制のマーカーを伴って終わる文で現われないからである（G.H.Matthews 1965:110，ここで**過去＋ピリオド**{Past+Period}は，過去の規則によって‘弱められた{reduced}’と記述されている）．実際にそこには過去時制を伴った無標の**叙述**がある．

三番目に，**叙述**が証拠的なものの体系と形式的に異なる場合でさえ，そこでは時々単に直接または視覚的な証拠として用いられる．従ってモーダル体系のみならずムードを持っているがゆえに6.5.4で議論されるSerrano語(Hill 1967:18)では，単純過去は一次的な知識を報告するためだけに用いられている．つまり話し手は，自分自身を証人として見做しているのである．Hillが挙げた例文は以下のようなものである．

'iːp　biɨ'　　wahi'　pɨnq
here he+PAST coyote pass
‘The coyote passed here’ (I saw him)
コヨーテがここを通った（私はコヨーテを見た）．

また直接的な証拠の重要性については，Hixkaryana語(2.2.2と6.5.4を参照せよ)の記述で示されている．Derbyshire(1979:145)は‘伝聞’と‘目撃{eyewitness}’との違いは決定的であるとし，また「話し手によって目撃されなかった一連の談話に関与するいかなる出来事においても，‘伝聞’の証拠はほとんどすべての節に現われる．

更に驚くことは，2.2.4で示したようなSherpa語における直接的証拠と‘間接的伝聞{indirect-hearsay}’との対立である．Givón(1982:34-5)は，『ブッダの生涯』を語るラマが，伝聞 / 非直接の証拠を表す接尾辞を使った完了体 / 過去で話の大部分を語ったと報告している．そして話のほとんどには直接的な証拠を表す2つの接尾辞が現われたに過ぎず，またこれらは両方とも直接引用話法においてであった．Givón「話は話し手自身のように敬虔なチベット仏教徒にとって全ての話が“真”であると間違いなく見做されているが，“伝聞 / 非直接”の証拠を表すムード（法）で語られているのは，話し手によって目撃されていないからである」と報告した．

4番目に2.1.3で記したことだが，Kashaya語やMakah語といった幾つかの言語で，**推定**{Deductive}は英語のMUSTよりも広く使われる．MUSTは（証拠に基づく）判断が，なされる事実に対する強調を提示する一方で，これらの言語における**推定**は状況的証拠がある，いかなる陳述に対しても用いられる．

これは話し手の信用｛belief｝という概念において，**推定**が無標の**叙述**｛Declarative｝よりも強いか弱いかという疑問に関連する．Kashaya 語について Oswalt(1986:34)は，「**推量**｛Inferential｝の接尾辞は確実性の欠如ではなく，単により高い段階の証拠性の欠如を示唆しているに過ぎない」とした．Wintu 語に関して Schlichter(1986:51)は，**推定**だけではなく**想定**｛Assumptive｝についても，話し手は“状況からわかる感覚的証拠の理由によって”真実であるという叙述を信じているとしている．**叙述**については，この証拠性が最もよく現われるのは視覚によるものであり，**想定**については，話し手の類似した経験や規則的なパターン，生活の中で共通して繰り返されてきた状況からくるものであるとしている．

しかしながら同じ事が英語の MUST と WILL にも当てはまるかもしれない．*John must be in his office* または *John'll be in his office* と言う人は，確かにジョンが会社にいると信じているに違いない．**叙述**対モーダル範疇の問題は，単に信用の問題ではなく，くだされた判断｛judgement｝または命題について証拠の有無を主張することと指し示すことの対立の問題に過ぎない．英語と Kashaya 語のような言語との違いでは，Kashaya 語においてはモーダルな形式を使う傾向がより強い．しかし英語では**叙述**を使うところで，この言語では**推定**を使ったからといって，英語の MUST よりも話し手の信用を必ずしもより指し示しているわけではない．

最後に，**叙述**は無標形式ではない場合がある．例えば Huichol 語(Mexico-Grimes 1964)では，無標の形式は通常疑問として用いられるが，一方**叙述**は‘主張のマーカー｛assertive marker｝’を有している（2.3 を参照せよ）．

2.7.2　主張と‘強い主張’

いくつかの言語には‘弱い’**叙述**｛Declarative｝と‘強い’**叙述**｛Declarative｝があるようである．例えば Imbabura 語(Cole 1982:164)では次の例のように‘強調された一次的な情報’と‘一次的な情報’の二つの形式がある（1.4.2 から最引用する）．

ñuka-ta miku-naya-n-mari
I-ACC　eat-DES-3-EF.INF
‘I want to eat’
私は食べたい．

kan-paj ushi-wan　　Agatu-pi-mi
you-of　daughter-with Ageto-in-F.INF
‘I met your daughter in Ageto’

私 Ageto であなたの娘に会った.

1.4.5 と 2.6.1 で記したが, Ngiyambaa 語(Donaldson 1980:252-5)には二つの接語がある. それらは次のように定義されている.

> **主張** {Assertion} は,「陳述に対する聞き手の注意を描くのに用いられる.『私は～を主張する(I assert that...)』という陳述と等しい」
> **断定的な主張** {Categorical assertion} は,「話し手は陳述を表している…陳述の絶対的な真実性が重要である.『私は断定的に～を主張する(I categorically assert that...)』という書き出しと等しい」

用例を挙げる.

waŋaːy-baːr-na yana-nhi (254)
NEG-ASS-3ABS walk-PAST
'He didn't walk' (again)
彼は歩かなかった（再び).

waŋaːy-baːɽ-na yana-nhi (254)
NEG-CATEG-ASS-3ABS walk-PAST
'He absolutely didn't walk (again)'/'He never walked again'
彼は絶対に歩かなかった（再び).

同様に Hidatsa 語(2.2.1 を参照)についても, G.H.Matthews(1965:99-100)は'**強調** {Emphatic}'と'**ピリオド** {Period}'を区別している. これらについては以下のように述べている.

> **強調** {Emphatic}: 話し手はその文が真実であると知っていることを示している. もし**強調** {Emphatic} で終わる文が誤りであるならば, 話し手はうそつきと見做される.
> **ピリオド** {Period}: 話し手はその文が真実であると信じているのを示している. もしその文が真実ではないと明らかになったら, 話し手は間違えたのであって, 決して嘘つきなのではない.

（再び）例を挙げる.

wacéo íikipi kurè héo ski
man　pipe　carried　EMPH
'The man (sure) did carry the pipe'
その人は（確かに）パイプの運んだ.

wacéo íikipi kurè héo c
man　pipe　carried　PER
'I suppose the man carried the pipe'
その人はパイプを運んだと私は思う.

違いは知識のうちの一つと信念の対立であると主張されているが, 3つの言語全てにおいて，その状況は非常に類似している.

もしモーダルの体系が**現実**｛Realis｝と**非現実**｛Irrealis｝の術語の中で扱われるなら，これら3つの言語では，**非現実**｛Irrealis｝の体系があるだけではなく，**現実**｛Realis｝に二つの術語もあることになるだろう．そこでは主張の強さに関する二つの程度が区別されるのである.

3.　モーダル体系：出来事のモダリティ

拘束的モダリティと動的モダリティは実現されていない出来事を言及するものであり，事が行われることではなく，単に潜在的な出来事を言及するものである．したがって‘出来事のモダリティ’として述べられるかもしれない．拘束的モダリティと動的モダリティの基本的な違いは，動的モダリティは条件的な要因が主語として示される人間とは外側にあり（彼は行動することが許可されている，命令されているなど），一方拘束的モダリティはそれらが主語の内側にあるということである（彼は行動する能力がある，意志があるなど）．[7]しかしいくつか異なる点がある．第一に，拘束的モダリティは一般的にある種の権威に依拠している．通常それは話し手である．第二に，**約束**｛Commissive｝（行動が行われるということを話し手が保障するもの）もまた拘束的モダリティの下位に含まれる場合もある．第三に，動的な能力｛dynamic ability｝は場合によっては，主語の実際の能力よりも行動が可能か不可能かという一般的な状況といった観点から解釈される場合があるかもしれない(1.3.2 参照).

しかしながら本章においては多くの例が英語から挙げられる．なぜなら英語には他の言語よりも拘束的モダリティの幅広い体系が現われるからである．

3.1　形式上の体系

すでに数回述べたように(1.4.5 を特に参照)，同一の形式が認識的なものの体系や，拘束的 / 動的なものの体系にしばしば使われる．同様に同一の形式（例えば CAN のように）が拘束的なものまたは動的なもののいずれかになる場合がある．さらに 1.4.5 で述べたように，モーダルマーカーは他の文法マーカーとして同一の形式上の体系に現われるかもしれない．例えば Ngiyambaa 語における‘**断固としたもの**｛Purposive｝’は認識的なものまたは拘束的なもののいずれかに現われるだけではなく，時制マーカーを含む形式上の体系にも現われる．

3.2　拘束的なもの

拘束的モダリティの最も共通するタイプは，‘指示｛directives｝’であり，それは‘我々は他人にことをさせようとする’ということを表わしている(Searle(1983:166)).

3.2.1　指示

指示｛directive｝の二つの種類は英語で MAY と MUST によって表わされ，この二つの法助動詞は認識的な**推測**｛Speculative｝と**推定**｛Deductive｝を表

わす．口語では MAY よりも CAN の方が用いられるが，MAY はまだ廃れていない．- Palmer(1990:71)を参照．

You may/can go now
You must go now
あなたは明日行ってもいい．
あなたは明日行かなければならない．

これらは**許可**｛Permissive｝と**義務**｛Obligative｝として解釈される．
他のヨーロッパ諸言語に類似した動詞のペアがある．ドイツ語の例を挙げる．

Du magst herein kommen
You can/may+2SG+PRES in.here come
'You may come in'
あなたは入ってもいい．

Du musst herein kommen
You must+2SG+PRES in.here come
'You must come in'
あなたは入らなくてはならない．

イタリア語もドイツ語と同様であるが，二人称を用いる代わりに三人称を用いる方が丁寧である．

Puó entrare
can/may+3SG+PRES come.in
'You may come in'
あなたは入ってもいい．

Deve entrare
must+3SG+PRES come.in
'You must come in'
あなたは入らなくてはならない．

現代ギリシャ語もまた認識的なものに類似したものとして同じ形式を用いるが，一つ異なる点がある．許可の形式は認識的な**推測**｛Speculative｝同様，非人称ではなく主語と一致する．

boris　　na　fiɣis
can+2SG+PRES that you.leave
'You may leave'
あなたは離れてもいい.

prepi　　na　fiɣis
must+IMPERS that you.leave
'You must leave'
あなたは離れなければならない.

同様に，フランス語には POUVOIR，DEVOIR といった二つの動詞があり，その形式は義務については通常，非人称である *il faut* となる.

さらに驚くべきことに，デンマーク語と北フリジア語では，他の形式が曖昧さを回避するのに有益であるにもかかわらず，認識的な deduction に用いるモーダルな動詞は拘束的な許可と義務にも用いるのである．その動詞はデンマーク語では *måtte* である(Davidsen-Nielsen 1990:84,187,194).

Der　må　　være flere　andre grunde
There MÅTTE+PRES be　several other reasons
'There must be several other reasons' (epistemic necessity)
いくつか他の理由があるに違いない.（認識的な必然性）

Du　må　　danse en dans　til
you MÅTTE+PRES dance a　dance more
'You may dance another dance' (deontic possibility)
あなたは他の踊りを踊ってもいい.（拘束的な可能性）

Vi　må　　bare　tage chancen
we MÅTTE+PRES just　take the chance
'We'll just have to take the chance' (deontic necessity)
我々はチャンスを得なければならないだろう.（拘束的な必然性）

他の多くの言語には形式のペアがある．タミル語(Dravidian - Asher 1982:167-70)では認識的なモダリティについて接尾辞 *-laam* と *-um* を用いる - 2.2.1 を参照せよ - これらはそれぞれ許可と義務（**義務**（Debitive））に関するものである.

veɳum-ɳɳaakkaa, naalekki　avan peeca-laam
want-COND　　tomorrow he　speak-PERM
'If he wants, he can speak tomorrow'
もし彼が望むなら，彼は明日話してもいい.

avan aŋke pooka-ɳum
he　there go-DEB
'He must go there'
彼はそこに行かなければならない.

同様に Lisu 語(Lolo-Burmese - Hope 1974:122,126)では，自動詞語幹のセットがあり，それは拘束的なモーダルを含むより広い体系に属しているにもかかわらず(3.3.1 参照)，義務と許可に関する形式を含んでいる.

ása　nya ami　khwa wa̰-a̰
Asa TOP field hoe　obligatory-DEC
'It is obligatory for Asa to hoe fields'
Asa が畑を鍬で耕すのは義務である.

ása　nya ami　khwa da-a̰
Asa TOP field hoe　acceptable-DEC
'It is acceptable for Asa to hoe fields'
Asa が畑を鍬で耕すのは好ましい.

許可と義務（**許可**と**義務**（Permissive and Obiligative））は（認識的な**推測**｛Speculative｝や**義務**｛Obligative｝と同様）可能と必然の観点から解釈されうる．これは 4.1.2 で詳細に論じられる.

3.2.2　約束

約束｛Commisive｝は Searle(1983:166)によって，'我々がことを成すことを自分自身に約束する' と定義されている．これらは英語において法助動詞の SHALL で表わされる．これらは通常，約束または脅迫｛threat｝のどちらかとして見られうる．約束と脅迫の唯一の違いは，ことを成すことを話し手が保証しているのか，あるいは聞き手にとって歓迎されていないことなのか，という点にある.

John shall have the book tomorrow
You shall do as you are told
ジョンに明日本をあげよう.
あなたは言われたようにしなさい.

ここでは話し手は，ジョンが本を受け取ることと聞き手が要求されたことをすることの調整を保障することによって，出来事が起ることを自分自身に課しているのである (SHALL はまた英語のいくつかの格式のある方言では未来を述べるのに WILL と共に用いられるが，この場合の未来を表わす SHALL は主語が一人称の場合に限られ，主語が二人称や三人称の場合には**約束**を表わすのに用いられる).

ほとんどの言語では**約束**について特別な文法形式を持たない．しかしすでに述べたように Ngiyambaa 語(Donaldson 1980:160,161)では，‘非現実’マーカーが ‘might’, ‘likely’ として認識的に用いられるが，しかし‘非現実’のマーカーは**権威**{authoritative}を表わす ‘shall’ として拘束的に用いられる(1.4.5 参照).

yuruŋu　ŋidja-l-aga
rain-ERG rain-CM-IRR
‘It might/will rain’
雨が降るかもしれない / 降るだろう.

waŋa:y-ndu-gal　dhagurma-gu yana-y-aga
NEG-2NOM-PL　cemetery-DAT go-CM-IRR
‘You shall none of you go to the cemetery’
あなた以外の人はお墓に行ってはいけない.

最後の例と Donaldson によるその他の類似した例が否定であるのは重要なことかもしれない．これは 2.1.6 と 3.3.2 で議論された可能性と必然に関する否定の問題と関連するが，一致しないということを表わしている (Ngiyambaa 語は義務 {obligation} と断固としたもの {purposive} について異なる形式を持つ．これについては 3.5 で議論されるだろう).

3.2.3　緩和

ちょうど認識的にモーダルなものの過去時制の形式が仮定的でより弱い判断を指し示すのに用いられうるように，拘束的にモーダルなものうち，いくつかの過去時制形式はモダリティの度合いを弱化するのに用いられる．MUST は

ought to と *should* を持ち(これらの違いについてはCoates 1983:7783を参照), MAYとCANは *might* と *could* を持つ. 形態的には *should* は形式的にはSHALLの過去形であるが，概念的にはMUSTを緩和させた形式として機能する.

ought to (*should*)に関して，その状況はより明確である．二つのポイントがある．第一には出来事が行なわれないという可能性を話し手が受容しているという点でこれらはMUSTと異なる．それは次のようなものである.

He ought to /should come, but he won't
*He must come, but he won't
彼は来なければならないが / 来なければならないが，来ないだろう.
*彼は来なければならないが，来ないだろう.

ここで二番目の用例は変則的でないとしても，最も相応しくないものである．もし話し手が，義務が果たされないかもしれないと考えるならば，*ought to / should* が用いられるだろう.

第二に，*ought to / should* (*have* を付け加えて)は過去の出来事を示すことができるが，一方MUSTはできない.

You ought to/should have come
あなたは来なければならなかった.

Must have は認識的に解釈されうるが(2.1.6参照)，決して拘束的には解釈されない.

これら二つのポイントの説明では，*ought to* と *should* は起こるであろうことと起こったであろうことについて言及するという点で本質的に条件的であるということである．その条件は厳密にはモーダルなものを言及しておらず，命題の中で表わされた出来事を言及している(Palmer 1979:102;1990:125)．したがって次のグロスは適切なものである.

You ought to come
'You have an obligation to come, and you would come if you fulfilled it'
あなたは来なければならない.
'あなたには来るという義務がある．もしあなたがそれを果たすならあなたは来るだろう'

You ought to have come
'You had an obligation to come and you would have come if you had fulfilled it'
あなたは来なければならなかった.
'あなたには来るという義務があった．そしてあなたがそれを果たそうとしたならばあなたは来たであろうに'

might の状況は単純ではない．これは疑問において許可を求めるための形でより婉曲 {tentative} に，より礼儀正しくする際にしばしば用いられる(Palmer 1990:187).

Might I come in at the moment on this, Chairman?
今入ってもよろしいでしょうか？議長.

しかしこれは極めて積極的な示唆をする場合にも用いられる(Palmer1990:187).

You might try nagging the Abbey National
You might have told me
あなたはアビーナショナルに苦情を言えばいいのに.
あなたは私に言ってもよかったのに.

ここで再び *ought to / should* について述べるならば，これらはある状況下で起こるであろう出来事，または起こったであろう出来事について言及するという点で条件的である．*ought to / should* については，その条件は義務の遂行であり，*might* については賢明で適切な方法における行いのように見える．しかしこれは単なる許可というよりもより強い概念であり，*might* が'あなたは許可を受けたので，このように振舞ったのであろう'という意味を持たないのは明らかである．そして明らかなことに，*might* は MAY よりも拘束的モダリティの強い種類を表わすのである．つまり単なる許可というよりも積極的な示唆を表わすのである.

しかし義務の度合いは他の言語では違った方法で表わされる．Albanian 語(Newmark, Hubbard and Prifti 1982:102-3;Frawley1992:423)のように，'must / should'の対立は異なる法助動詞によってマークされる.

kjo këmishë duhet larë
this shirt must wash
'This shirt must be washed'

このシャツは洗濯されなければならない.

kjo këmishë do larë
this shirt want wash
'This shirt needs washing'
このシャツには洗濯が必要だ.

3.2.4　話し手の主観性

拘束的にモーダルなものは，しばしば話し手から発せられる許可と義務を示しているものであるが，それらが常にこの意味において話し手の主観性であると主張することはできない．次の用例のように話し手が含まれていない場合もある.

You can smoke in here
You must take your shoes off when you enter the temple
ここでは喫煙可能である.
寺院に入るときは靴を脱がなければならない.

しかし概して話し手は許可や義務について同意していることを示唆している．義務については，英語においてMUSTと置き換える形式があること，またそれは話し手が一般的にその義務に対して責任を負わないという示唆に関連している．この置き換えられる形式はHAVE TOである．二つの間には潜在的な対立がある.

You must come and see me tomorrow
You have to come and see me tomorrow
あなたは明日来て私に会わなければならない.
あなたは明日来て私に会わなければならない.

最初の用例は示唆または勧誘に過ぎない．二番目の用例は話し手から独立した強制を表わす理由があることを示唆している．もしこれがなければ，話し手が述べたことに対して僭越だと聞き手は見做し，腹を立てるかもしれない.

同様に, BE SUPPOSED TOは, 話し手が責任を負わないことを表わす*should*や*ought to*の代わりに用いられる.

You should go to London tomorrow
You are supposed to go to London tomorrow

あなたは明日ロンドンに行かなければならない.
あなたは明日ロンドンに行くことになっている.

この意味において指示｛directives｝，特に**義務**がどの程度まで話し手の主観性によるものかを判断するのは難しい．Tiwi 語(Australia-Osborne1974:44)では，‘強制｛compulsional｝’という形式がある（2.3 を参照）.

a-u-kəɹimi
he-COMPUL-do
‘He has to do it’
彼はそれをしなければならない.

a-u-ra-kəɹimi
he-COMPUL-FUT-do
‘He will have to do it’
彼はそれをしなければならないだろう.

Bybee(1985:167)が示唆したことだが，解釈の上では，これは話し手によって課された義務を示しているのではなく，主体に義務があることを示しているに過ぎないのである．しかし Osborne はこの‘強制’の形式は，‘“must” や “have to” に等しい’とし，Bybee の提唱を支持しなかった．また彼は，それは非過去や現在で現われるとし，過去では現われないことを暗に意味すると述べた．次のセクションで議論されるが，これは実際に話し手の主観性（話し手が義務を課すという）をよく示唆しているかもしれない.

3.2.5　過去時制指示

2.1.7 で示したが，認識的にモーダルなものは本質的には話し手の主観性によるものなので，それらは過去における判断を示すために過去時制の形式で用いられない.

少なくとも英語に関しては拘束的にモーダルなものが過去を示すために用いられない．MAY と CAN の過去の形式は過去における許可を表すのに用いられず，一方 MUST は過去の形式を持たない．したがって拘束的な意味で言うことは不可能である.

*I might/could/must(ed) come yesterday

(Could は動的な意味で可能である - 3.3.2 を参照)過去における義務については，定義上，現在時に話し手によって課されることはできない． HAVE TO の過去形式は使える．

He had to be in London yesterday
彼は昨日ロンドンにいなければならなかった．

認識的にモーダルなものについては(2.1.7), 過去時制の形式は報告された発話で用いられる(MUST についてはそのままのものか，あるいは had to に置き換えられる)．

He may(can)/ must come on Tuesday
He said he might(could)/must/had to come on Tuesday
彼は火曜日に来るかもしれない / 来るに違いない．
彼は火曜日に来るかもしれない / 来るに違いない / 来るに違いないと彼は言った．

should と *ought to* の過去時制形式については，それらは厳密に義務を表しているのではなく，話し手が考えていることが正しいということを示しているに過ぎないという点で若干状況が異なる．したがって過去の出来事に関連するそのような拘束的な判断を示すのは可能である．英語ではこれを *should have* と *ought to have* で行う．

He should have/ought to have gone to London the next day
彼は翌日ロンドンに行くべきであった / 行かなければならなかった．

しかし過去時制における制限は基本的に英語の特徴である．例えば英語と類似しているドイツ語のモーダルなものである MÜSSEN は過去時制を示すのに用いられる過去の形式を持つ．

Ich musste　　fleissig arbeiten
I　müssen+3SG+PAST+IND hard　work
'I had to work hard'
私はたくさん働かなければならなかった．

同じことがロマンス諸語の関連する動詞にも当てはまる．

3.3　動的なもの

3.3.1　能力と意気込み

動的なモダリティには能力｛ability｝と意気込み｛willingness｝(**能力**｛Abilitive｝と**意志**｛Volitive｝)を表す二つのタイプがあり，英語ではCANとWILLによって表される．

My destiny's in my control. I can make or break my life myself
Why don't you go and see if Martin will let you stay?
私の運命は私の支配にある．私は自分で自分の人生を作ることも壊すこともできる．
マーティンがあなたを泊めるなら，あなたは行ってみてはどうだろう？

再び記さなければならないことだが，ここでの動詞は他のタイプのモダリティにも使われる動詞である．CANは認識的なモダリティ（否定のときだけ）と拘束的モダリティの両方に用いられる．したがって文の主語に対して内的である，三番目のタイプのモダリティを表すものとして見受けられる．同様に，3.2.1で議論されたが，他のヨーロッパ諸語の許可の形式は能力を示すのに用いられる．多くの言語では許可と能力の形式上の違いがないが，英語ではMAYが能力を示すのに用いられないという点で明らかである．しかし1.3.2で言及されたように，動的なCANは身体的，精神的な力だけを言及するばかりではなく，以下のように（繰り返しになるが）関与する人物に影響を与えるような情況を含むものでもある．

He can run a mile in under four minutes (ability)
He can escape (there is nothing to stop him)
彼は4分以下で1マイル走ることができる．（能力）
彼は逃げられる．（彼を止めるものが何もない）

Lisu語(Lolo-Burmese-Hope 1974:122-6)では，二つの能力を示す異なった形式があり，一つは‘やり方を知っていること｛knowing how｝’という意味であり，もう一つは‘身体的な能力｛physical ability｝’という意味である．

ása nya ami khwa kwú-ạ̃
Asa TOP field hoe mentally.able-DEC
‘Asa is able (knows how) to hoe fields’
Asaは畑を耕せる．（やり方を知っている）

ása nya ami khwa kwhu-ạ̰
Asa TOP field hoe able-DEC
'Asa is (physically) able to hoe fields'
Asa は畑を耕せる.（身体的に）

ása nya ami khwa da-ạ̰
Asa TOP field hoe acceptable-DEC
'It is acceptable for Asa to hoe fields'
Asa が畑を耕すのは納得できる.

動的な可能性には他の 3 つのタイプがあり，それはタブーからの解放と障害がないこと，そして十分な勇気を持っていることである.

ása nya ami khwa tyè-ạ̰
Asa TOP field hoe freedom.taboo-DEC
'It is not taboo for Asa to hoe fields'
Asa が畑を耕すのはタブーではない.

ása nya ami khwa bala-ạ̰
Asa TOP field hoe no.hindrance-DEC
'Asa is free to hoe fields'
Asa は畑を自由にしていい.

ása nya ami khwa pə-ạ̰
Asa TOP field hoe able.couragewise-DEC
'Asa dares to hoe fields'
Asa は思い切って畑を耕す.

しかし Lisu 語の動詞はかなり大きなグループの項であり，そこには拘束的，動的な形式だけではなく，'Asa が畑を耕すのは自然なことだ'，'Asa が畑を耕すことは以前も起った'，'Asa は畑を耕すのに飽きている' と訳される他のものもある.

精神的な能力に関する動詞 'know' を用いることによって，これら二つの種類の能力を区別するヨーロッパ諸語があるということは付け加えるに値する. 例えばフランス語の savoir である.

Il sait　　nager
he know+3SG+PRES+INDIC to swim
'He can swim'
彼は泳げる.

しかしSAVOIRをモーダルな動詞として扱う根拠はない．さらに驚くことに中国語のモーダルな動詞*hui*は‘やり方を知っている｛know how｝’ことの一般的な意味を持つ．Hockett(1968:62)は，「もしある人がスワヒリ語を話せるとしたら，he *hwéi* speak Swahiliと言うし，タバコを吸うなら，he *hwéi* smokeと言う」とコメントし，さらに次のように無情の対象物にさえ使えるとした.「a high wind *hwéi*...blow down a tent or that an electron *hwéi* behave in accordance with the equations of wave mechanics と言うことができる」

Lisu 語に関連してさらなるポイントがある．‘勇気を起こす能力｛able couragewise｝’を表す形式があるが，そこでは英語のdareを使って訳されている．DAREは非主張の環境を制限するが，法助動詞である(1.4.2を参照)．そしてそれは動的モダリティの中の他のタイプのマーカーとして見做せるのである(Palmer 1990:111-12).

WILLは英語において**想定**｛Assumptive｝(2.1.3参照)と未来を示すだけではなく(4.3.2参照)，意気込みを表す**意志**｛Volitive｝としても用いられる．挙げられた用例は単なる未来というよりも明らかに快諾のようなものを示している.

Why don't you go and see if Martin will let you stay?
She loves him and she won't leave him.
Will you stand by the anchor?
マーティンがあなたを泊めるなら，あなたは行ってみてはどうだろう？
彼女は彼を愛していて，彼女は彼のもとを離れようとしない.
錨の近くにいてくれないか？

未来のWIlLと自発のWILLには形式的な違いが一つある．後者のみが条件を表す節(if節)で用いられる点である.

It'll rain tomorrow　→　If it rain tomorrow
明日雨が降るだろう　　明日雨が降れば
John'll help you　→　If John'll help you
ジョンがあなたを助けるだろう　ジョンがあなたを助けるなら

他のヨーロッパ諸語で類似した動詞は通常，願望｛wishing｝や欲望｛wanting｝を表すというように広い意味を持ち，ドイツ語の場合，WOLLENもまた文の主

語によって言われたり，主張されたり，言い張ったりされることに対する証拠的な意味を持っている．(2.2.2 参照).

いくつかの言語には意図を示す形式の例がある．例えば Tonkawa 語(Texas-Hoijer1931:289-90)と Maibu 語(California-Shipley 1964:46-52)の‘意図｛intentives｝’がある．

heul-a·ha'a 'I shall catch him'
ʔjḱójʔtàs　'I'm going to go'
私は行くつもりだ.

許可が拘束的な可能性という観点から解釈されるように(3.2.1 参照)，能力は動的な可能性という観点から解釈されうる．同じ方法で必然的なことを表すために MUST に類似した用法があると予想するかもしれない. MUST のそのような用法はごく稀であるが，恐らく次のようなものである(Palmer 1990:130).

He's a man who must have money
彼はお金を持ってないないと気がすまない人だ.

他から例を挙げる(Perkins 1982:260)

You must go poking your nose into everything
あなたはあらゆることに干渉しなければ気がすまない.

しかしこれら二つは微妙に異なっている．一番目の用例は欲望に打ち勝つことを示しており，二番目の用例は性癖に打ち勝つことを表している．二番目の意味は次のように can't help を用いて表すことができる.

You can't help poking your nose into everything
あなたはあらゆることに干渉せずにはいられない.

3.3.2　過去時制と時

英語でこれらの動的にモーダルなものが認識的，拘束的にモーダルなものと異なる点は，動的にモーダルなものは過去の時を言及するために過去時制で用いることができるということである.

When I was younger I could run much faster
All he would accept was our thanks

私が若かったとき，とても早く走ることができた.
彼が受け取る気でいるすべてのものは，私たちの感謝である.

しかしこれらは能力や意気込みの結果として実際に達せられた出来事について言及するために用いることはできない．したがって次のように言うことはできない.

*I ran fast and could catch the bus
*I asked him and he would come

しかし対応する否定の形式や習慣的な形式に関して問題はない.

I ran fast, but couldn't catch the bus
I asked him but he wouldn't come
I always ran fast and so could catch the bus
I always asked him and he would come
私は早く走った．しかしバスを捕まえることはできなかった.
私は彼に頼んだが彼は来なかった.
私は常に早く走ったのでバスを捕まえることができた.
私は常に彼に頼んだので彼は来てくれた.

しかしほぼ同じといえる形式である BE ABLE TO と BE WILLING TO には類似した制限はない.

I ran fast and was able to catch the bus
I asked him and he was willing to come
私は早く走りバスを捕まえることができた.
私は彼に頼み彼は来てくれた.

これについて大変興味深い説明がある．モーダルは非現実であるので完了または過去といった現実の状況であることについて言及するには適切ではない．しかし 6.6.4 と 6.6.9 で例証されるように否定と習慣的過去は非現実として見做されうる．過去時制の形式は否定または習慣的過去に関する言及がある際に，その状況では非現実であるからである．更なる議論は Palmer 1990:92-7 を参照せよ.

他のモーダルに関して，過去時制は能力や意気込みを表すための‘緩和{modifications}’として不確かに(more tentatively)用いられうる．特に次のように申し出をするときにそのように用いられる.

I can/could do that for you
I will/would do that for you
私はあなたにそれをします.
私はあなたにそれをしましょう.

しかしそこにはしばしば条件的な含みがある - ‘もしあなたが私にそれを望むなら’, ‘もしあなたが私に頼むなら’.

Could はまた示唆に関して *might* よりも用いられる.

You could try nagging the Abbey National
You could have told me
あなたはアビーナショナルに苦情を言うべきだったのに.
あなたは私に話すべきだったのに.

3.4　命令法と指令法

ほとんどの言語は命令法と見做されうる特定の形式を持っている. 法助動詞によってモーダル体系がマークされる英語のような言語では, 例えば *Come here* のように動詞の単純な形式で示されるため, 命令法はモーダル体系からきわめて独立している.

概念的に命令法は拘束的にモーダルなものと非常に関連している. それは明らかに指令であり, 命令 {command} を暗示するものとして通常描かれる. 実際にそれは指令を強めたものとして考えられ, 権力がある誰かが発するものであり, したがってそこでは不服従は予期されないのである. しかしそこには法助動詞に関連して記されるべき二つのポイントがある.

第一に, それは命令を与えるだけではなく, 次のように単純に許可や助言を与えるものでもある.

Come in!
Don’t worry about it
入れ！
それについて心配するな.

このように *Come in!* はあなたは入ってもいい, またはあなたは入らなければならないとして解釈されうる. 第二に, 命令法は話し手が発話行為の中で実際に‘命令 {command}’を与えるという点において遂行的 {performative} で主観的である. この理由のため, 指令(directives)とは異なり, 通常従属節には現われない.

‘You must come’ I said that she must come
‘Come in!’ *I said that come in

（しかし 5.4.1 を参照せよ）

Lyons(1977:747)は，命令法は厳密には二人称でのみありえ，三人称（または一人称）ではありえないとした．しかしこれは術語上の問題に過ぎない．なぜなら一人称と三人称の‘命令法｛imperatives｝’は単に‘指令法｛jussives｝’としばしば呼ばれるからである．Bybee(1985:171)は人称のすべての組が使われるところで‘願望法｛optative｝’という術語が使われるとしているが，これはその術語は古典ギリシャ語(8.2.2)における‘願望法’として伝統的に用いられるという観点からすると，必ずしも適切なものではない(しかし‘願望法’がより適切と思えるデータが 5.4.2 にもある)．‘**指令法**｛Jussive｝’（に**命令法**｛Imperative｝を加えた）という術語がここでは好ましい．

命令法と**指令法**はモーダル体系に属すだろう．例えば Afar 語(Cushitic, Ethiopia-Bliese 1981:139-46)では，以下に例示したように同一の体系のなかに‘命令法’，‘接続法’，‘相談法｛consultative｝’がある．

imperative:	'ab	‘do’
jussive:	'nakay	‘let me drink’
subjunctive:	'rabu	‘may I die’
consultative:	a'boô	‘shall I do it?’

命令法	‘しろ’
指令法	‘飲ませてください’
接続法	‘私が死にますように’
相談法	‘私がそれをしてもいいですか？’

これらのすべては拘束的なものとして見做しうる - 出来事のモダリティの例として，未来に起りうる出来事と関連するのである．

1.4.5 で記したように Ngiyambaa 語(Donaldson 1980:159)では命令法は**許可**｛Permissive｝と**委託**｛Commissive｝（これらの形式はまた認識的な機能を持つ）として同じ体系に現われる - 3.2.1，3.2.2 を参照せよ．

ŋindu bawuŋ-ga yuwa-dha
you+NOM middle-LOC lie-IMP
‘You lie in the middle!’
あなたは真ん中に横たわる！

しかし Ngiyambaa 語では過去と現在の**叙述法**｛Declaratives｝（2.7.1 参照）もまた，同じ体系に属する．そして命令法は形式的には拘束的なものの体系の項｛member｝ではなく，厳密には純粋にモーダルな体系の項でもなく，複合した体系の項なのである．

同様に，多くのアメリカ原住民言語は，命令法と指令法をマークする接尾辞が広い体系の項としてしばしば現われる．そのような接尾辞の組に Tonkawa 語 (Texas-Hoijer 1931:83-94) と Maidu 語 (Shipley1964:46-51) があり，Mithun(1999:171)によって引用されたこれら二つの言語においては**命令法**(Imperative)と**指令法**(Jussive)(‘勧告｛hortative｝’‘警告｛exhortative｝’)が現われる．Maidu 語に関して Shipley には次のような時制 - ‘mode’ のパラダイムがある．

現在 - 過去直説法，未来直説法，習慣的過去直説法，点的過去直説法；

接続法；
警告的願望法(‘might’)，意図的願望法(‘going to’)，
勧告的願望法(‘let’)；
疑問；
命令Ⅰと命令Ⅱ

Tonkawa 語の体系からの用例は以下のようなものである．

Declarative	naxadjganaw-*o*-’o	‘I married’
Assertive	do.na-n*a’a*	‘He lies’
Exclamatory	’awac’aˑla hedoxa-*gwa*	‘The meat is all gone’
Interrogative	yaxa-*ga?*	‘Did you eat?’
Intentive	heul-*aˑha’a*	‘I shall catch him’
Imperative	‘andjo-*u*	‘Wake up’
Potential	ya.dj-’*aˑ*-n’ec	‘I might see him’
Exhortative	hama’am-doˑx-*aˑ*dew-eˑl	‘Let him be burned up’
叙述		「私は結婚した」
主張		「彼は横たわっている」
感嘆		「肉はすべてなくなっている」
疑問		「あなたは食べたのか？」
意図		「私は彼を捕らえるだろう」
潜在		「私は彼に会ったかもしれない」
警告		「彼を燃やしてしまえ」

(‘感嘆{exclamatory}’と‘警告{exhortative}’という術語はMithun1999:171で使われている)

北アメリカ諸語の多くには二つの種類の命令法がある．Maibu 語(North Calfornia-Shipley1964:171)において，‘命令法Ⅰ{ImperetiveⅠ}’は「話し手の前で命令の行動が行われたとき，または命令された行動に関心が払われたとき」も用いられ，‘命令法Ⅱ{ImperativeⅡ}’は「命令された行動が話し手が不在の場合に行われるとき」用いられる．

Imperative I　sólpi
‘Sing!’
命令法Ⅰ　「歌え！」

Imperative II　mymýk púlkydi dákpajtipadà
‘Stick it in his door!’
命令法Ⅱ　「それを彼のドアに刺せ！」

Cheyenne 語(Algonquian, Montana, Leman 1980:41)では，その違いは即時に達せられる命令と後にするものかである．

méseestse　‘Eat!’
mésėheoʔo　‘Eat!’ (later)
「食べろ！」
「食べろ！」(後で)

これはTakelma 語(Sapir 1922:94)や他の多くの言語(Bybee 1985:171)にも当てはまる．また，ムード体系に関する言語にしばしば二つの種類の命令があるが，それは丁寧さの観点で異なる - 5.4 と 6.7.2 を参照せよ．

Maibu 語と Cheyenne 語もまた指令法を持っている．

‘Hortative’　mése̥heha　‘Let him eat!’
‘Hortative’　ʔyk’ójtàs　‘Let me go!’
‘勧告{Hortative}’　「彼に食べさせろ！」
‘勧告{Hortative}’　「私に行かせろ！」

3.5　オーストラリア諸語における‘目的’

オーストラリア諸語において‘目的{Purposive}’として見做される範疇は義務{obligation}(と認識的な必然性)を主節で表す(1.4.5 参照)．Ngiyambaa

語(Donaldson 1980:162)から例を挙げる.

ŋadhu bawuŋ-ga yuwa-giri
I+NOM middle-LOC lie-PURP
'I must lie in the middle'
私は真ん中に横たわらなければならない.

しかし'目的'はまたDyirbal語(Dixon 1972:69)のように主節において原因がわからないところからの結果を示すのにも用いられる.

balan ugumbil baŋgul yaɽaŋgu balgali
CL+NOM woman+NOM CL+ERG man+ERG hit+PURP
'Something happened to enable or force the man to hit the woman'
「その男にその女を殴らせるあるいは殴るように仕向ける何かが起った」

従属節で同一のマーカーは目的と結果の両方に用いられる. したがってYidiny語(Dixon1977:345-6)では従属節の目的{purposive}は通常目的を示す.

ɖada ɖuɖu:mbu gaɽbagaɽba:alŋu ŋuɖu wawa:lna
child+ABS aunt+ERG hide+PAST not see+PURP
'Auntie hid the child so that it should not be seen'
「おばさんは子供が見えないようにその子を隠した」

しかしそれはまた'自然な結果{natural result}'を表すのにも用いられる.

ŋayu burawuŋal duga:l ɖinbiɖinbi:lna
1+SUB Burawugal+ABS grab+PRES struggle+RED+PURP
I grabbed the water sprite woman and as a result she kicked and struggled
私は水の妖精の女を掴み, 結果として彼女は蹴り, もがいた.

いくつかのオーストラリア諸言語ではNgiyambaa語(Donaldson1980:280)のように同じ接尾辞もまた間接的な命令を表すのに用いられる.

ŋadhu-na ŋiyiyi girma-l ŋinu:
I+NOM-3ABS say+PAST wake-PURP you+OBL
'I told her to wake you'
「私は彼女にあなたを起こすように言った」

類型論的にこれは興味深い．なぜならこれらの‘目的’の機能はラテン語の接続法における機能と非常に似ているからである．ラテン語の接続法もまた目的，結果，間接的な命令を表すのに用いられる(5.3.2，5.3.4，5.4.2を参照)．概念的にこれらの用法の違いは恐らくいくつかの原因の結果を示すという点に関連する．つまり目的を伴う意図的効果と間接的な命令を伴う効果，そして結果を伴う現実的な効果といういくつかの原因の効果に関連している．同様に主節における（ラテン語と対応しない）義務と結果の解釈には恐らく可能な異なる訳によって示されるだろう－‘その男はその女を殴らなければならなかった’，‘その男が女を殴ったのは避けられないことだった’というように．そこには男に課された義務またはいくつかの知られていない原因か述べられていない原因のいずれかが行動に対する原因としてある．

Dyirbal 語についても同様に，Dixon(1972:689)は‘複雑な動詞複合体{implicated verb complex}’について述べており，それは再び目的を表す屈折をマークし，意図された行動，あるいは自然な結果のいずれか（両者とも先行する出来事に関連する）を意図している．

ŋaɖa ɖiŋgaliɲu　　biligu
1+SUB run+PRES/PAST climb+PURP
‘I'm running (to a tree) to climb it’
私はそれに登るために木に向かって走っている．

bayi　　yaʈa　　wayɲiɖin　　yalu
CL+NOM man+NOM come.uphill+PRES/PAST towards.here
　　baŋgun dunduŋgu manɖali
　　CL+ERG bird+ERG point.out+PURP
‘The man came uphill towards here, resulting in the bird's pointing out his presence’
その人はこちらに向かって上り坂を来た

Dixon(1977:346)は（Yidiny 語について）目的と結果の意味論的な違いは否定文において中和されるかもしれないと指摘した．

ŋayu guŋgaguŋga:ʈ gali:na　garu　ŋaɲaɲ
1+SUBJ north+RED　go+PURP by and by 1+OBJ
　　ŋamu:ray ŋudu ɲuma:lna
　　smell+ABS not　smell+PURP
‘I must go by the north so that she will not smell me’

私は彼女が私の臭いをかがないように北に行かなければならない.

さらに目的なのか意図された結果の意味なのか、あるいは単に二つのあり得る意味の曖昧さなのか，決めかねる例がある．Dyirbal 語(Dixon 1972:68)から例を挙げる.

balan ɖugumbil baŋgul yaɽaŋgu balgan baɖigu
CL+NOM woman+NOM CL+ERG man+ERG hit+PRES/past fall+PURP
'Man hits woman causing her to fall down'
男は女を倒れるように殴った.
男が女を殴って女が倒れた.

3.6　もう一つの分析

Bybee(1995:6;cf.1985:166) は‘出来事のモダリティは話し手志向{speaker-oriented}と主体志向{agent-oriented}に分けられるべきである’と論じ，‘主体志向のモダリティは例えば義務{obligation}，欲望{desire}，能力{ability}，許可{permission}，根源的な可能性{root possibility}といった主文の述部で言及されている行動の遂行に関して主体の条件に基づいているすべてのモーダルな意味を包含する’としている．また‘話し手が聞き手に行動させようとする命令{imperatives}，願望{optatives}または許可{permissives}といった指令のマーカーは話し手志向である’とした．実際には主体志向のモーダルなものが義務や許可を叙述する拘束的な陳述を含むということは注目されるべきである.

これには若干おかしい二分法がある．なぜなら（ｉ）許可{permission}と義務{obligation}，これらは決定的な要因が主体の外側にあり，(ii)欲望{desire}と能力{ability}，これらは要因が概して主体の内側にあるので，これら（ｉ）と（ii）には大きな違いがあるからである．これは拘束的なもの / 動的なものの基本である．さらに許可{permisson}と義務{obligation}（とりわけ許可）は，しばしば話し手から由来しており，つまり主体志向というよりは話し手志向なのである．確かにBybeeの分析で（主体志向である）‘許可{permission}’と（話し手志向である）‘許可{permissive}’の違いが何であるか理解するのは難しい．この観点から，拘束的 / 動的の二分法が主体志向と話し手志向という二分法よりも有益であるようである.

4　モーダル体系とモーダル動詞

先の２つの章で述べたモーダル体系は，体系そのものだけではなく多くの言語に関するモーダル動詞の使用，また可能と必然の関連性における数多の特徴を分担している．これらの詳細な議論は過度の反復と重複を避けるために，本章では触れないでいる．これらの問題は証拠的なものにあまり影響を及ぼさないので，議論はほとんど認識的なモダリティ，拘束的なモダリティ，動的なモダリティに関するものである．

4.1　モーダル体系

4.1.1　異なる体系の形式的な同一性

概念的に認識的なモダリティと拘束的 / 動的モダリティはほとんど共通しないように見えるかもしれない．1.2.2 で示したように，認識的なモダリティは命題の真理値または現実のありように対する話し手の態度（命題のモダリティ）にもっぱら関連するものであり，一方拘束的，動的モダリティは現実化されていない出来事を言及し，その出来事は行われておらず単に潜在的に過ぎないものである（出来事のモダリティ）．しかし英語（多くの言語）では，同一の形式が両タイプに用いられる．例えば以下の用例は認識的，または動的のいずれかに解釈されうる．

He may come tomorrow
The book should be on the shelf
He must be in his office

彼は明日来るかもしれない（彼は明日来てもよい）
その本は恐らく本棚にあるだろう（その本は本棚にあるべきだ）
彼は会社にいるに違いない（彼は会社にいなければならない）

同一の動詞が異なるタイプのモダリティに用いられるところでは，形式の中にしばしば僅かな違いがある．これについては 4.2.3 で要約されるだろう．そのような違いは，そのタイプが概念的に異なるだけではなく文法的にも異なることを示しているが，なぜその形式が基本的に同じであるのかを説明してはいない．違いに関する一つの例は現代ギリシャ語に見出せる．そこでは以下のように，非人称形式は認識的な可能性として用いられるが，（主語に一致する）動詞の人称形式は（拘束的な）許可または（動的な）能力として用いられる．

ta peðjá borí na fɪɣun ávrio
the children BORO+3SG+PRES+IMPFV that leave+3PL+PRES+PERFV tomorrow
'The children may leave tomorrow'
子供たちは明日発つかもしれない.

ta peðjá borún na fɪɣun ávrio
the children BORO+3PL+PRES+IMPFV that leave+3PL+PRES+PERFV tomorrow
'The children may/can leave tomorrow'
子供たちは明日発ってもよい / 子供たちは明日発つことができる.

最初の例では，モーダルな動詞(*borí*)は単数であり，複数を表す主語と一致していない．したがって認識的に解釈されるべきである．二番目の例では，動詞(*borún*)は複数であり，主語に一致している．したがって拘束的（許可）あるいは動的（能力）に解釈されるべきである．

命題のモダリティと出来事のモダリティの両者に関して同一の形式を使用することは，純粋なヨーロッパ言語の現象ではない．同じことはドラビダ語族のタミル語(Asher 1982:171)にも当てはまり，そこでは'許可｛permission｝'と'義務｛debitive｝'として分類される二つの接辞が認識的なモダリティ，拘束的なモダリティとして用いられる．

Kantacaami vantaalum vara-laam
Kandaswami come+CONCESS come-PERM
'Kandaswami may perhaps come'
Kandaswami は恐らく来るかもしれない.

veeɳum-ɳɳaakkaa naaɭekki avan peeca-laam
want-COND tomorrow he speak-PERM
'If he wants, he can speak tomorrow'
もし彼が望むなら，彼は明日話せる.

Gaɳeecan ippa Mannaarkuʈiyile irukka-ɳum
Ganesan now Mannargudi+LOC be-DEB
'Ganesan must be in Mannargudi now'
Ganesan は今頃 Mannargudi にいるに違いない.

avan aŋke pooka-ɳum
he there go-DEB
'He must go there'

彼はそこに行かなければならない.

すでに部分的に記した（1.4.5，3.2.2，3.5）Ngiyambaa 語（Donaldson1980:160-2）のように，単独の形式が拘束的あるいは認識的のいずれかに用いられる場合がある，他の非インド - ヨーロッパ語がある.

yuruŋ-gu ŋidja-l-i
rain-ERG rain-CM-PURP
'It is bound to rain'
雨が降るに違いない.

ŋadhu bawuŋ-ga yuwa-giri
I+NOM middle-LOC lie-PURP
'I must lie in the middle'
私は真ん中に横たわらなければならない.

yuruŋu ŋidja-l-aga
rain-ERG rain-CM-IRR
'It might/will rain'
雨が降るかもしれない / 降るだろう.

waŋa:y-ndu-gal dhagurma-gu yana-y-aga
NEG-2NOM-PL cemetery-DAT go-CM-IRR
'You shall none of you go to the cemetery'
あなた以外の人はお墓に行ってはいけない.

（しかし二番目の用例のペアについてのコメントは 3.2.2 を参照）

いくつかの言語では 'may' に関してのみペアがある. したがって Tütatulabal 語(Steele 1975:207 Voegelin から引用)では，'許可 {permissive}' の接辞は次のように二つの意味で用いられる.

hatda:w-aha-bi
cross-PERM-SM
'You may cross it'
あなたはそれをわたってもよい.

wɨː-aha-dza
run-PERM-SM
'It might run'
それは走るかもしれない.

口語の Cairene アラビア語(Gary and Gamal-Eldin 1982:98-9)では同一の形式が'must'の二つの種類として用いられるが,'may'については異なる形式がある.

laazim tiẋallas　　bukra
must　you+SG-finish　tomorrow
'You must finish tomorrow'
あなたは明日終えなければならない.

laazim jikuun hinaak
must　he.be　there
'He must be there'
彼はそこにいるに違いない.

tiʔdari　　tifuuti　　min　hina
you+SG.can/may you+SG.pass from here
'You can/may pass through here'
あなたはここを通ることができる / 通ってもよい.

jimkin　　jikuun hinaak
probable/possible he.be　there
'He may be there'
彼はそこにいるかもしれない.

Bybee 他(1994:195)は'must'については Abkhaz 語から,'may / can'については Lao 語から例を挙げている. 彼らはまた, Baluchi 語には英語の *should* に匹敵する(2.1.5, 3.2.3 参照)弱い義務 {obligation} と弱い判断 {judgment} の両方を表す形式について類似した認識的 - 拘束的なペアがあることを記している.('接続法'としてマークされる)形式はモーダル体系というよりもムードに関する事柄である場合があるが, さらに拘束的なものと認識的なものの関係を例証している.

a　　ešā bỳbart
3SG 3PL take.away +3SG+SUBJ
'He ought to take them away'
彼はそれらを持ち去らなければならない.

ma bəkly　adda kəssa　　bỳzanə
1PL perhaps there someone know+1PL+SUBJ1
'Perhaps we know someone there'
恐らく私たちはそこの誰かを知っている.

ここでの例は，命題のモダリティと出来事のモダリティの両者だけではなく，拘束的，動的モダリティについても，認識的モダリティ，そして拘束的モダリティとして用いられる同一の形式を示している．同一の形式はまた英語のように拘束的モダリティと動的モダリティとして用いられる.

He can come in now
He can run a mile in under four minutes
彼は今入ってもいい.
彼は4分以内で1マイル走ることができる.

これは例えばイタリア語のPOTEREのように，他の言語においても同じ形式が当てはまる．またLisu語(3.3.1で議論された)にも当てはまる.

ása　nya ami　khwa da-ạ̰
Asa TOP field hoe　acceptable-DEC
'It is acceptable for Asa to hoe the field'
'Asa is (physically) able to hoe fields'
Asaが畑を耕すのは納得できる.
Asaは（身体的に）畑を耕せる.

4.1.2　可能と必然

実際にはなぜ同じ形式がモダリティの異なるタイプで用いられるのかということに関する単純な説明がある．その説明は可能と必然の観点からされており，そこでLyons(1977:787)は，「伝統的なモーダル理論の中心的な概念」と言っている．確かに‘認識的なもの｛epistemic｝’や‘拘束的なもの｛deontic｝’，‘動的なもの｛dynamic｝’といった術語はVon Wright(1951:1-2, 28)によるモーダル理論において最初の研究から使われている.

したがって認識的な**推測**｛Speculative｝と**推定**｛Deductive｝は認識的に可能なものと認識的に必然なものという観点から解釈しうる.

John may be in his office
= It is epistemically possible that John is in his office
John must be in his office
= It is epistemically necessary that John is in his office
ジョンは会社にいるかもしれない.
＝ジョンが会社にいるということは認識的に可能である.
ジョンは会社にいるに違いない.
＝ジョンが会社にいるということは認識的に必然である.

同様に拘束的な**許可**｛Permissive｝と**義務**｛Obligative｝は拘束的に可能なものと拘束的に必然なものという観点から解釈しうる.

You may/can go now
= It is deontically possible for you to go now
You must go now
= It is deontically necessary for you to go now
あなたは今行ってもよい / 行ってもよい.
＝あなたが今行くことは拘束的に可能である.
あなたは今行かなければならない.
＝あなたが今行くことは拘束的に必然である.

一つの制限がある. *necessary* という単語はそれ自身が通常の言語（論理的な術語とは反対の）において認識的な意味で用いられることはない. 半論理的言語では, *It is necessarily the case that John is in his office.* と言うことは可能だが, **It is necessary that John is in his office* とは通常言わない. possible については問題がない. つまり *It is possible that John is in his office.* は完璧に自然である.

さらに認識的なものと拘束的なものの使用は‘possible / necessary that’と‘possible / necessary’の観点から区別されうる.

It is possible that John is in his office
It is ‘necessary’ that John is in his office
It is possible for John to be in his office
It is necessary for John to be in his office

ジョンが会社にいることは可能だ.
ジョンが会社にいることは‘必然’だ.
ジョンが会社にいることは可能だ.
ジョンが会社にいることは必然だ.

最初の二つは認識的で，残りの二つは拘束的である（三番目の例は認識的にも解釈される場合もあるが).

モーダル体系において可能と必然の重要性は否定における動詞の分布によって示されることである．しかしモーダル動詞の否定に用いた形式についての環境は世界の様々な言語で非常に異なるので，その環境については次の二つのセクションでより詳細に例証されるだろう.

4.1.3　英語における可能性，必然性と否定

英語において認識的な可能性｛epistemic possibility｝に関するモーダルな形式で見られるように，モーダルな表現が否定される場合には二つの異なる方法がある.

Mary may be at school
Mary may not be at school
Mary can't be at school
メアリーは学校にいるかもしれない.
メアリーは学校にいないかもしれない.
メアリーは学校にいるはずがない.

可能と必然の概念の使用について，否定の二つのタイプを説明するのは容易である．一つは‘possible not’という観点から，他方は‘not possible’という観点から解釈される．‘possible not’については，命題の否定であるとされることもあり，他方‘not possible’はモダリティの否定であるとされることもある.

It is possible that Mary is not at school (‘may not’, proposition negated)
It is not possible that Mary is at school (‘can't’, modality negated)
メアリーが学校にいないのは可能だ.（‘may not’，否定された命題）
メアリーが学校にいるということは可能ではない.
（‘can't’，否定されたモダリティ）

形式的にはその違いというのは‘not possible’という動詞を変えることによ

るもののように見える. つまりMAYの代わりにCANを使うということである.

類似した違いとして‘necessary not’と‘not necessary’がありうる. しかし認識的な必然{epistemic necessity}の否定に用いられるMUSTには類似した形式がない. 使用可能な唯一の形式は次のものである.

Necessary	John must be in his office
Necessary not	John can't be in his office
Not necessary	John may not be in his office
Necessary	ジョンは会社にいるに違いない.
Necessary not	ジョンが会社にいるはずはない.
Not necessary	ジョンは会社にいないかもしれない.

これらの否定形式について即座に注目するに値することは, それらは認識的な可能で用いられたのと同じものであるが, 但し順番が逆になっている.

これについて極めて簡単な説明がある. ‘not possible’は‘necessary not’と論理的に等しく, 反対に‘not necessary’は‘possible not’に等しいという点で可能と必然の論理的な関係を持つのである. 論理的な術語では以下のようになる.

Not possible ≡ Necessary not
Not necessary ≡ Possible not

‘necessary not’を表現する場合, 英語は‘not possible’(can't)の形式を使用し, ‘not necessary’については, ‘possible not’(may not)という形式を使用する.

したがってMAYとCANの形式は認識的な可能と必然に関するすべての否定に備えている. そこには補充法がある. 認識的な必然の否定形式は認識的な可能に関する形式によって補充法的に与えられている. Lyons(1977:802)は「少なくとも英語では, 認識的なモダリティの分析において必然よりも可能が基本{primitive}になると考えられるべきでる」と指摘した.

つまりこれら否定形式には二つの特徴があり, 一つは異なる動詞(MAYについてCANを用いる)の使用であり, もう一つは補充法である. これら二つの特徴は拘束的なモーダルについても見出せるが, さらに異なる方法である. 可能な形式は以下のように例示される.

Possible	Mary may/can come tomorrow
Possible not	Mary needn't come tomorrow
Not possible	Mary may not/can't come tomorrow

Possible　メアリーは明日来るかもしれない / 来るはずだ.
Possible not　メアリーは明日来る必要がない.
Not possible　メアリーは明日来ないかもしれない / 来られない.

必然の形式の用例は次のようなものである.

Necessary　Mary must come tomorrow
Necessary not　Mary mustn't come tomorrow
Not necessary　Mary needn't come tomorrow
Necessary　メアリーは明日来なければならない.
Necessary not　メアリーは明日来てはならない.
Not necessary　メアリーは明日来る必要がない.

Lyons の意味における‘基本｛primitive｝’こそが拘束的なモダリティに関して必然であると見受けられる.　なぜなら異なる動詞が用いられるのは (MUST の代わりに NEED というように), 必然の形式に関してだからであり, ‘Possible not’, ‘Not necessary’ については *needn't* が要求される.

動的モダリティについては問題がない. 通常モダリティだけが否定される.

He can't run a mile in four minutes　(is unable)
He won't answer　(is unwilling)
彼は４分で１マイル走ることができない.（不可能）
彼は答えようとしない.（気が進まない）

何かができる｛being able｝と何かをしたくないということ｛willing not to do something｝は, *able not to* と *willing not to* によって, より表される.

そしてそこには重要な疑問点がある. つまりなぜ *may not* と *can't* は異なる解釈があるのかということである. また同じ疑問が *mustn't* と *needn't* にも当てはまる. 形式的にはそれらは明らかにモーダルの否定であり, モダリティが形式的にモーダルと関連しているならば, モダリティの否定に関して, 最初の二つの予想される解釈は‘not possible’であり, 二番目の二つは‘not necessary’となるだろう. may not を‘not possible’と解釈する一方で, *mustn't* を‘necessary not’として解釈することは, 文法と概念的な解釈が一対一で対応せず, ある意味において否定マーカーの一つが‘誤った’場所にあるということを示唆している.（否定が語彙的な動詞に関係すると議論されるならば, 問題は残るのだが, 異なった形式のために誤った場所にある否定については問題は残らない.）

英語における否定に関して, 一貫したすべてのパターンが現われないにもか

かわらず，数名の研究者は説明を求めている．Cormack and Smith（近刊書）はモダリティの否定と命題の否定の間にある‘分裂｛split｝’は，主に可能 / 必然に一致すると論じている．一方 Coates(1983:237-9)は，それは拘束的なもの / 認識的なものの違いに依拠しており，拘束的な *mustn't* についのみ例外であると論じている．実際に認識的な *may not, can't* と拘束的な *mustn't, needn't* のコントラストは二つの見解に例外を与えている．最初の見解は *may not*（命題の否定に関する可能性）と *needn't*（モダリティの否定に関する必然性）に対する説明で失敗している．二番目の見解は‘例外的な’*mustn't*（命題の否定に関する拘束的なもの）だけではなく，*can't*（モダリティの否定に関する認識的なもの）によっても矛盾が生じている．他の言語を考察するのが役立つだろう．

4.1.4　他の言語における可能性，必然性と否定

論理的な等価物や代替的な動詞の使用がされないという観点から，補充法がないという意味において，すべてに関与的なモーダルの否定が一定であるということが期待されうる．実際に 30 以上の言語や方言の調査において(Palmer 1995,1997)発見されなかった．拘束的な‘not necessary’の形式のみが不規則であるという点で現代ギリシャ語が最も近い．形式は以下のようなものである．

bori　　na　ine　　sto　ɣrafio tus
BORO+3SG+IMPFV that they.are in.the office　theirs
‘They may be in their office’　(epistemic possibility)
彼らは会社にいるかもしれない．(epistemic possibility)

ðen bori　　na　ine　　sto　ɣrafio tus
NEG BORO+3SG+IMPFV that they.are in.the office theirs
‘They can't be in their office’　(not possible)
彼らが会社にいるはずがない．(not possible)

bori　　na　min ine　　sto　ɣrafio tus
BORO+3SG+IMPFV that NEG they.are in.the office　theirs
‘They may not be in their office’　(possible not)
彼らは会社にいないかもしれない．(possible not)

prepi　　na　ine　　sto　ɣrafio tus
PREPI+3SG+IMPFV that they.are in.the office　theirs
‘They must be in their office’　(epistemic necessity)
彼らは会社にいるに違いない．(epistemic necessary)

ðen prepi　　na　ine　　sto　ɣrafio tus
NEG PREPI+3SG+IMPFV that they.are in.the office　theirs
'They may not be in their office'　(not necessary)
彼らは会社にいないかもしれない．(not necessary)

prepi　　na　min ine　　sto　ɣrafio tus
PREPI+3SG+IMPFV that NEG they.are in.the office　theirs
'They can't be in their office'　(necessary not)
彼らは会社にいないはずだ．(necessary not)

boris　　na　fiɣis
BORO+2SG+IMPFV that you.leave
'You may leave'　(deontic possibility)
あなたは出発してもいい(deontic possiblility)

ðen boris　　na　fiɣis
NEG BORO+2SG+IMPFV that you.leave
'You can't/may not leave'　(not possible)
あなたは出発できない / 出発してはいけない(not possible)

boris　　na　mi　fiɣis
BORO+2SG+IMPFV that NEG you.leave
'You needn't leave'　(possible not)
訳なし

prepi　　na　fiɣis
PREPI+2SG+IMPFV that you.leave
'You must leave'　(deontic necessity)
あなたは出発しなければならない．(deontic necessity)

prepi　　na　mi　fiɣis
PREPI+3SG+IMPFV that NEG you.leave
'You mustn't leave'　(necessary not)
あなたは出発してはいけない．(necessary not)

拘束的な'not necessary'の形式のみがこのパラダイムから欠けている．それを表現するには，異なる動詞を使うことによる二つの形式がある．

ðen ine anangi　na　fiɣis
NEG is　necessary that you.leave
'You needn't leave'　(not necessary)
あなたは出発する必要がない．(not necessary)

ðen xriaxete　na　fiɣis
NEG it.is.needed that you.leave
'You needn't leave'　(not necessary)
あなたは出発する必要がない．(not necessary)

ここで議論されている意味における不規則性にはいくつかの可能性があるが，その中で３つが最も重要である．

（ｉ）異なる動詞を用いる．
（ii）論理的な補充法．
（iii）否定マーカーの位置．（'誤った位置｛misplacement｝'）

これらは順をおって考えられるだろう．

異なる動詞を用いるのは英語と現代ギリシャ語ですでに例証された．またドイツ語（だけではなく他の言語でも）にも見出せる．

Du magst　herein kommen
you MÖGEN+2SG+PRES+IND here　come
'You may/can come in'
あなたは入ってもいい / 入ってもいい．

Du darfst　nicht herein kommen
you DÜRFEN+2SG+PRES+IND not　here　come
'You can't/may not come in'
あなたは入ることができない / 入ることができない．

Du kannst　nicht herein kommen
you KÖNNEN+2SG+PRES+IND not　here　come
'You can't/may not come in'
あなたは入ることができない / 入ることができない．

論理的な補充法があるところでは，それは二つのタイプからなる．最初のタ

イプには可能の形式が必然の形式に補充法的に用いられている．これは英語の認識的なモーダルに関してすでに例証したが，類似した状況を持つ英語と無関係の言語はAssamase語（Jiyoti Tamuliとの個人的なやりとり）がある．‘possoble not’と‘not possible’には否定マーカーによってなされる違いがある．

ɔfisɔt tʰak-ibɔ pare
office be-INF　he.can
‘He may be in his office’
彼は会社にいるかもしれない．

ɔfisɔt na tʰak-ibɔ pare
office not be-INF　he.can
‘He may not be in his office’
彼は会社にいないかもしれない．

ɔfisɔt tʰak-ibɔ nɯare
office be-INF　NEG+he.can
‘He can’t be in his office’
彼は会社にいるはずがない．

しかし必然性の否定に関して，可能の形式は英語のように補充法的に用いられる．

ɔfisɔt tʰak-ibɔ lage
office be-INF　he.must
‘He must be in his office’
彼は会社にいるに違いない．

ɔfisɔt tʰak-ibɔ nɯare
office be-INF　NEG+he.can
‘He can’t be in his office’
彼は会社にいるはずがない．

ɔfisɔt na tʰak-ibɔ pare
office not be-INF　he.can
‘He may not be in his office’
彼は会社にいないかもしれない．

補充法の二番目のタイプについては，‘possible not’，‘necessary not’というように命題を否定するためんび補充法的に用いることは，モーダルを否定（‘not possible’，‘not necessary’）する形式である．これはデンマーク語の認識的モダリティから例証される．そこには二つだけの形式がある．(Daviidsen-Nielsen 1990:78-87)

Det kan ikke være sandt
that can not be true
‘That can’t be true’
あれは真実ではない．

Det behøver ikke være sandt
that must not be true
‘That may not be true’
あれは真実ではないかもしれない．

これらには少し説明が必要である．デンマーク語（ほとんどのゲルマン諸語）では，否定は通常動詞の後に現われるため，上の用例で形式的に否定されているのはモーダルであり，モダリティの否定について予期される解釈は‘not possible’と‘not necessary’であろう．命題の否定（‘possible not’と‘necessary not’）に関して，最初の用例は‘necessary not’を，二番目の用例は‘possible not’を表しているため，そこには補充法がある．しかし見て取れるように，補充法は英語におけるように，必然の形式に関して用いられる可能の形式という観点ではなく，命題を否定する形式に関して用いられるモーダルを否定する形式という観点なのである．

この特徴はまた，ウェールズ語の形式的な変種である拘束的モダリティにおいても見出せる．以下のようにそこには二つの形式がある．

(Ni) gewch chi ddim ddod yfory
(not) get you not come tomorrow
‘You can’t come tomorrow’
あなたは明日来てはいけない．

(’d oes) ddim rhaid i chi ddod yfory
(It is not) not necessary to you come tomorrow
‘You needn’t come tomorrow’
あなたは明日来る必要がない．

これらは表現上では‘not possible’と‘not necessary’だが，しかしまた‘necessary not’と‘possible not’を表すのにも用いられる．

三番目の可能性は，文法マーカーと概念的解釈が一致しないという意味において，否定が誤った所に置かれるか、現われるということである．この点を非常に明確にするには，先に挙げた現代ギリシャ語の例が再考されるだろう．なぜならそれらは接続詞 *na* を伴って従属節を包んでいるので，否定は主節か従属節のどちらかに現われる場合があるということが見て取れるのである．更に否定が主節（モーダルを含む）に現われるとき，その解釈は‘not possible’または‘not necessary’であり，従属節（語彙的な動詞を含む）に現われるときは，その解釈は‘possible not’または‘necessary not’である．これは予期されたことである．つまりモーダル動詞の否定はモダリティの否定を示すのである．

Picallo(1990:287)によると，Catalan 語もそのようである．

En Jordi pot no haver sortit
the Jordi can not have+INFIN leave+PART
‘It is possible that Jordi hasn’t left’
ジョルディが出発していないのは可能である．

En Jordi no ha pogut sortir
the Jordi not has can+PART leave+INFIN
‘Jordi hasn’t been able to leave’
ジョルディは出発できずにいる．

しかしながら，ここでは訳が示しているように，本動詞の否定は常に命題のモダリティ（認識的なもの）に関連し，モーダル動詞の否定は出来事のモダリティ（拘束的 / 動的）に関連する．

ここで曖昧さのいかなる可能性を避けるために，二つの区別が必要とされる．モーダル動詞と語彙的動詞といった文法的な区別と，モダリティと命題といった概念的な違いである．現代ギリシャ語（ほとんどの部分について）のように規則的な体系において，（文法的な）語彙的動詞の否定は（概念的な）命題の否定を指し示すのである．

しかしこの意味において不規則な言語も多くある．最も一般的には拘束的な必然のモーダルの文法的な否定があるところで起る．以下の Kinyarwanda 語とアラビア語からの例を考えよ．

agomba kwinjira
he.must to.come.in
'He must come in'
彼は入らなければならない.

ntagomba　kwinjira
NEG+he must to.come.in
'He mustn't come in
彼は入ってはならない.

la:zim jizi
must　you.come.in
'You must come in'
あなたは入らなければならない.

ma:/mu la:zim jizi
NEG　must　you come in
'You mustn't come in'
あなたは入ってはならない.

用例の両方の組において，Kinyarwanda 語ではその形態によって，アラビア語では否定がそれに先立つことという事実によって，モーダル動詞は形式的に否定されている．しかし概念的にはモダリティではなく，命題が否定されているのである．その解釈は 'necessary not' であって 'not necessary' ではない．そこに '誤った場所{misplacement}' または否定のマーカーの '逆転{reversal}' があると言われる場合もある．

同じことがフランス語とイタリア語にも当てはまる．

il faut　partir
it is.necessary to.go
'We must leave'
私たちは出発しなければならない.

il ne　faut pas　partir
it NEG is NEG necessary to go
'We mustn't go'
私たちは出発してはいけない.

Deve　　venire
dovere+3SG+PRES+IND to.come
'You (he/she) must come'
あなた（彼 / 彼女）は来なければならない.

Non deve　　venire
not　dovere+3SG+PRES+IND to.come
'You (he/she) mustn't come'
あなた（彼 / 彼女）は来てはいけない.

（実際にはイタリア語の形式は'あなたは来る必要がない'という転置ではない｛no displacement｝規則的な解釈も持つ場合もあるという点で，曖昧である．しかしそれは'necessary not'を表す唯一の普通の方法である.）

ゲルマン諸語における状況は完全に確実なものではない．なぜなら否定は通常モーダルと語彙的動詞の間という唯一の場所でしか起らないからである．それにもかかわらず，否定辞は自らが（概念的に）否定する動詞の後に続くのが普通である．否定に関するゲルマン語の形式の規則的な解釈は，それゆえ否定されるのはモダリティであるということである.

この解釈では，ドイツ語の拘束的な必然の形式は規則的であり，ノルウェー語は不規則である．否定されたドイツ語の中でMÜSENは'not necessary'を表し，DÜRFENは'necessary not'に関して補充法的に要求される（上記を見よ）.

Du musst　　nicht herein kommen
you MÜSSEN+2SG+PRES+IND not　here　come
'You needn't come in'
あなたは入る必要がない.

Du darfst　　nicht herein kommen
you DÜRFEN+2SG+PRES+IND not　here　come
'You may not come in'
あなたは入らないかもしれない.

反対にノルウェー語では，必然の動詞の否定は'necessary not'を指し示し，非モーダル形式は'not necessary'について用いられる.

Han må　ikke forlate rommet
he　must not　leave　the.room
'He mustn't leave the room'
彼は部屋を離れないようにしなければならない.

Han trenger ikke forlate rommet
he　must　not　leave　the.room
'He needn't leave the room'
彼は部屋を離れる必要がない.

文法的に否定はモーダルに属する．概念的に，ドイツ語で否定されるのはモダリティであるが，ノルウェー語では否定されるのは命題である．
また英語ではこの意味において不規則である．

You mustn't come
あなたは来ないようにしなければならない.

恐らくこれは驚くべきことである．なぜなら否定がモーダルに接語化され，そして否定されているのがモダリティであるということを更に強く（しかし誤って）示しているようだからである．
しかしこの否定の不規則な転置｛displacement｝は拘束的な可能性に限定されていない．英語の二つのあり得る解釈を考えよ．

Mary may not come tomorrow
メアリーは明日来ないかもしれない.
メアリーは明日来てはいけない.

認識的な意味ではそれは規則的（'possible not'）だが，拘束的な意味では（現在では非常に格式ばっていて，通常用いられないが），それは不規則的（許可を拒否する'not possilble'）である．
拘束的な必然に関して，この否定マーカーの逆転｛reversal｝は世界の言語では広範囲に及んでいる．Palmer1995 で調査された 20 の言語のうち，10 の言語で起っている（Palmer1996 で調査された言語はすべてゲルマン語であり，反転は稀であった）．なぜこのようになるのかは難問である．そこには恐らく二つの理由があるかもしれない．それは'not necessary'の形式に対する必要性が比較的少ないということと，文中で否定が先に位置するということは禁止を強調しているのである．したがって'necessary not'は，より自然に関連する'not necessary'の形式を占領しているのである．

モダリティと否定の関係に関する詳しい研究についてはDe Haan(1997)を参照せよ.

4.1.5　概念的な結び付き

当然のことながら，認識的なモダリティと拘束的なモダリティの密接な関係は先に記された．Joos(1964:195)は，「モーダル体系の中に英語は義務｛duty｝と論理｛logic｝の区別がない」とした．しかしなぜ真実に対して，また他人に何かをさせようとすることについて，話し手の専心の度合いを表すために同一の形式が用いられなければならないのか明確な理由が直接ないというがめったに記されてこなかった．Steel, Alemajias and Wasow(1981:21)が正当化または説明することなしにコメントしているように，許可が可能性に対して‘関連する概念’であったり，または必要が確実性に対する概念であるということは決して明確ではない.

最も詳細で妥当な説明はSweetser(1982, 1990)であるが，彼は「認識的な世界｛epistemic world｝は社会物理的な世界｛sociophysical world｝の観点から理解される」と論じており，処格理論｛locative case theory｝の考え方と実際には同一であるという考え方である(Anderson 1971)．SweetserはMAYは「社会物理の中で潜在的な障害の欠損」であるが，認識的なMAYは「推論の世界における類似した場合」であると示唆し，そしてその意味世界は「表された結論に対して利用できる前提から，話し手の推論の過程に対して障害がない」と示唆した．また‘障害がない｛no barrier｝’というこの考えは，Ehrman(1966)によって先に述べられていたことであり，彼はそれを*nihil obstat*として解釈している．類似した議論はMUSTについても適用できる.

Sweetserが英語において他の形式から証拠を挙げなかったとしたなら，これは妥当な推論以上のものではなかっただろう．彼女はINSIST, SUGGEST, EXPEXTのような動詞で類似した曖昧さを見出している.

I insist that you go to London
I insist that you did go to London
私はあなたがロンドンに行くべきだ.
私はあなたがロンドンに行ったという事実を主張する.

I suggest that you leave the room now
I suggest that you left the room to avoid being seen
私はあなたが今部屋を出ることをすすめる.
私はあなたが見られるのを避けるために部屋を離れた事実を暗示している.

次の文は二つの意味の間で曖昧である.

I expect him to be there
私はそこに彼がそこにいることを望む.
私はそこに彼がいるだろうと思う.

これらの考察について, *ask, promise, swear* のような動詞が認識的あるいは拘束的に用いられうるという事実が付け加えられるだろう.

I asked if he had come
I asked him to come
私は彼が来たかどうかを尋ねた.
私は彼が来るように頼んだ.

I promise you he's here
I promise you he'll come
私は彼がここにいるとあなたに断言する.
私は彼がここに来るとあなたに約束する.

I swear he's here
I swear I'll give it to you
私は彼がここにいると断言する.
私はあなたにそれをあげると誓う.

Sweetser はさらに理由を表す接続詞のなかで若干類似した曖昧さについて記している.

He came because he heard me screaming
He heard me screaming, so he came
(You say he's deaf, but) he came, so he heard me screaming
(You say he's deaf, but) he heard me screaming, because he came
彼は私が叫び声をあげたので聞いて来た.
彼は私の叫び声を聞いたので来た.
（あなたは彼が耳が聞こえないと言う．しかし）彼は来た．そして
彼は私が叫ぶのを聞いた.
（あなたは彼が耳が聞こえないと言う．しかし）彼は私が叫ぶのを聞いた．なぜなら彼は来たからだ.

最初の二つは行動に対する理由と関連付けられている．三番目と四番目は判断に対する理由と関連付けられている．類似した議論は，*therefore, since, although, despite, anyway* について見出せる．

同じことが他の言語にも当てはまる．例えばスペイン語の INSISTIR は，従属節において直説法が認識的なものの使用を示し，そして従属節における接続法は拘束的なものの意味を示すにもかかわらず，両方の意味で用いられる(Klein 1975:356, 彼は認識的 / 拘束的なものの区別を特に記していない).

Insisto que aprende
I.insist that learn+3SG+PRES+IND
'I insist that he's learning'
私は彼が学んでいることを主張する.

Insisto que aprenda
I.insist that learn+3SG+PRES+SUBJ
'I insist that he learn'
私は彼が学ばせるべきだ.

認識的な使用が動的 / 拘束的な使用から通時的に発達してきたという極めて納得できる議論がなされてきたことが付け加えられるだろう(Traugott 1989 を参照せよ).

4.2　モーダルな動詞

モーダルな動詞は判断 {judgement}，証拠 {evidentials}，拘束的なもの {deontic}，動的なもの {dynamic} といったモーダル体系において見出されるモダリティの主たる４つの全タイプで用いられる（証拠については極めて制限されている程度であるが).

4.2.1　英語におけるモーダルな動詞

英語が形式的に限定されうるモーダルな動詞のセットを持っているということは，英語に関する数多の議論があるという点で，モーダルな動詞の研究をするにあたっては恐らく幸いなことである．それらは MAY, CAN, MUST, OUGHT (TO), WILL, SHALL であり，周辺的なものとして NEED と DARE（*might, could, would, should* も含んでいる）がある．それらの事実については幾度も記されてきたが(例えば Palmer 1979,1990)，ここでは簡潔に要約する

に留めておく.

第一に, それらは助動詞の大きいセットの項であり, それは否定{negation}, 倒置{inversion}, ‘コード{code}’, 強調断言{emphatic affirmation}として現われるHuddleston(1976:333)がNICE特性と呼んだものを提示するのである(Palmer 1987:14-21参照). 以下のようなものである(2.6.1参照).

I can't go
Must I come?
He can swim and so can she
He will be there
私は行けない.
私は来なければならないのか?
彼は泳げるし, 彼女もそうだ.
彼はそこにいるだろう.

これらモーダルな動詞の特性はBEやHAVEといった他の助動詞とも分かつが, しかしそれらは独自の形式的な特徴を持っている.

(i) それらは共起しない. つまり*will can come, *may shall beなど(いくつかの方言には*might could*のような共起の非常に制限された可能性がある. これについてはBrown1991とCormack and Smithの近刊書によるコメントがある).
(ii) それらは三人称単数の-sの形式を持たない. 例えば**He oughts to come.* *wills*の形式は全体的に異なる意味において存在するが, 語彙的な動詞としての形式であり, *cans*も同様である(DAREは-sがある形式と無い形式の両方を持つ. 例えば*He dares to come. Dare he come?*である. これは語彙的な動詞とモーダル動詞の両方として機能するということを示唆している).
(iii) それらは非定型形式を持たない. 例えば**to can*または**canning*である. **I hope to can come tomorrow.*という形式もない.
(iv) それらは命令法を持たない. 例えば**Can be here!* **Must come now!*
(v) 他のもの(*could, should, might*など)にはあるが, MUSTは形態的に過去形を持たない. 他のものの中で*could*だけが過去時制について言及する際に用いられる(全ては報告された発話で起こる場合があるが).
(vi) 補充法的な否定の形式がある(4.1.3).
(vii) モーダルな動詞には, 過去と否定という観点から認識的, 拘束的な意味という点において形式的な違いがある.

4.2.2　他の言語におけるモーダルな動詞

ドイツ語やフランス語における類似した動詞に関して英語の動詞を比べることはためになる．ドイツ語は明らかに英語と同じ語族である KÖNNEN, DÜRFEN, MÖGEN, MÜSEN, SOLLEN, WOLLEN といったモーダル動詞の目録として６つの潜在的な候補を確かに持っている（しかし英語のモーダルと違ってそれらは不定詞形を有し，その使用において制限がより少ない）．これらは認識的にも拘束的にも用いられ，認識的な MAY は KÖNNEN または MÖGEN のいずれかによって訳され，拘束的な MAY は KÖNNEN または DÜRFEN のいずれかによって訳される．一方認識的，拘束的な MUST は MÜSEN によって訳される(Hammer1983:223ff. から例を挙げる).

Er kann/mag　　krank sein
he KÖNNEN/MÖGEN+3SG+PRES+IND ill　　be
'He may be ill'
彼は病気かもしれない.

Du　kannst/darfst　　den Bleistift behalten
thou KÖNNEN/DÜRFEN+2SG+PRES+IND the　pencil　keep
'You can keep the pencil'
あなたは鉛筆を持っていてもいい.

これらは英語のモーダルよりも文法体系の項として明確に見做されないが，しかしそれらは注目すべき特徴をいくつか持っている.

（ｉ）三人称単数現在直説法の *-t* が語末にない．例えば *kann, mag* (*gibt*　'gives' 参照)

（ii）従属節において動詞複合体の要素の順序は，もし要素の内の一つがもし助動詞の定型動詞と共起している不定形のモーダル動詞であるならば（英語で現われないように），変わる．通常の規則は終止形が最後に現われるが，これらの環境においては，動詞複合体の初めに現われる (Hammer 1983:224).

Es war klar,　dass er sich　　würde　　anstrengen müssen
It　was clear, that he himself be+3SG+IMPF+SUBJ exert　　must+INF
'It was clear that he will have to exert himself'
彼が自分のために努力しなければならないのは明白だった.

（語の順序は*anstrengen müssen würde ではない点に注意せよ.）スカンジナビア諸語に類似したモーダルな助動詞があるが，しかし「言語ごとに複雑なやり方で異なっている．それゆえに翻訳が難しい」(Haugen 1976:80).

フランス語の POUVOIR や DEVOIR, イタリア語の POTERE や DOVERE スペイン語の PODER や DEBER といったロマンス諸語には類似した動詞がある．フランス語やスペイン語の口語における状況は，認識的な可能性について非人称の *il peut que* と *puede que* の使用によって，そしてフランス語における拘束的な必然性については *il faut* の使用によって複雑になっている．しかしイタリア語の動詞は認識的，拘束的の両方の意味で用いられる．

può　　essere nell'　ufficio
POTERE+3SG+PRES+IND be　　in.the office
'He may be in the office'
彼は会社にいてもいい.

deve　　essere nell'　ufficio
DOVERE+3SG+PRES+IND be　　in.the office
'He must be in the office'
彼は会社にいなければならない.

può　　venire domani
PODERE+3SG+PRES+IND come　tomorrow
'He may/can come tomorrow'
彼は明日来るかもしれない / 来てもいい.

deve　　venire domani
DOVERE+3SG+PRES+IND come tomorrow
'He must come tomorrow'
彼は明日来なければならない.

ロマンス諸語ではモーダル動詞が明らかに限定されたセットであるという明確な文法的に示すものがないようである．(フランス語については，Kayne19751-27 によって記された周辺的なものの特徴があるが，Ruwet(1967:185ff)を参照). しかしイタリア語とスペイン語の動詞は否定に関する特徴という観点で類型論的に興味深い.

モダリティを表現するための助動詞の使用はヨーロッパ諸語に特徴的であるが，ヨーロッパ諸語に限ったことではない．標準中国語(Li and Thompson

1981:173-88)は形式的に限定されうる助動詞のセットを持っている.

（ｉ）それらは語彙的な動詞と共起しなければならない（あるいは少なくとも文脈から理解されなければならない).
（ii）それらはアスペクトや強意語｛intensifiers｝のマーカーを持たない.
（iii）それらは主語に先行できない.
（iv）それは目的語を持っていない.

これらの全ては意味の点ではモーダルである．以下にリストを挙げる.

yīnggāi, yīngdang, gāi	'ought to, should'
néng, nénggòu, huì, kěyi	'be able to'
néng, kěyi	'have permission'
gǎn	'dare'
kěn	'be willing to'
děi, bixū, bìyào, bíděi	'must, ought to'
huì	'will, know how'

中国語の動詞には屈折がないにもかかわらず，これらの助動詞は本質的には動詞のように思える．また屈折語であり，人称 - 数に関してマークされるCashibo 語(Peru-Shell 1975:178-91)には助動詞の組があるが，それは恐らくモーダル体系というよりも談話の体系に属するものだろう(2.6.1 参照).

4.2.3　形式的な違い

英語では同一のモーダル動詞が認識的なものと拘束的なものの両方に用いられる場合があるが，一般的にその違いは極めて明確であり，それら二つのモーダル間の使用にはいくつか形式的な違いもあるということが先の議論で考察できた.

（ｉ）拘束的な MUST は否定の *mustn't* の形式を持たず，補充方的に *needn't* の形式を持つが，認識的な MUST は形態的に関連する否定の形式を持たない.
（ii）*May not* は拘束的なもののとき（許可ではなく)，モダリティを否定するが，認識的なもののとき（'It may be that it is not so'）は命題を否定する.
（iii）*have* に後続する MAY と MUST は常に認識的なものであり，決して拘

束的なものではない.

（iv）*can't* は認識的なものであるが，MAY は拘束的な使用のとき CAN によって置き換えられる.

更に未来について言及するときは，MUST はほぼ常に拘束的なものである. つまり認識的な意味は BE BOUND TO によって与えられる(Palmer 1979:45-6 を参照せよ. 議論については Coates1983:42-3 と Palmer 1983:291 を参照). また might は認識的な意味においてのみ現在時制の may と意味上密接に関連する.

同様に現代ギリシャ語では，同一の形式が拘束的なモダリティと認識的なモダリティについて用いられているにもかかわらず，統語上に違いがある. 第一に，4.1.1 と 4.1.4 で見たように，可能性に関しては BORO という動詞の形式が用いられるが，認識的な意味では非人称形式（三人称単数現在）が見出され，一方，拘束的な（動的な）意味では主語に一致する完全な屈折の形式がある.

更に多くの言語では，語彙的な動詞が例えば上記の英語における *may have* や *must have* のように過去としてマークされるならば，認識的な解釈のみが可能である. 現代ギリシャ語から例を挙げる.

o　janis prepi na　fiɣi　　avrio
the John PREPI that leave+3SG+PRES+PERFV tomorrow
'John must leave tomorrow'
ジョンは明日発たなければならない.

o　janis prepi na　efiɣe
the John PREPI that leave+3SG+PAST
'John must have left'
ジョンは発ったに違いない.

4.3　モーダル体系と他の範疇

4.3.1　ムード

本書の分割された部分の中でモーダル体系とムードを扱うと決めたことは，ほとんどの言語がモーダル体系あるいはムードを持っているという特徴づけがされうるという広範な事実次第である. しかしいくつかの言語では二通りのやり方で両者を持っている.

第一に，現実 {realis} と非現実 {irrealis} のマーカーに関するムード体系を持っている 2，3 の言語では(第 6 章)，非現実に関連する範疇は明らかにモーダル体系であるものを形成する場合がある. 例えば Hixkaryana 語と Serrano

語であり，その中で非現実としてマークされた範疇は明らかによく知られた証拠的な体系 {evidential system} に属している．これは 6.5.4 にて詳しく議論される．若干異なるのは中央 Pomo 語であり，中央 Pomo 語はそのムード体系から独立した証拠的なものの体系を有する(2.2.1 と 6.3.2 を参照).

第二に，ロマンス諸語は直説法と接続法によってマークされるムード体系を有するが，またモーダル動詞の組も持っている．しかし 4.2.2 で記したように，モーダル動詞はフランス語やイタリア語において完全に文法化されておらず，少なくとも接続法はその領域を失っているようである．ましてやそれはフランス語の口語で用いられず，また南イタリアの方言からもほとんど消滅してしまった．更に英語ではモーダル体系の状況は Anglo-Saxon 語のムードが消滅することに付随する(Lightfoot 1979, Plank 1984 この進化が行われる方法について両者の見解は異なる)．その示唆の理由としては概してその二つは共起しないようである，あるいはもし共起するならば，一つは結局他のものにとって代わるであろうということである．

4.3.2　未来

4.2.1 で提案された基準によって WILL と SHALL は形式的にモーダル動詞である．しかしそれらはしばしば未来の時について言及するのに用いられる（この意味で特にアメリカ英語では SHALL は今では一般的ではない)．確かに英語の伝統的な文法書ではそれらを‘未来時制’のマーカーとして扱っている．しかし Fries(1927)によって最初に議論されたように，‘未来時制’のマーカーはラテン語の文法から取り入れられた考えであるので，英語は未来時制を持たないとするのが妥当である．これに関していくつかの議論があるが，極めて単純にそれらは純粋な未来をしばしば指し示すのではなく，通常それらは条件未来に関連するということが重要なことである．確かに英語で BE GOING TO は‘未来時制’に関してより良い候補である(Palmer 1990:160-1 を参照．また説得力のある議論は Huddleston 1995 である).

モーダル動詞が未来の時間と関連を持つことは驚くべきことではない．未来については十分に調べられておらず，未来は未来の出来事が続いて起るという妥当な想定に過ぎない．確かに Lyons(1977:677,816)では次のように記されている．

未来は純粋な時間の概念ではない．つまりそれは叙述の要素やいくつか関連した概念を必ず含んでいる．

仮に未来について陳述や予言，あるいは現実的な質問を出したり尋ねたりということを成すだけに用いられるならば，未来時制として慣用的に用いられるものは稀である．またそれは想定{supposition}や推量{inference}，願望{wish}，

意図 {intention}，欲望 {desire} を含む非現実的な発話の狭かったり広かったりする範囲の中でも用いられる．

モーダルな形式ではなく，屈折体系の中に属する未来時制を持つそれぞれの言語はこれらの時制を類似した目的のためにしばしば用いるということが付け加えられる．英語の WILL や例に挙げるフランス語，イタリア語(Lyons 1968:310; Lepschy and Lepschy 1977:139)のように想定という意味においてこれらは用いられる．

Ça sera le facteur
that be+3SG+FUT+IND the postman
'That'll be the postman' (epistemic)
あれは郵便集配人だろう（認識的）

Suonano, sarà Ugo
they.are.ringing be+3SG+FUT+IND Ugo
'The bell's gone; it'll be Ugo'
鐘が鳴り終わった．Ugo だろう．

更にスペイン語の口語では，未来時制は通常未来の時を表すのに用いられるのではなく，この認識的な意味で用いられる．未来の時は動詞 IR に不定詞（'to go'）を足すことによって表される．

同様に英語は**約束** {Commissive} として二人称と三人称に SHALL を用いるが（SHALL ほど明確ではないにしろ，WILL も同じように解釈されうる），これはまたフランス語の未来時制にも当てはまる．

You shall have it tomorrow
You'll have it tomorrow
Vous l'aurez demain
あなたに明日それを持たせよう．
あなたに明日それを持たせよう．
あなたに明日それを持たせよう．

未来とモダリティの関連性はまた，歴史的に示すことができる．接続法から歴史的に派生した未来時制には数多の例がある．つまりこれはいくつかのラテン語の形式(Handford 1947:15 を参照)に当てはまるのである．他の言語はモーダルタイプの助動詞において独自の起源を持つ未来時制を持っている．したがって，現代ギリシャ語では，*tha* は THELO つまり 'I wish' の反映形であり，

スワヒリ語の未来を表すマーカーは，(ku)-taka つまり‘(to)wish’から派生したものであり，一方現代ロマンス諸語の未来は不定詞にHABEOつまり‘I have’を足したものから派生したものである．

最後に次の二つの章では，未来の時がムードによって表される場合と，接続法と非現実の両方によって表される場合を考察することになる．ここでは未来の時を指示するものの潜在的なモーダルな特徴についても例証する．

4.3.3　否定

モダリティと否定の最も重要な関係は可能性と必然性を含むという点である．しかし記されるべきいくつか違ったポイントがある．

第一に，否定｛negation｝（通常疑問｛interrogation｝を含む）はモーダル体系(2.3)とムード(5.2.3 と 6.6.4)に含まれる．

第二に，いくつかの言語は否定モーダル動詞と考えられるものを持つ．したがってラテン語は以下の例のように，動詞 NORO‘I refuse’を否定命令で用いる場合がある(*ne* に接続法を足したものも - 5.4.2 参照)．

Nolite　　facere
refuse+2PL+IMP do
‘Don’t do it’
それをするな．

ウェールズ語は同様に‘I cease’という動詞 PEIDIO を持っている．

peidiwch　　â　　gadael iddo fynd
cease+2PL+IMP from let　　him　go
‘Don’t let him go’
彼を行かせるな．

---

1) ｛｝は訳者が補ったものを表している．特に術語については必要に応じて原文の術語を訳文の後に付している．その他の（）や‘’といった記号は原書のままである．なお術語の訳についてはインデックスを参照．

2) 原文で頭文字が大文字となっている術語については，訳文ではボールドにする．なお原文中，頭文字を大文字で記す決まりについては，1.7 に詳しい．
3) 原文の術語がすべて大文字で記されている場合は訳に下線を施した．
4) 著者は 3 点としているが，以下実際に挙げられているのは 5 点である．原文のままとする．
5) このリストは巻末に添付されている．
6) 原文のまま．
7) 原文のまま．